

日田地区遺跡群発掘調査報告1
日田市埋蔵文化財調査報告書第15集

小迫辻原遺跡Ⅱ

OZAKOTUZIBARU SITE

H 区 編

2000

日田市教育委員会

序 文

九州のほぼ中心に位置する日田市は、江戸時代以後山紫水明の地として知られ、また市街地を流れる豊富な筑後川の水は“水郷”とも呼ばれました。

こうした自然環境に恵まれた日田市には多くの遺跡や文化財が残っていて、とくに古代の遺跡には弥生時代の日田の王墓として注目された吹上遺跡や、装飾古墳として知られているガランドヤ古墳・穴観音古墳などがあります。

昭和58年の大分自動車道建設に先立ち調査された小迫辻原遺跡は、日本最古の豪族居館跡の発見を契機に、遺跡の保存か開発かと言う大きな問題にあたり、関係者のご努力により遺跡は保護され、その後の調査においても相次いで重要な遺構が発掘されました。

こうした経過を経て、平成8年11月には国史跡の指定を受け、今では遺跡の本格的な保存整備の声があがっています。今後こうした文化財保護に対して本書が少しでも寄与できれば幸いに存じます。

最後に、長年にわたって発掘調査や本書作成までに多大なるご指導やご協力をいただきました関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成12年3月

日田市教育委員会教育長 加藤正俊

例 言

1. 本書は日田市教育委員会が地力増進事業および遺跡範囲確認調査に伴って、国庫補助事業および市単独事業として実施した大分県日田市所在小迫辻原遺跡の発掘調査報告書Ⅱである。
2. 本書で報告する遺跡は、平成2・3・5年度に日田市教育委員会が主体となり調査を行った小迫辻原遺跡のH-1区からH-4区の記録をH区として収集している。
3. 日田市教育委員会では今回報告するH区以外の調査も行っており、それらの報告については今後随時刊行する予定であり、本報告分の写真図版については既に刊行済みである。
4. 今回の調査報告に関する調査概要については、以下にあげる概報に速報している。
5. また、今回の調査報告に関する出土遺物ならびに実測図・写真等の資料については、日田市教育委員会にて保管している。
6. 本書の執筆・編集は土居が行った。

発掘調査報告書（刊行済み分）

- 田中裕介ほか 『小迫辻原遺跡 写真図版編』 大分県教育委員会・日田市教育委員会 1998
田中裕介ほか 『小迫辻原遺跡 A・B・C・D区編』 大分県教育委員会 1999

発掘調査概報（日田市教育委員会調査関係分）

- 土居和幸 「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』 日田市教育委員会 1988
土居和幸 「小迫辻原遺跡Ⅱ」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』 日田市教育委員会 1989
土居和幸 「小迫辻原遺跡Ⅲ」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅴ』 日田市教育委員会 1990
土居和幸 「小迫辻原遺跡Ⅳ」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅵ』 日田市教育委員会 1991
行時志郎ほか 『小迫辻原遺跡発掘調査概報』 日田市教育委員会 1991
土居和幸 「小迫辻原遺跡Ⅴ」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅶ』 日田市教育委員会 1992
土居和幸 『小迫辻原遺跡発掘調査概報Ⅱ』 日田市教育委員会 1992
土居和幸 「小迫辻原遺跡Ⅵ」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ』 日田市教育委員会 1993
土居和幸ほか 『小迫辻原遺跡』概要パンフレット 日田市教育委員会 1994

目 次

第8章 調査の方法と報告書の凡例	1
第1節 調査の方法	1
第2節 整理の経過	3
第3節 報告書の凡例	4
第9章 H区の記録	5
第1節 H区の調査概要	9
第2節 H-1区の調査	11
1) 調査の内容	11
2) 古墳時代前期	15
3) 中世・近世	37
第3節 H-2区の調査	38
1) 調査の内容	38
2) 弥生時代	43
3) 古墳時代前期	54
4) 近世	85
5) 採集遺物	87
第4節 H-3区の調査	88
1) 調査の内容	88
2) 弥生時代	89
3) 古墳時代前期	90
4) 中世	91
5) 近世	92
第5節 H-4区の調査	93
1) 調査の内容	93

挿 図 目 次

第 8 章

第 1 図	小迫辻原遺跡発掘調査区位置図 (1/5000)	2
-------	-------------------------------	---

第 9 章

第 1 図	H 区の調査位置図 (1/5000)	5
第 2 図	H 区の調査区位置図 (1/800)	7 ~ 8
第 3 図	H-1 区遺構配置図① (1/300)	10
第 4 図	H-1 区遺構配置図② - 古墳時代前期 - (1/300)	12
第 5 図	H-1 区 1 号溝平面実測図 (1/100)	13 ~ 14
第 6 図	H-1 区 1 号溝実測図 (1/20) および同断面土層実測図 (1/40)	17 ~ 18
第 7 図	H-1 区 1 号溝出土の土器実測図① (1/4)	19
第 8 図	H-1 区 1 号溝出土の土器実測図② (1/4)	20
第 9 図	H-1 区 1 号溝出土の土器実測図③ (1/4)	21
第 10 図	H-1 区 1 号溝出土の土器実測図④ (1/4)	22
第 11 図	H-1 区 1 号溝出土の土器実測図⑤ (1/4)	23
第 12 図	H-1 区 1 号溝出土の土器実測図⑥ (1/4)	23
第 13 図	H-1 区 1 号溝出土の土器実測図⑦ (1/4)	24
第 14 図	H-1 区 1 号溝出土の石器実測図 (1/3)	25
第 15 図	H-1 区 1 号溝出土の鉄器実測図 (1/2)	25
第 16 図	H-1 区トレンチ 1 号溝実測図 (1/100) および同断面土層実測図 (1/40)	27 ~ 28
第 17 図	H-1 区トレンチ 1 号溝出土の土器実測図 (1/4)	29
第 18 図	H-1 区 2 号溝平面実測図 (1/100)	31 ~ 32
第 19 図	H-1 区 2 号溝実測図 (1/20) および同断面土層実測図 (1/40)	33
第 20 図	H-1 区 2 号溝出土の土器実測図 (1/4)	35
第 21 図	H-1 区 2 号溝出土鉄器の実測図 (1/2)	35
第 22 図	H-1 区遺構配置図③ - 中世・近世 - (1/300)	36
第 23 図	H-1 区 4 号溝出土の石器実測図 (1/3)	37
第 24 図	H-1 区 3・4 号溝出土の土器実測図 (1/4)	37
第 25 図	H-2 区遺構配置図① (1/300)	39 ~ 40
第 26 図	H-2 区遺構配置図② - 弥生時代 - (1/300)	41 ~ 42
第 27 図	H-2 区 1 号土坑実測図 (1/30)	43
第 28 図	H-2 区 1・3・5・6 号土坑 (1/30) および円形周溝遺構出土の土器実測図 (1/4)	44
第 29 図	H-2 区 2 号土坑実測図 (1/30)	45
第 30 図	H-2 区 3 号土坑実測図 (1/30)	46
第 31 図	H-2 区 3 号土坑出土の石器実測図 (1/3)	46
第 32 図	H-2 区 5 号土坑実測図 (1/30)	47

第 33 図	H-2 区 6 号土坑実測図 (1/30)	48
第 34 図	H-2 区 7 号土坑実測図 (1/30)	49
第 35 図	H-2 区 1 号墓実測図 (1/10)	50
第 36 図	H-2 区 2 号墓実測図 (1/10)	50
第 37 図	H-2 区 1・2 号墓土器実測図 (1/4)	51
第 38 図	H-2 区 3 号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	52
第 39 図	H-2 区円形周溝遺構実測図 (1/80)	53
第 40 図	H-2 区 1 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	54
第 41 図	H-2 区遺構配置図③-古墳時代前期- (1/300)	55~56
第 42 図	H-2 区 1 号竪穴住居跡出土の鉄器実測図 (1/2)	57
第 43 図	H-2 区 1・2 号竪穴住居跡出土の土器実測図 (1/4)	57
第 44 図	H-2 区 1 号竪穴住居跡出土の石器実測図 (1/3)	58
第 45 図	H-2 区 2 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	59
第 46 図	H-2 区 3 号 A 竪穴住居跡実測図 (1/60)	60
第 47 図	H-2 区 3 号 B 竪穴住居跡実測図 (1/60)	61
第 48 図	H-2 区 3 号 A 竪穴住居跡出土の土器実測図 (1/4)	62
第 49 図	H-2 区 3 号 A 竪穴住居跡出土の石器実測図 (1/3)	62
第 50 図	H-2 区 3 号 A 竪穴住居跡出土の鉄器実測図 (1/2)	62
第 51 図	H-2 区 5 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	63
第 52 図	H-2 区 5・6 号竪穴住居跡出土の土器実測図 (1/4)	64
第 53 図	H-2 区 5 号竪穴住居跡出土の鉄器実測図 (1/2)	65
第 54 図	H-2 区 5 号竪穴住居跡出土の玉実測図 (1/1)	65
第 55 図	H-2 区 6 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	66
第 56 図	H-2 区 7 号 A・7 号 B・8 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	67~68
第 57 図	H-2 区 7 号 A 竪穴住居跡実測図 (1/60)	69~70
第 58 図	H-2 区 7 号 B 竪穴住居跡実測図 (1/60)	71~72
第 59 図	H-2 区 8 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	73~74
第 60 図	H-2 区 7~9 号竪穴住居跡出土の土器実測図 (1/4)	75
第 61 図	H-2 区 8 号竪穴住居跡出土の石器実測図 (1/3)	76
第 62 図	H-2 区 7 号 A・7 号 B・8 号竪穴住居跡変遷図 (1/120)	76
第 63 図	H-2 区 9 号 A 竪穴住居跡実測図 (1/60)	77
第 64 図	H-2 区 9 号 B 竪穴住居跡実測図 (1/60)	78
第 65 図	H-2 区 9 号竪穴住居跡出土の鉄器実測図 (1/2)	78
第 66 図	H-2 区 9 号 A 竪穴住居跡出土の石器実測図 (1/3)	78
第 67 図	H-2 区 10 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	79
第 68 図	H-2 区 10 号竪穴住居跡出土の石器・鉄器実測図 (1/2)	80
第 69 図	H-2 区 10 号竪穴住居跡出土の土器実測図 (1/4)	80
第 70 図	H-2 区 1 号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	81

第71図	H-2区2号掘立柱建物跡実測図(1/80)	82
第72図	H-2区遺構配置図④-近世-	83~84
第73図	H-2区4号土坑実測図(1/30)	85
第74図	H-2区1号溝実測図(1/100)	86
第75図	H-2区表面採集の土器実測図(1/4)	87
第76図	H-2区表面採集の石器実測図(1/2)	87
第77図	H-3区遺構配置図①(1/300)	88
第78図	H-3区遺構配置図②-弥生時代-	89
第79図	H-3区出土の土器実測図(1/4)	89
第80図	H-3区出土の石器実測図(1/3)	89
第81図	H-3区遺構配置図③-古墳時代前期-	90
第82図	H-3区出土の土器実測図②(1/4)	90
第83図	H-3区遺構配置図④-中世-	91
第84図	H-3区出土の土器実測図③(1/4)	91
第85図	H-3区遺構配置図⑤-近世-	92
第86図	H-3区出土の土器実測図④(1/4)	92
第87図	H-4区トレンチ位置図(1/300)	93
第88図	H-4区2トレンチ出土の石器実測図(1/3)	94

挿入写真目次

写真1	小迫辻原遺跡全景写真（南より）	1
写真2	H区作業風景	5
写真3	H区の全景写真（カラー合成写真）	6
写真4	H-1区1・3号環濠	6
写真5	H-1区の調査風景より	9
写真6	H-1区1号溝の土器出土状況	15
写真7	H-1区1号溝の発掘状況	15
写真8	H-1区1号溝の土層断面	16
写真9	H-1区1トレンチ1号溝の土層断面	26
写真10	H-1区2号溝張出部の発掘状況（北より）	30
写真11	H-1区2号溝の土層断面（C-C'）	34
写真12	H-2区6号土坑遺物出土状況	49
写真13	H-2区1号竪穴住居跡遺物出土状況	57
写真14	H-2区5号竪穴住居跡遺物出土状況	64
写真15	H-2区10号竪穴住居跡遺物出土状況	80

表 目 次

第 1 表	H区豎穴住居跡等一覽表	95
第 2 表	H区掘立柱建物跡一覽表	96
第 3 表	H区土坑一覽表	97
第 4 表	H区墓一覽表	98
第 5 表	H区溝一覽表	99
第 6 表	H区方形周溝遺構一覽表	100
第 7 表	H区出土土器觀察表①	101
第 8 表	H区出土土器觀察表②	102
第 9 表	H区出土土器觀察表③	103
第 10 表	H区出土土器觀察表④	104
第 11 表	H区出土土器觀察表⑤	105
第 12 表	H区出土土器觀察表⑥	106
第 13 表	H区出土土器觀察表⑦	107
第 14 表	H区出土石器觀察表	108
第 15 表	H区出土鉄器觀察表	109
第 16 表	H区出土玉類觀察表	110

第8章 調査の方法と報告書の凡例

1987～93年度に日田市教育委員会が地力増進事業並びに遺跡の範囲確認調査等に伴い発掘調査を実施した小迫辻原遺跡のG～R区の調査方法と整理の経過ならびに報告書の作成や報告書の凡例についてまとめる。

第1節 調査の方法（第1図）

日田市教育委員会が行った小迫辻原遺跡の発掘調査の経緯については、第1章第2節調査の経過の2に触れているが、そもそもは地力増進事業と呼ばれる農業開発を発端に開始した。その時点ではすでに、同遺跡内で方形環溝(豪族居館)が発見されており、そのため調査当初は緊急の発掘調査として実施したが、調査が進むにつれて遺跡の重要性が一段と高まり、小迫辻原遺跡発掘調査指導委員会や文化庁、大分県教育委員会の指導もあって、調査の方針は遺跡保存を前提とした範囲確認調査へと移行した。こうしたことから、遺跡の調査方法も幾分の軌道修正を行いながら進めた部分もあり、その点も踏まえて以下に概要を記す。

調査区の設定については調査段階において県・市の調査担当者間で協議を行い、県教委が行ったA～D区を除く台地上の呼び名は、第1図のとおり概ね農業基盤整備によって農道を境に区画された範囲を大区(G区・H区…)とし、さらにその範囲内で数次の調査を行った場合は順次小区(G-1～G-5区・H-1～H-4区…)を設け呼称することとした。これらの大・小区の呼称範囲につい

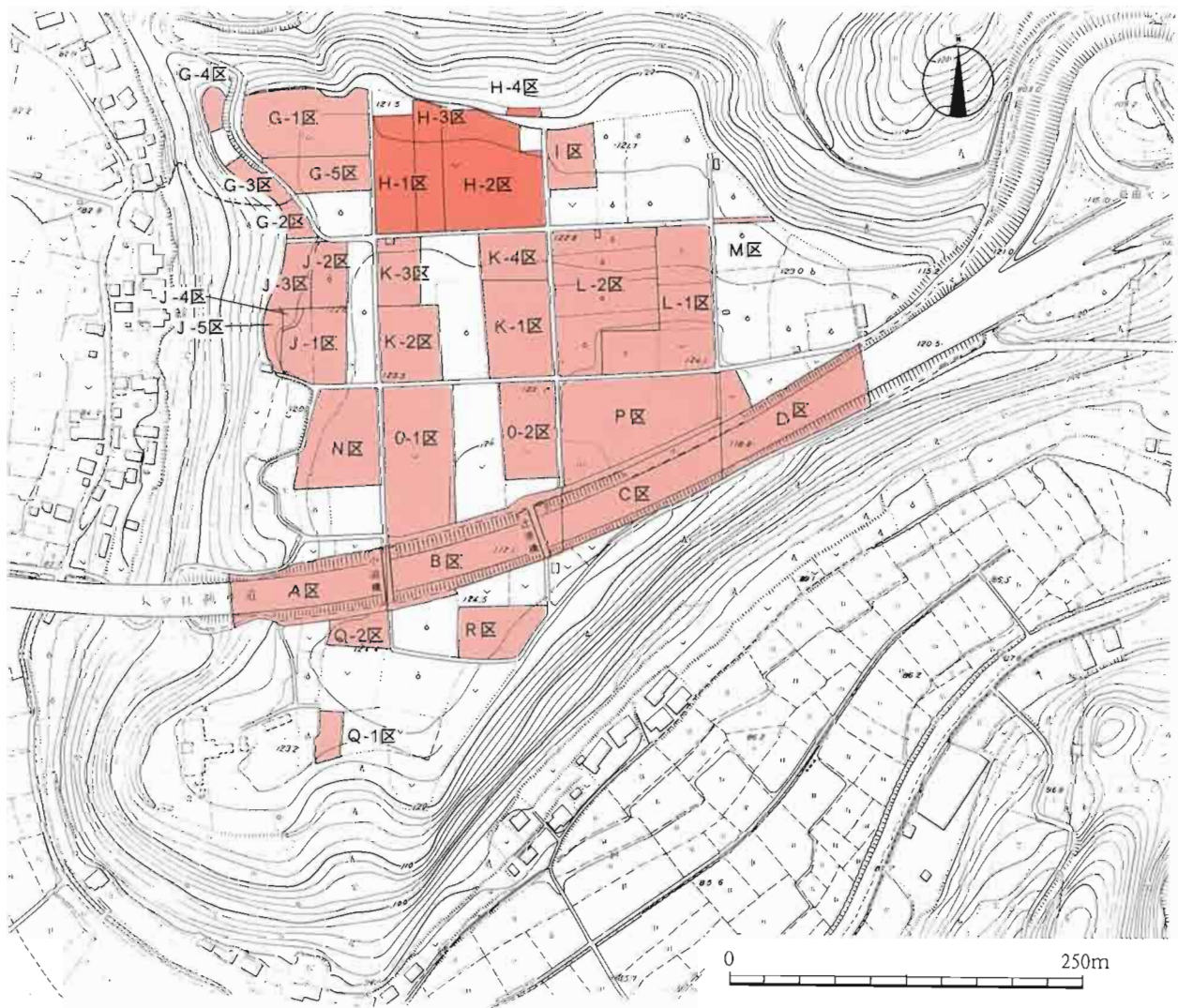


写真1 小迫辻原遺跡全景写真(南より)

ては、畑の一区画ないし数区画を対象に、その範囲内で調査を行ったり表土を盛るなどしていることから、調査を実際に行った範囲を呼ぶのではなく、調査を対象とした範囲を指している。

調査での表土剥ぎは事前の試掘調査においてはグリットまたはトレンチ法により作業員を使って行い、地力増進事業に先立つ調査（H-1区・N区・O-1区）や史跡公有化に伴う調査（K-1区）、範囲確認調査（G-1区・G-5区・H-2区・H-3区・J-1区・K-2～K-4区・L-2区・O-2区・P区・Q区・R-2区）では機械を使用した。しかし、遺跡周辺部を対象とした確認調査（G-2～G-4区・H-4区・I区・J-2～J-5区・M区）では機械が使えなかったため、グリットまたはトレンチ法により作業員を使って手掘りで行った。調査では地力増進事業（H-1区・N区・O-1区）や一部確認調査（G-5区・H-2区・K-3区・O-2区・Q区・R-2区）などによる調査に限っては遺構の完掘を行ったが、その他の調査区については個別の遺構内容を確認するためのサブグリットまたはサブトレンチを入れるにとどめるなど、遺構検出のみとした。ところが、地力増進事業に先立つ調査区であるN区とO-1区では表土を調査対象地内の南側と北側に盛って行ったため、時間的な制約もあって北側部分については遺構検出のみにとどめている。

完掘した調査区では遺構検出の後に検出した遺構から番号を付し、手作業による掘り下げを行っ



第1図 小迫辻原遺跡発掘調査区位置図(1/5000)

た。竪穴住居跡や土坑、溝などの遺構は原則として十字もしくは一本のベルトを残し、柱穴は半裁して土層の観察を記録した。原則的にこのベルトは調査最終段階に取壊しを行ったが、時間的な制約や安全面などの理由からベルトを残したままとした遺構もある。また、竪穴住居跡などの床面下などの確認も時間的な制約や遺構保存の観点から行ってはいない。

記録図面の作成にあたってはグリットまたはトレンチ法による調査区では、20分の1を基本に平面実測図およびレベリングを行い、完掘を行った調査区では調査範囲内に任意に10m×10mもしくは8m×10mのメッシュを組み測定の基準とし、20分の1を基本に平面実測およびレベリングを行った。必要な個別遺構の平面・断面・土層図等については別図面とし、20分の1を基本に遺構の内容によって縮尺を変え実測図を作成した。調査区の全体図は100分の1を基本に平板や光波平板を使用して実測図を作成したほか、航空測量による台地地形500分の1の地形図をアジア航測株式会社に委託し作成した。各調査区での実測図の方位は磁北を用いている。

記録写真撮影については調査担当者が行い、遺構などの個別写真は35ミリのモノクロ・カラースライドを使用し、遺構によっては6×7の大型カメラを使用した。また、各調査区の空中写真は(株)双建工業および(株)スカイサーベイに委託し撮影した。

このほか、G-1区で検出した1号溝（3号環濠）の土層の剥はぎ取りを山田拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）氏に、またP区の1号方形環溝の花粉分析を畑中健一氏に依頼した。

なお、小迫辻原遺跡の発掘調査は長期にわたり、しかも調査が進むにつれ遺跡の重要性が高まり、市民をはじめ多くの方が足を運ぶこととなったので、より多くの人に遺跡現場を見てもらおうと各調査区の埋め戻しは期限内のぎりぎりまでとした。とくに1990年度から始めた1・2号方形環溝（豪族居館）のP区については、調査終了後の1994年度まで調査時のままとし、その年に国史跡の答申を受けたことを最後に、遺構を保護するために真砂土でおおった上で埋め戻しを行い、全ての調査を完了した。

第2節 整理の経過

出土した遺物の整理作業は調査で取り上げた遺物を随時現場から市の文化財資料室に持ち帰り水洗作業、注記作業、接合作業を行い、補強が必要な土器については石膏を使っての復元作業を行った。ところが、この作業は各調査年度から進めたが、全ての調査開始がどうしても年度当初から行えなかったため、翌年度まで作業がずれ込むこととなった。しかも、調査終了後にはその出土遺物の膨大な量から整理作業が追いつかなくなり、市費による整理作業の追加を行い、1997年度をもって全ての整理作業を完了した。

また、土器などの遺物の注記については、遺跡の略記号を「OZT」と記載し、遺構名などは日本語で行った。さらに、出土した遺物のうち鉄器の保存処理については山田拓伸氏に依頼し大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館にて行った。

こうした整理作業と並行して、現場図面や記録写真の整理を行い、1987～1992年度の調査分についてはその調査内容を概要報告にまとめた。

調査報告書の発行については、当初は県教委調査分とは別々に発行する予定であったが、小迫辻原遺跡発掘調査指導委員会での遺跡の内容を一つの報告としてまとめるべきとの意見に、県・市教委で協議・検討した結果、最終的に一冊の調査報告書としてまとめる方向となった。

出土した遺物の写真撮影については文化財写真家の長谷川正美氏に依頼し行い、その整理は小笠和美が行った。このほか、整理作業段階での指導者や協力者などを銘記しなければならないが、全ての報告書作成作業が終了していないため、この点については最終編にまとめて記すこととしたい。

なお、遺跡から出土した土器や石器などの遺物については、現在市文化課の収蔵庫に保管している。

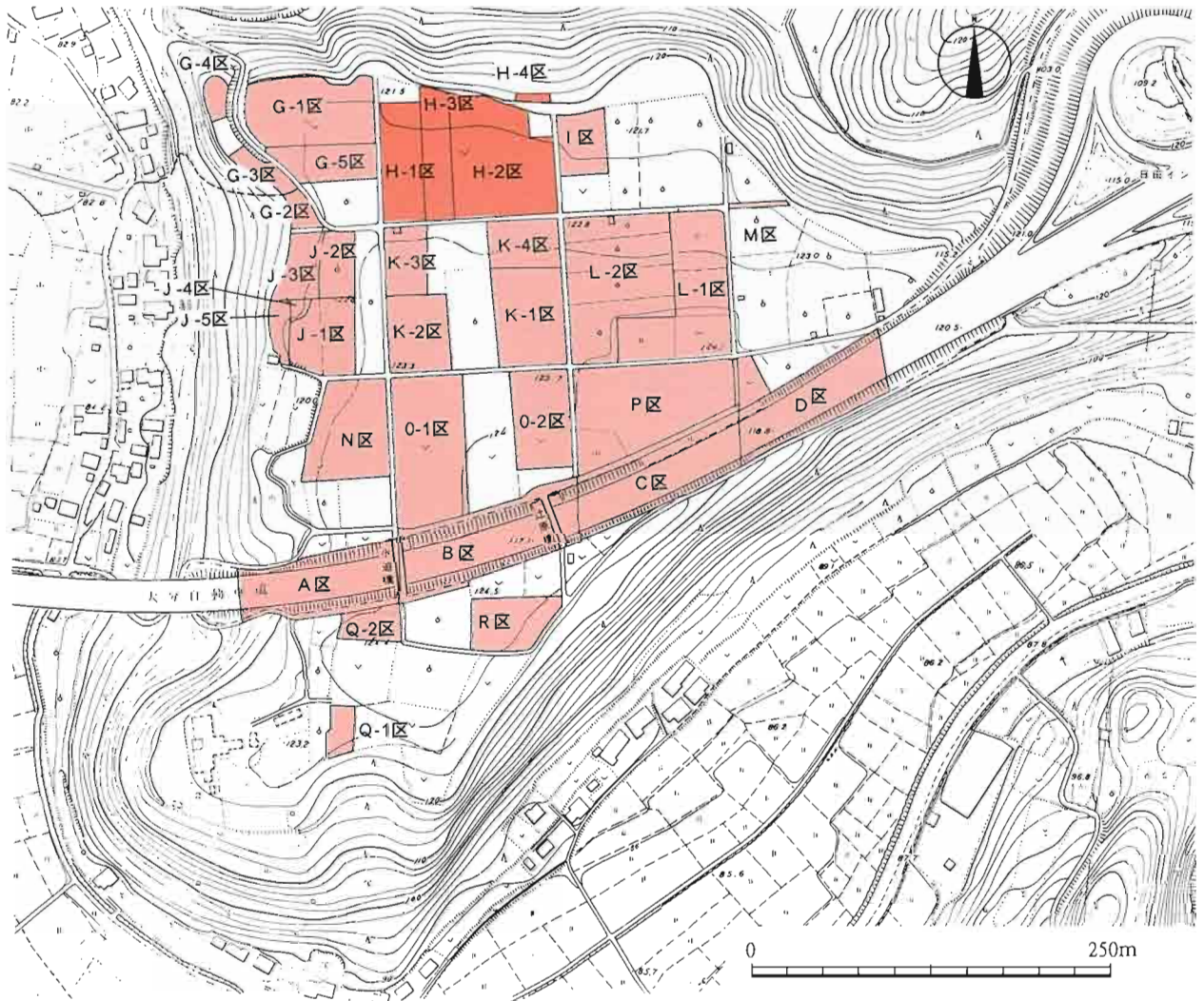
第3節 報告書の凡例

- 1、第8章以後、市教育委員会が調査し報告する内容については、できる限り県教育委員会報告分（『小迫辻原遺跡Ⅰ』第4～7章）と合せるように努めたが、一部異なった表現や表記などもある。
- 2、調査区名は調査時と同じ名称を用いているが、調査の進展に伴って大区から小区へと名称を変更した調査区もある。（G区→G-1区、H区→H-1区、J区→J-1区、K区→K-1区、L区→L-1区、O区→O-1区、R区→R-1区）。
- 3、各遺構は「H-1区1号竪穴住居跡」と表記し、本文中や挿図内で省略する場合は1号竪穴住居跡は1号住又は1住、2号掘立柱建物は2号建又は2建、3号土坑は3号土又は3土、4号墓は4号墓又は4墓などのように省略形を用いる。
- 4、挿図に用いた方位はすべて磁北である。
- 5、遺構の方向は長軸線をもとに計測し、方位角で表現した。
- 6、挿図の遺構縮尺は特別な場合を除き竪穴住居跡が60分の1、掘立柱建物跡が80分の1、土坑が30分の1もしくは40分の1、墓（小児用甕棺墓）が10分の1、溝が100分の1を原則とし、遺構配置図はすべて300分の1で統一している。
- 7、また、遺物の縮尺については特別な遺物を除き土器が4分の1、石器が原寸、2分の1、3分の1、鉄器が2分の1、土類が原寸を原則とした。
- 8、竪穴住居跡の床面積はその下端を、掘立柱建物跡の床面積は柱穴の心心距離を結んだ内側をプランメーターで計測した。
- 9、見出しの後の（図版1）は『写真図版編』の番号で、（写真1）は報告書に掲載している写真の番号である。
- 10、本書でも『小迫辻原遺跡Ⅰ』に従い時代別の報告を行うが、「古墳時代前期前半」の概念は『小迫辻原遺跡Ⅰ』同様とするが、他の時代の細分（弥生時代前期後半～中期初頭など）は行わず、時代名や古代、中世、近世などと表記する。
- 11、土器観察表の備考欄に「搬入」と表現した土器は『小迫辻原遺跡Ⅰ』での概念と同様の意味で使用している。
- 12、『小迫辻原遺跡Ⅰ』のなかでは土器や土坑の分類などが行われているが、G～R区については全ての実測作業などが完了していないため、これらのことについては『考察編』などでまとめることとする。

第9章 H区の記録



写真2 H区作業風景



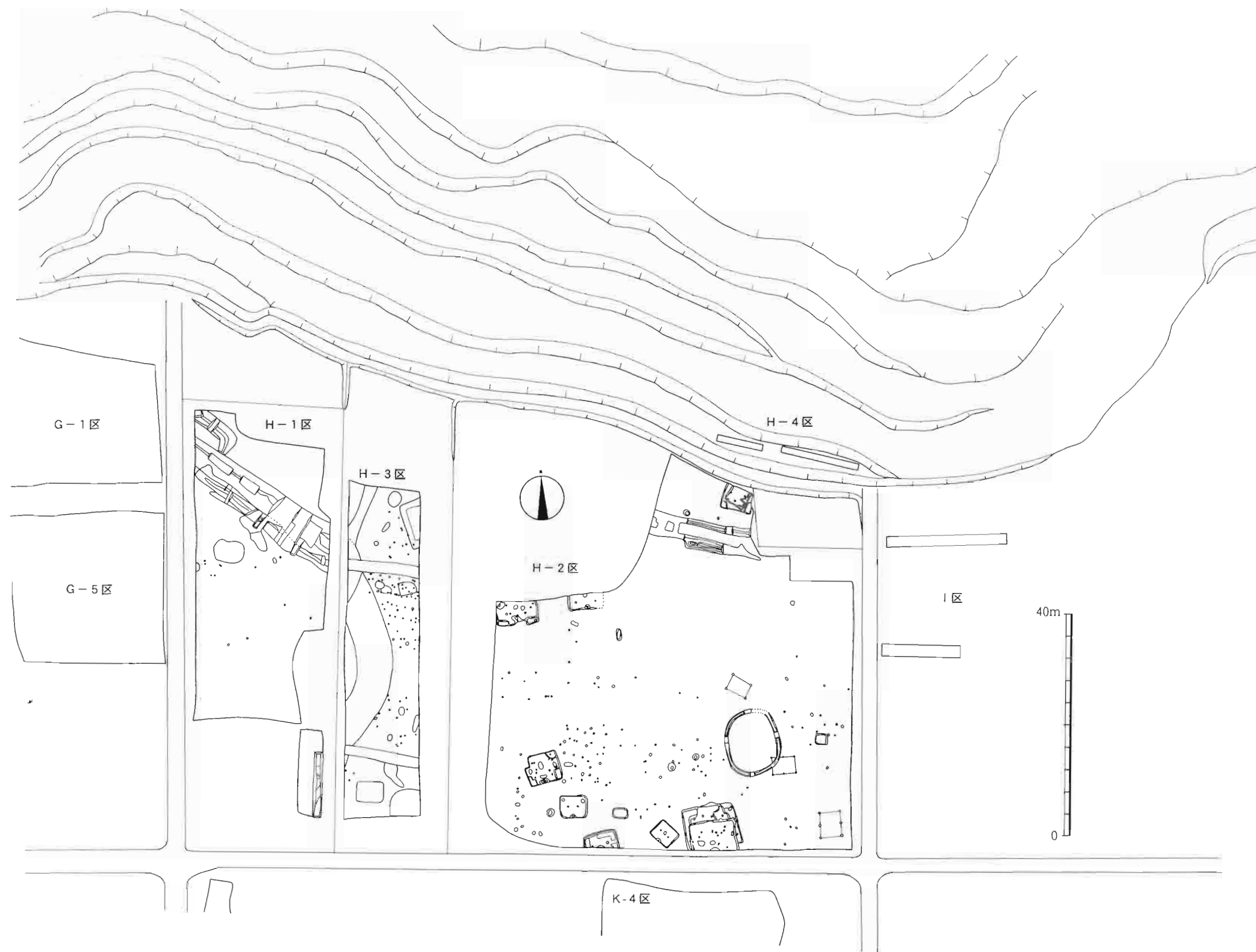
第1図 H区の調査位置図(1/5000)



写真3 H区的全景写真(カラー合成写真)



写真4 H-1区1・3号環濠



第2図 H区の調査区位置図(1/800)

第1節 H区の調査概要（第2図）

H区は台地北側のほぼ中央部にあたる場所で、1960年代の耕地整理により北側を除く3辺が農道によって区画された東西約120m、南北約75～100mの範囲をさす。この調査区の調査にかかる以前の現況は大半が畑地で、全体的に北側に向かって緩く傾斜しており、北側の台地末端から斜面全域は杉の植林のために幅約2～5mの階段状の段差が顕著にみられる。

このH区は現況地番で大字小迫字辻原1940-1番地、同1940-2番地、同1941番地、同1942-1番地、同1942-2番地の5つの土地が存在しており、これらの土地のうち小面積である字辻原1940-1番地をはずした字辻原1940-2番地、同1941番地、同1942-1番地、同1942-2番地を調査の対象地とし、字辻原1940-2番地をH-1区、同1941番地をH-2区、同1942-1番地と同1942-2番地をH-3区と呼んでいる。また、H-3区の北側斜面については、トレンチを設定した大字渡里字一木出745番地の一部区域約150m²についてのみH-4区と呼んでいる。

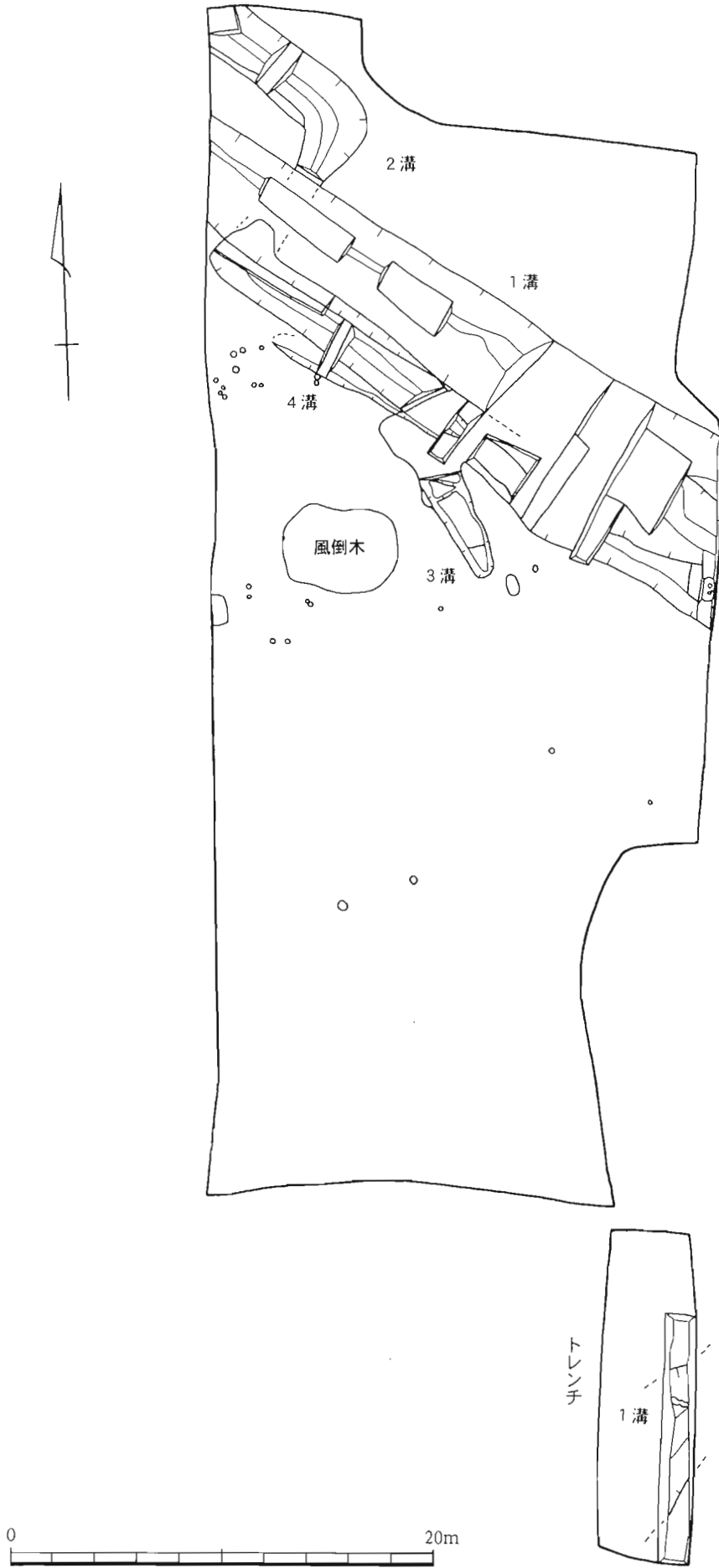
これら4ヶ所の調査区は平成2年度にH-1区、平成3年度にH-2区、平成5年度にH-3区とH-4区の2ヶ所を、小迫辻原遺跡全体の範囲や内容の確認を目的として発掘調査や確認調査を実施し、特に調査区西側のH-1区では3号環濠、調査区東側のH-4区では1号条溝の追跡を主眼において調査を進めた。調査にあたっては、継続した確認調査であったH-3区の遺構は掘り下げを行わず、遺構面での状況把握にとどめている。

こうした3ヶ年におよぶH区で確認された遺構は、未発掘の遺構時期の推定を含めると弥生時代の遺構が竪穴住居跡1軒、竪穴1基、土坑17基、掘立柱建物跡3棟、墓(小児用甕棺墓)2基、方形周溝遺構1基、柱穴多数、古墳時代前期の遺構が溝(1・3号環濠)2条、竪穴住居跡14軒、土坑2基、掘立柱建物跡3棟、柱穴多数、中世の遺構が溝2条、掘立柱建物跡2棟、柱穴多数、近世の遺構が溝4条、土坑1基である。このほか、近年の攪乱坑や風倒木痕なども検出した。

なお、詳細については以下の各調査区ごとに調査記録としてまとめる。



写真5 H-1区の調査風景より



第3図 H-1区遺構配置図①(1/300)

第2節 H-1区の調査（第3図）

1) 調査の内容（第3図）

H-1区は近い将来に於いて土地所有者が地力増進事業を実施することが予定されていたため、平成2年度に事前の発掘調査を実施した調査区である。この調査区はH区全体からみれば最も西側に位置しており、G区との境界に近い場所にあたる。南北方向へと長くのびるこのH-1区の調査前の現況は畑地で、その地形は南側が高く、北側へと緩やかな傾斜を示していた。

調査ではすでに小迫辻原遺跡範囲確認調査事業として調査を進めていたG-1区において、新たに古墳時代前期の3号環濠の検出がなされていたことから、この3号環濠の追求を念頭において、H-1区の調査対象地北側から表土を剥ぐこととし、その土盛り場所を調査区南側とした。

ところが調査が進展するなかで、やはり市単独の小迫辻原遺跡範囲確認調査事業として同時に調査を進めていたH-1区南側のK-3区北側においても、3号環濠の一部が検出された。このことから、3号環濠はG-1区からH-1区内を通り、さらに東へと延びて曲がったのち、K-3区の北側へと延びるその平面形態が方形または長方形の環濠と予想された。このため、この想定を確認すべく調査段階途中において急遽H-1区の土盛りとしていた調査区南側に南北方向のトレンチを1ヶ所設定してその確認を行った。

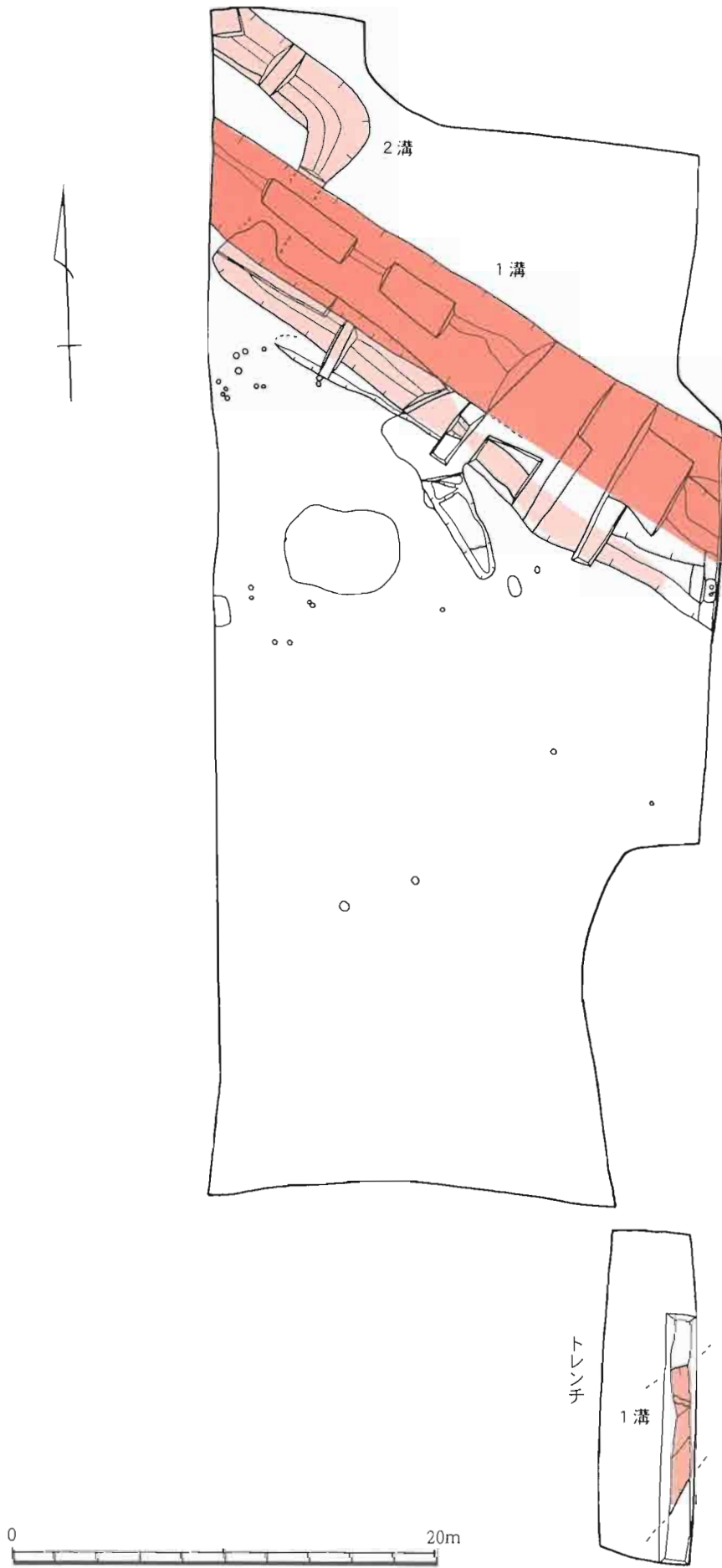
調査は国庫補助事業である日田地区遺跡群発掘調査事業として、K-3区やP区と並行して行った。この調査区では以前ゴボウ作付けを行っていたことから遺構の保存状態は悪く、大半の遺構は削平を受けていた。このため検出した遺構の数は少なく、古墳時代前期の2本の溝（1・3号環濠）、中・近世溝、風倒木痕、近年の土坑などを検出したにとどまった。以下、調査の経過を簡単にまとめる。

平成2年11月よりバックホウ（0.75）を使って表土剥ぎを開始し、11月17日からは作業員による遺構検出作業を始めた。11月28日からは1号溝、12月3日からは2号溝の掘り下げを並行して行った。平成3年1月7日には平板測量図（1/100）の作成を行い、1月12日から22日までの間は遺構の個別実測を行った。

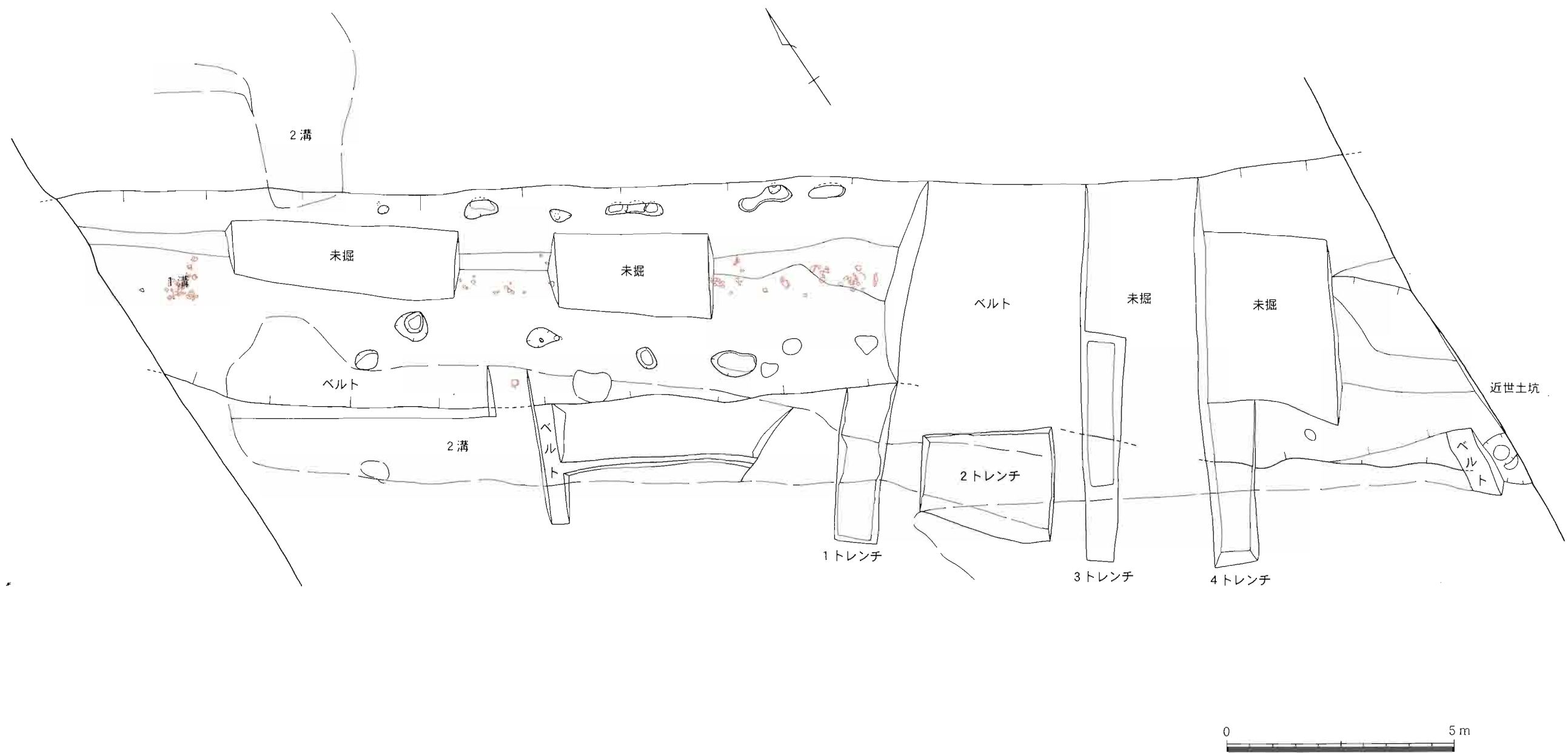
その後は他のK-3区やP区などの調査区で作業を行い、2月20日には空中写真撮影のための清掃作業を行って、2月22日に撮影を行った。この撮影後の2月26日からは再度1・2号溝の確認や南側に追加設定したトレンチの調査を開始し、2月27日にはトレンチの掘り下げを始めた。3月20日にトレンチの土層実測や図面の確認、器材の水洗・撤去を行い、3月22日より調査区の埋め戻し作業を開始し、3月24日をもって全作業を完了した。

なお、調査対象面積は2,120㎡で、1,100㎡の北側調査区とその南側のトレンチ面積60㎡を足した合計1,160㎡がH-1区の調査面積である。

最後に、この調査区での特徴をまとめると、①調査区全体の遺構の残存状況が他の調査区と比較したときには極めて悪い状況であったこと。②このため、遺構の密度が極端に低いこと。③重複する古墳時代前期の2本の溝（1・3号環濠）が検出され、その前後関係1号環濠→3号環濠へと変遷することが確認できたこと。④1号環濠には張出部がみられること。⑤3号環濠の断面形態は「V」字形をなしており、その内側は緩やかで外側は急な傾斜をしていること。⑥1・3号環濠の年代から方形環溝（環濠居館）との密接な関係があることなどである。



第4図 H-1区遺構配置図②—古墳時代前期—(1/300)



第5図 H-1区1号溝平面実測図(1/100)

2) 古墳時代前期 (第4図)

この時期の遺構としては、はっきりと確認できた遺構には2条の溝があり、それは第4図に示す1号溝と2号溝である。この2条の溝についてはH-1区の調査段階での呼び名である1号溝と2号溝として報告するが、小迫辻原遺跡全体のこの時期の主要な遺構としてみた場合には、1号溝が「3号環濠」、2号溝が「1号環濠」と呼称しているものに相当する。

これら2つの溝以外の遺構は確認できておらず、近年の畑地耕作によって遺構面の削平が著しいことが原因で、それでも柱穴跡が僅かに検出されてはいるものの、遺物の出土がなくこの時期に相当するものなのかははっきりとはしない。ただし、近接するG区やH-2区、K区などでのこの時期の遺構の在り方や分布状況などを考慮すると、2つの溝に関連するだろう竪穴住居跡などの遺構が存在した可能性は高い。

1. 溝 (第5表)

検出した1号溝と2号溝の2条の溝について以下にまとめるが、調査時においては溝の全掘を予定して掘り下げを開始したが、予想していたよりも1号溝が深く、時間的にも全掘が不可能なことから、部分的な掘り下げによる確認にとどめている。

H-1区1号溝 (第5図)

調査区北側ではほぼ東西方向に横切る溝である。これまでも述べたように、G-1区内で東西方向に「く」字状に検出されたG-1区1号溝(3号環濠)の続きにあたり、調査当初からその存在が想定されていた溝でもあった。このH-1区1号溝は遺構検出段階では、すでに他のH-1区2号溝(1号環濠)との重複が確認されたが、遺構検出が進むにつれさらに別の新しいH-2区3・4号とも切り合い関係にあることが判明した。とくに遺構検出段階でのH-1区2号溝との線引きには、ほぼ同時期の溝ということもあって埋土の識別が見づ



写真6 H-1区1号溝の土器出土状況



写真7 H-1区1号溝の発掘状況

らく、時間を要することとなった。

調査ではH-1区2号溝との切り合い関係が顕著な西側半分を主に掘り下げを行い、東側部分についてはトレンチによる確認にとどめている。また溝の西側半分の掘り下げにあたっては、埋土除去時の事故防止や作業の効率を図るために溝の途中に2ヶ所のベルト（未掘）を残したまま作業を進めた。しかも、H-1区2号溝との切り合いの状況を把握することを目的にベルトをなるべく多く残り詳細な土層観察を行ったが、調査の終盤においては遺構の現状保存にも考慮してこれらベルトの取り壊しは行わなかった。

溝の規模は検出面での長さが約29m、検出面での幅が4～4.7m、溝の底面の幅が0.3～1.2m、検出面からの深さが1.6m前後を測る。はげしく削平を受けていることを考慮すると、溝の幅で1m以上、深さは1m程度は本来広く深かったものと推定される。

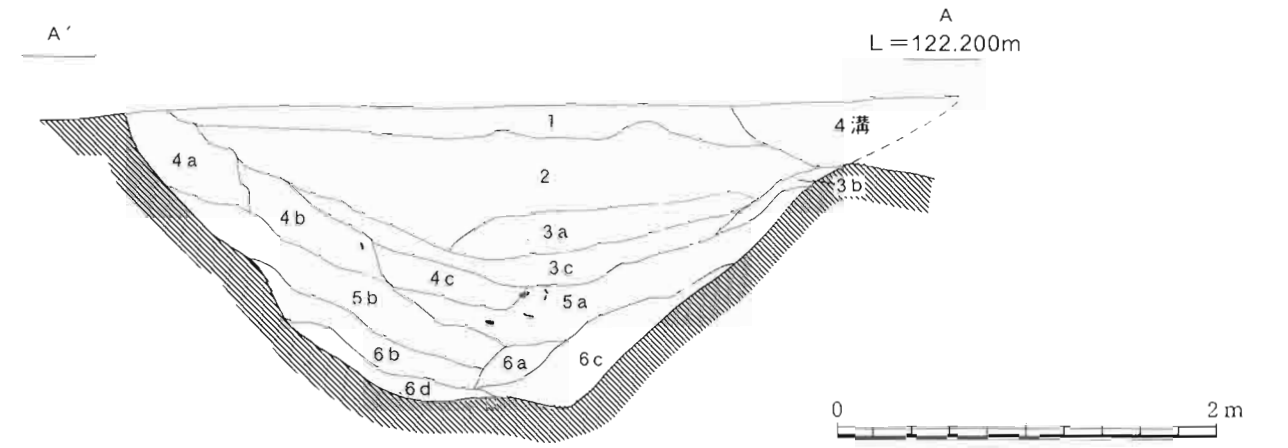
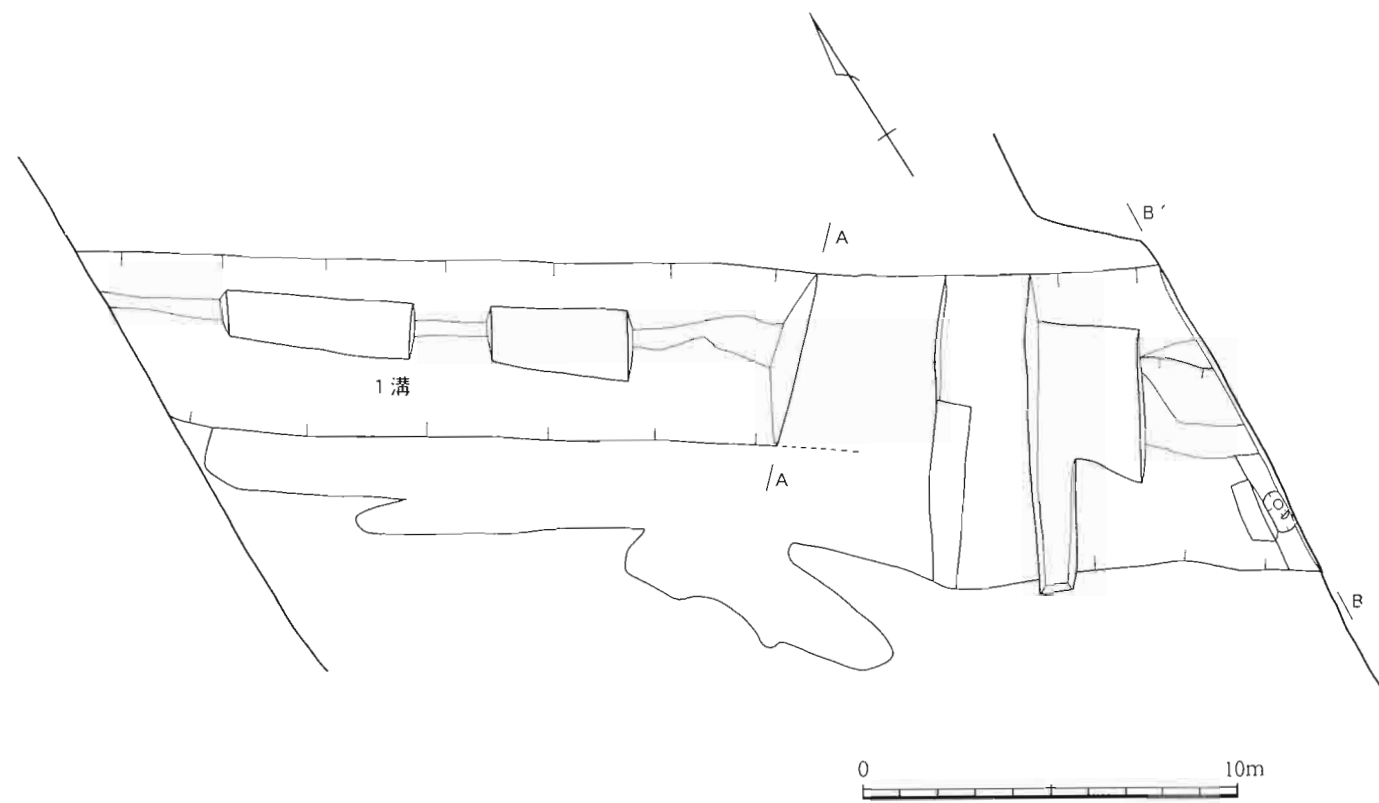
溝の断面形態は「V」字形をなしているが、第6図の断面図や写真8にみるように溝の内側（南側）は残る上端と下端を結んだ傾斜度約20°と比較的緩やかな勾配に比べ、溝の外側（北側）は同傾斜度約60°と急な勾配を示している。このことは、第5図の平面図にみるように、溝の下端ラインと溝の上端を比較した時に極端に南側に偏っていることから理解できる。溝の底面については中央付近では掘りすぎによって幅が広がっているが、他の調査区での同溝（3号環濠）の状況からしても幅約20cm程度のほぼ平坦で狭いつくりである。

また、溝の両方の斜面には不整形なピットがみられた。このピットは①その埋土が溝に堆積している埋土と同じで、②調査区内で検出されている柱穴には同様な深さのものがみられないなどの理由から、溝の掘削時あるいはその後のものと考えられる。一見すると並んでいるようにも見えるが、ピットの平面形や大きさ、深さ、掘り方の方向などまちまちで、N区1号溝(2号環濠)の張出部外側斜面にみられるような橋脚用柱穴の例とは異なっている。溝に直接関係するものなのか、あるいは木根痕など自然的なものか判断がつかない。

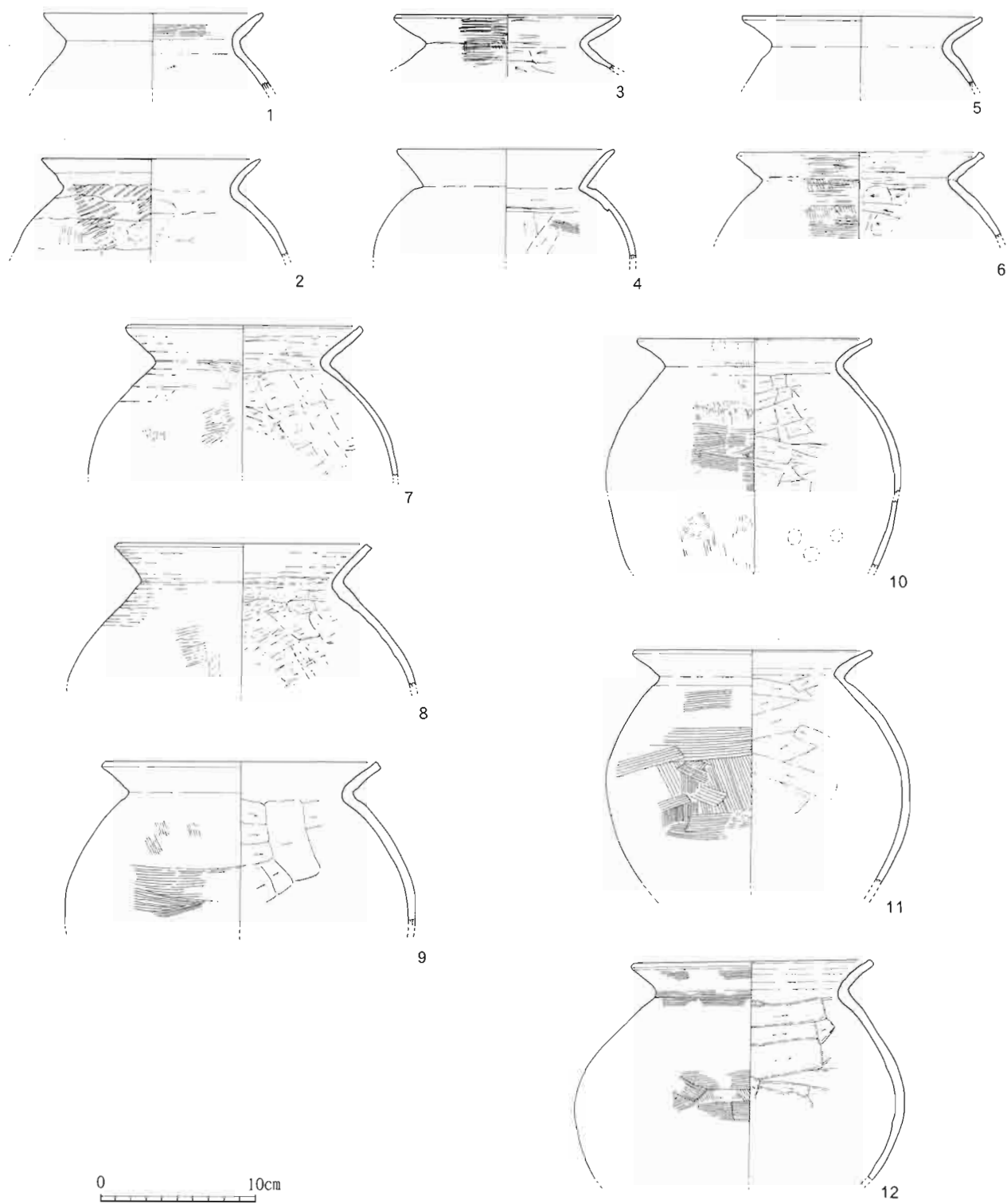


写真8 H-1区1号溝の土層断面

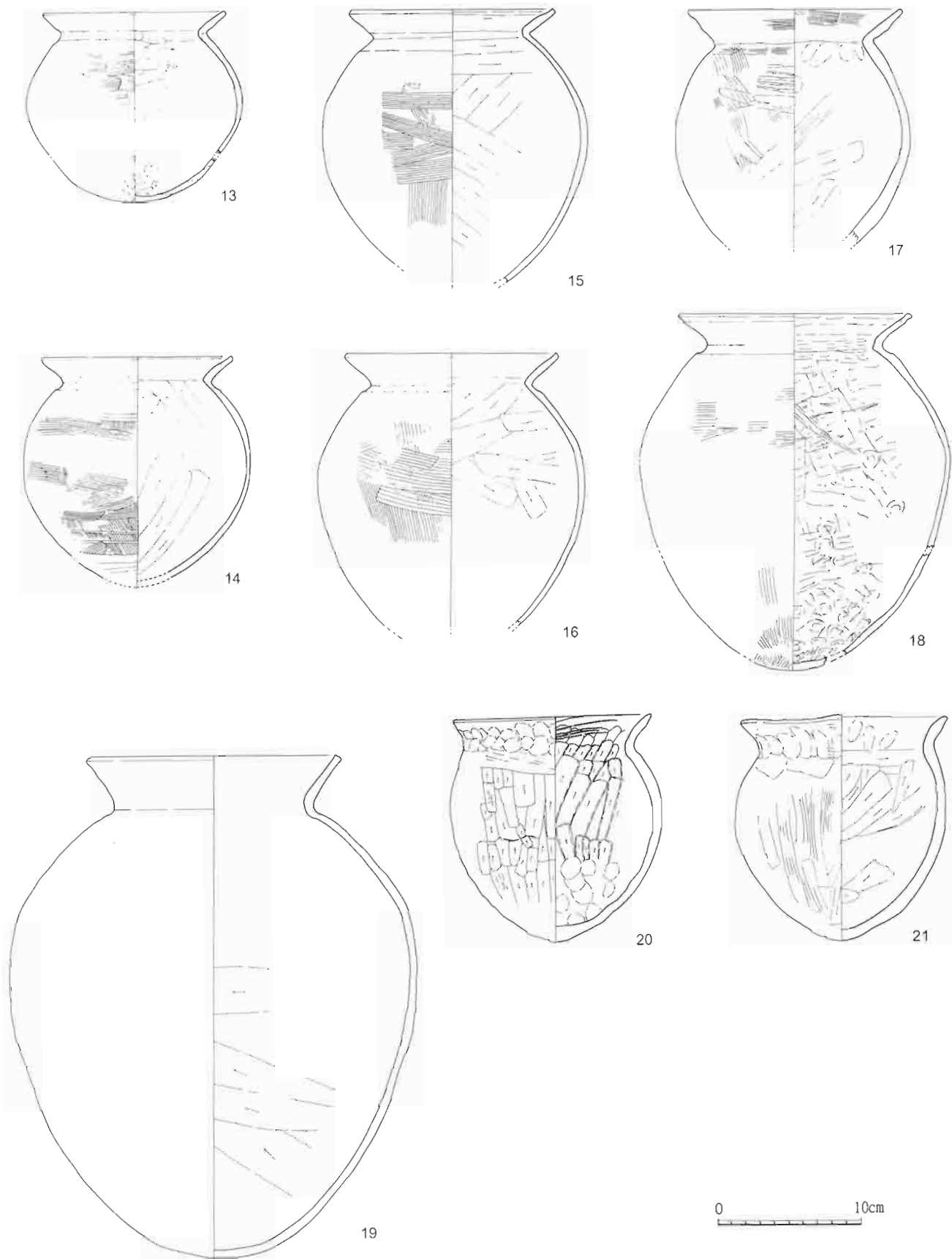
溝の埋土堆積状況は第6図に示すとおり大きく6層に分けることが出来る。1層は暗茶褐色土で、中世・近世の土器を含む。2層は茶色土で、古墳時代前期の土器を含むが、破片が多い。3層は堆積土のなかでも鍵層となる。3a～3cと3つに細分される黒色あるいは黒褐色土の黒色帯をなしており、溝の機能が停止し、埋没土（4～6層）が堆積した後の腐植土で土器を多く含む。とくに3c層は黒味が強く、焼土を含んでいる。4～6層は類似した暗茶褐色土または茶褐色土を基本とするが、4層には地山の黄色ブロックや砂礫が殆ど含まれず、5層は地山の黄色ブロックや砂礫が僅かに混じり、6層では地山の黄色ブロックや砂礫を多く含む。なかでも、5層は土器や炭を多く含む、6層は2～4cm程度の黄色ブロックが顕著



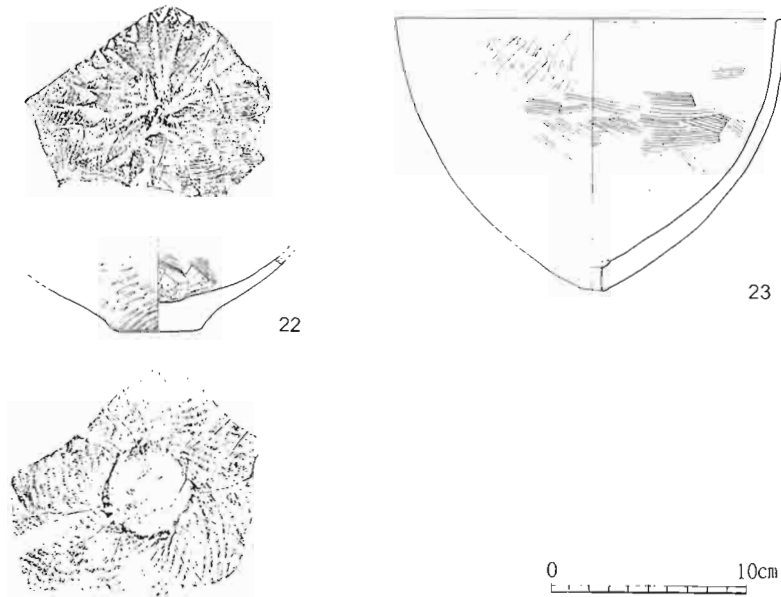
第6図 H-1区1号溝実測図(1/20) および同断面土層実測図(1/40)



第7図 H-1区1号溝出土の土器実測図①(1/4)



第8図 H-1区1号溝出土の土器実測図②(1/4)



第9図 H-1区1号溝出土の土器実測図③(1/4)

にみられる。

なお、溝の東側(B-B)土層については、この土層上面から多くの土師質土器や輸入陶磁器などが出土するなど、調査段階ではH-1区1号溝との線引きや解釈がはっきりしなかった。ところが、H-3区の調査で、第77図に示すようにH-3区2号溝(中世)との重複があることが明らかになった。そうしたことを含めて東側(B-B)土層を検討すると、1~20層については土層図北側の掘方ラインに1つの段(3・8層の北側)がみられる。しかも8・9層を境に土層の在り方が変わっていることなどから、この段がH-3区2号溝の掘方と考えられ、1~9層がH-3区2号溝、10~20層がH-1区1号溝の埋土と推定される。

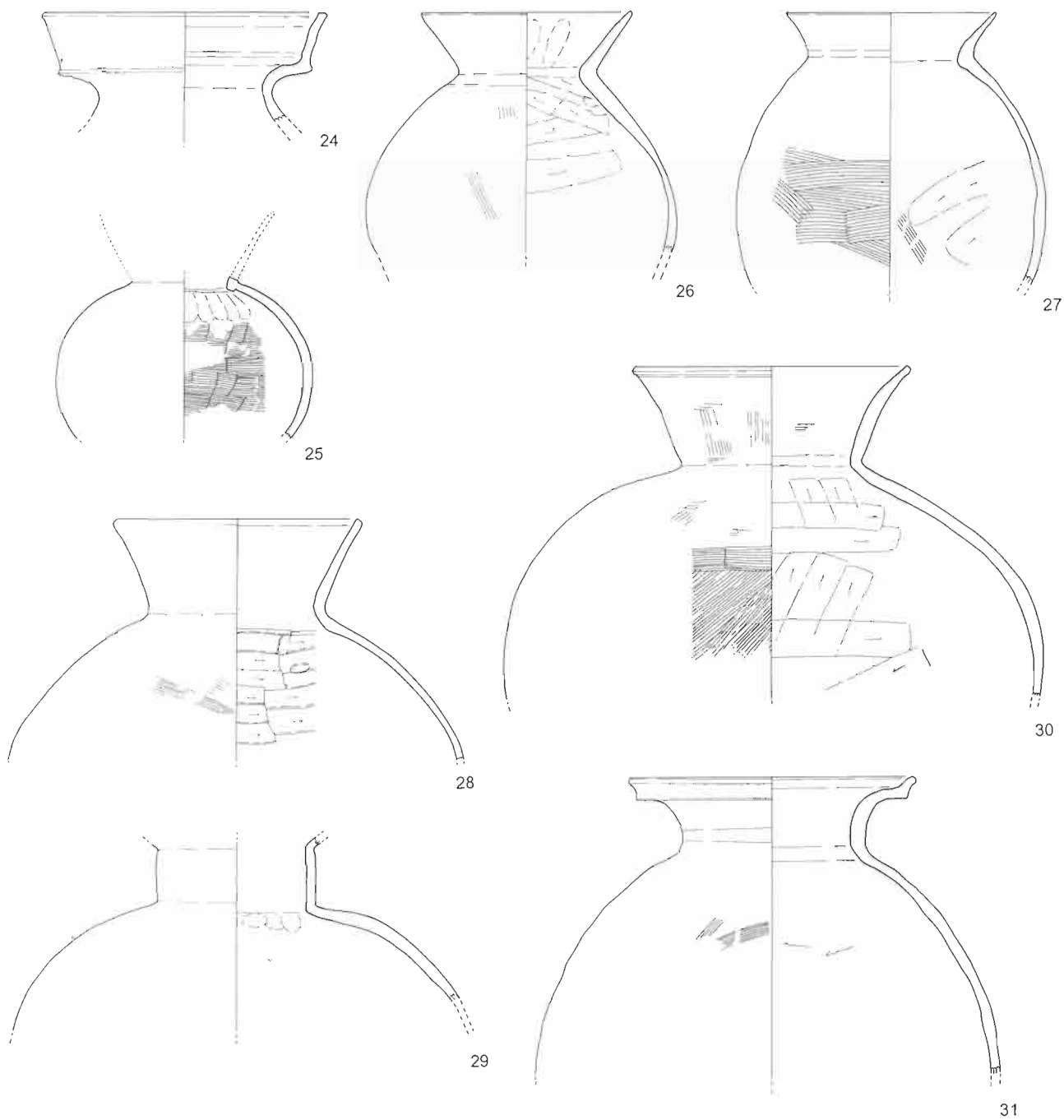
また、A~Y層についてはやはり調査段階でははっきりとした遺構としてとらえることはできなかったが、H-3区の調査において第77図に示すH-3区3号溝(近世)の延長線上(第2図)にあることから、径約3m、深さ約2.5mの近・現代の水溜土坑であることが判明した。

次に遺物の出土状況は1号溝の西側半分では、溝のほぼ全域にその分布がみられた。土器については完形品としての出土は少なく、どちらかといえば破片が目立つ。これらの土器は主に2~4層を中心に認められ、3c層から4層にかけてそのピークがみられた。遺物の取り上げについては便宜的に1・2層を上層、3層中を黒色、4・5層を下層、6層を最下層とした。以下、土器の説明を行うが、接合した土器の出土層位の記述は先の便宜的な層を用いることとする。

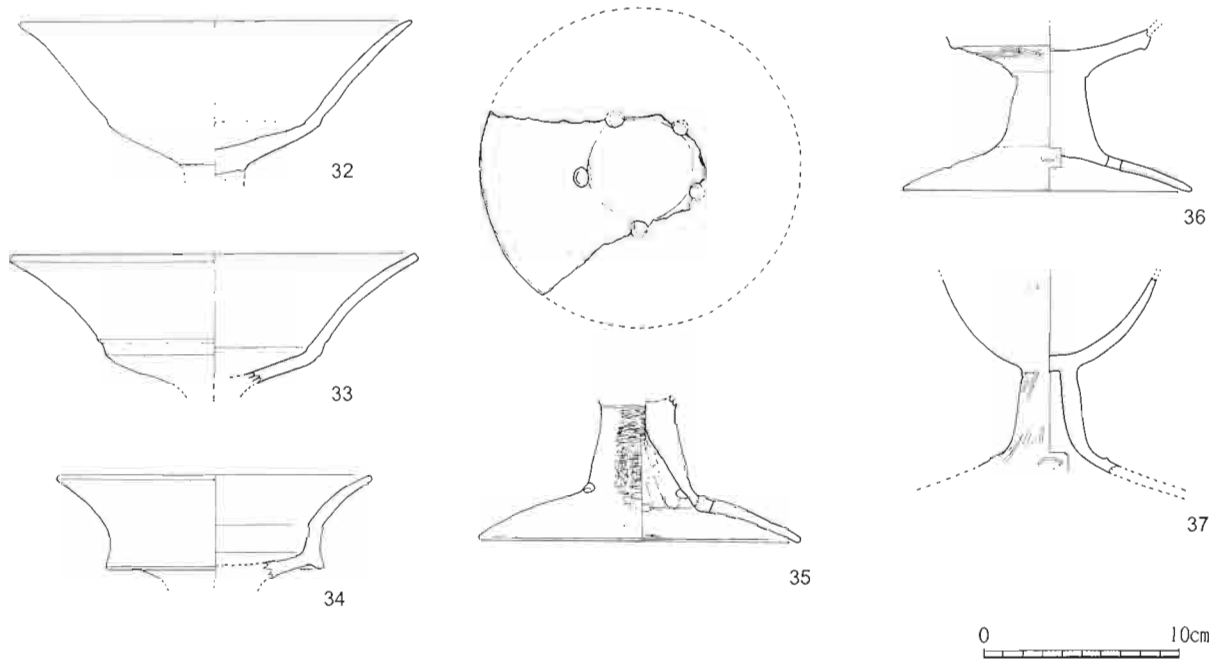
なお、溝から出土した土器は主要なもののみを図示し、その器種構成などは今後予定している総合的な報告のなかでまとめることとする。

出土遺物(第7~15図、第7~9表、図版7~10・12)

第7~9図の大半が庄内・布留系の甕である。1は口縁部がほぼ直線的に外反し、端部はつまみ上げる。胴部内面にハケを施す。2は胴部上半が張り気味で、口縁部は外反する。胴部外面はタタキ後ハケ、内面はハケを施す。3は口縁部端部を上方につまみ上げる。外面にハケ、内面にヘラ削

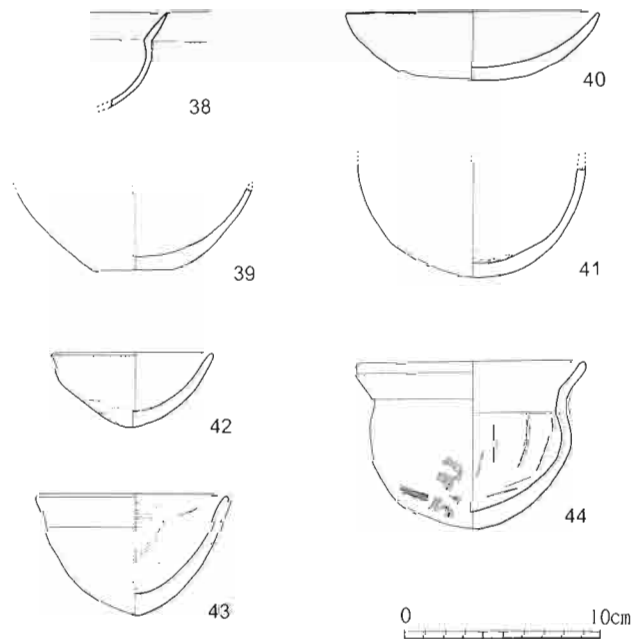


第10図 H-1区1号溝出土の土器実測図④(1/4)



第11図 H-1区1号溝出土の土器実測図⑤(1/4)

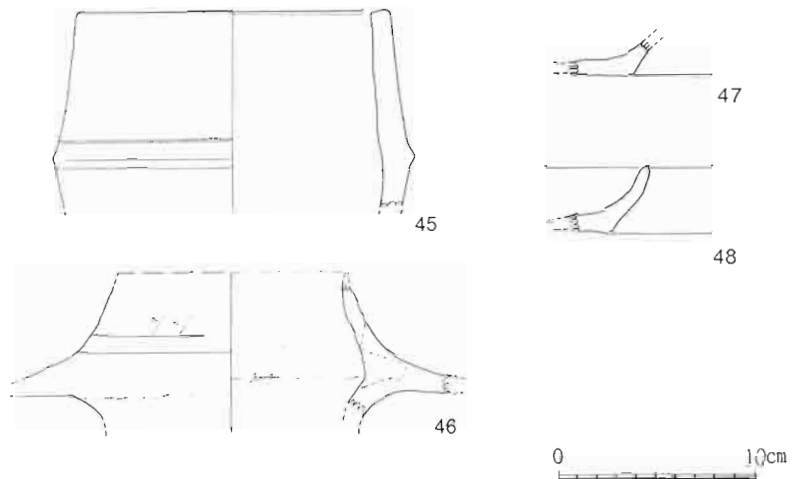
りを施す。4は口縁部がほぼ直線的に外反し、端部は上方につまみ上げる。内面にヘラ削りを施す。5は口縁部がほぼ直線的に外反し、端部は上方につまみ上げる。胴部内面にハケを施す。内面にヘラ削り施す。6は胴部上半が張り気味で、口縁部は外反し、端部はシャープにつまみ上げている。胴部外面はタタキ後ハケ、内面はハケを施す。7・8とも胴部上半は肩が張り気味で、7は端部はつまみ上げている。スス付着。7・8とも外面ハケ、内面にヘラ削りを施す。9は口縁部がほぼ直線的に外反し、端部は8と同様平坦に仕上げられている。胴部外面はハケ、内面にヘラ削りを



第12図 H-1区1号溝出土の土器実測図⑥(1/4)

施す。10は胴部上半が張り、口縁部は内湾気味に外反し、端部はつまみ上げる。胴部外面にハケ、内面にヘラ削りを施す。11は胴部が球形をなし、口縁部が内湾気味に外反し、端部につまみ上げた痕跡が残る。外面にハケ、内面にヘラ削りを施す。12は形のくずれた甕で、口縁部が内湾気味に外反し、端部は平坦に仕上げられている。外面にハケ、内面にヘラ削りを施す。スス付着。13は胴部が球形をなす。口縁部が内湾気味に外反し、端部は平坦に仕上げられている。ともに外面にハケ、

内面にヘラ削りを施す。14は胴部が薄く仕上げられ、球形をなす。口縁部は内湾気味に外反し、端部はつまみ上げる。二次焼成を受け、スス付着。15・16も胴部が薄く仕上げられており、口縁部は直線気味に外反し、端部は丸くつまみ上げている。いずれも外面ハケ、内面にヘラ削りを施し、二次焼成を受け、スス付着。17は口縁部が直線的に立ち上がる。



第13図 H-1区1号溝出土の土器実測図⑦(1/4)

外面にハケ、内面にヘラ削りを施す。18は全体的に薄く仕上げられ、胴部上半は肩が張る。口縁部は直線的に外反し、端部は面取りされ凹みが残る。外面にハケ、内面にヘラ削りを施す。19は胴部が卵形をなす完形品である。口縁部は直線的に外反し、端部は平坦に仕上げられている。底部は丸底である。内面に削りを施す。20・21ともほぼ完形品の甕で、厚みがあり重量感がある。胴部はほぼ球形をなし、口縁部は直線的に外反する。20の底部は尖り底である。ともに二次焼成を受け、器壁はもろくなっており、外面はヘラ状工具による調整、内面はヘラ削りを施す。22は底部で、螺旋状のタタキが施されている。

第9図23は甑で、底に穿孔がある。

第10図24～31はいずれも外来系の壺である。24は二重口縁壺である。頸部は細く、口縁部は内湾気味に外反する。25は長頸壺の胴部である。球形をなす。内面にハケを施す。26・27は頸部が細く、胴部の中央に最大径がある。28・30も同様で、大型品である。26・28は口縁部が直線的に外反し、27・30は口縁が内湾気味に外反する。いずれも外面ハケ、内面ヘラ削りを施す。29は頸部が真っ直ぐに立ち上がる。胴部は丸みを帯びそうである。31は頸部が外反気味に立ち上がり、外反する短い口縁部がつく。外面ハケ、内面ヘラ削りを施す。29・31は搬入品か？

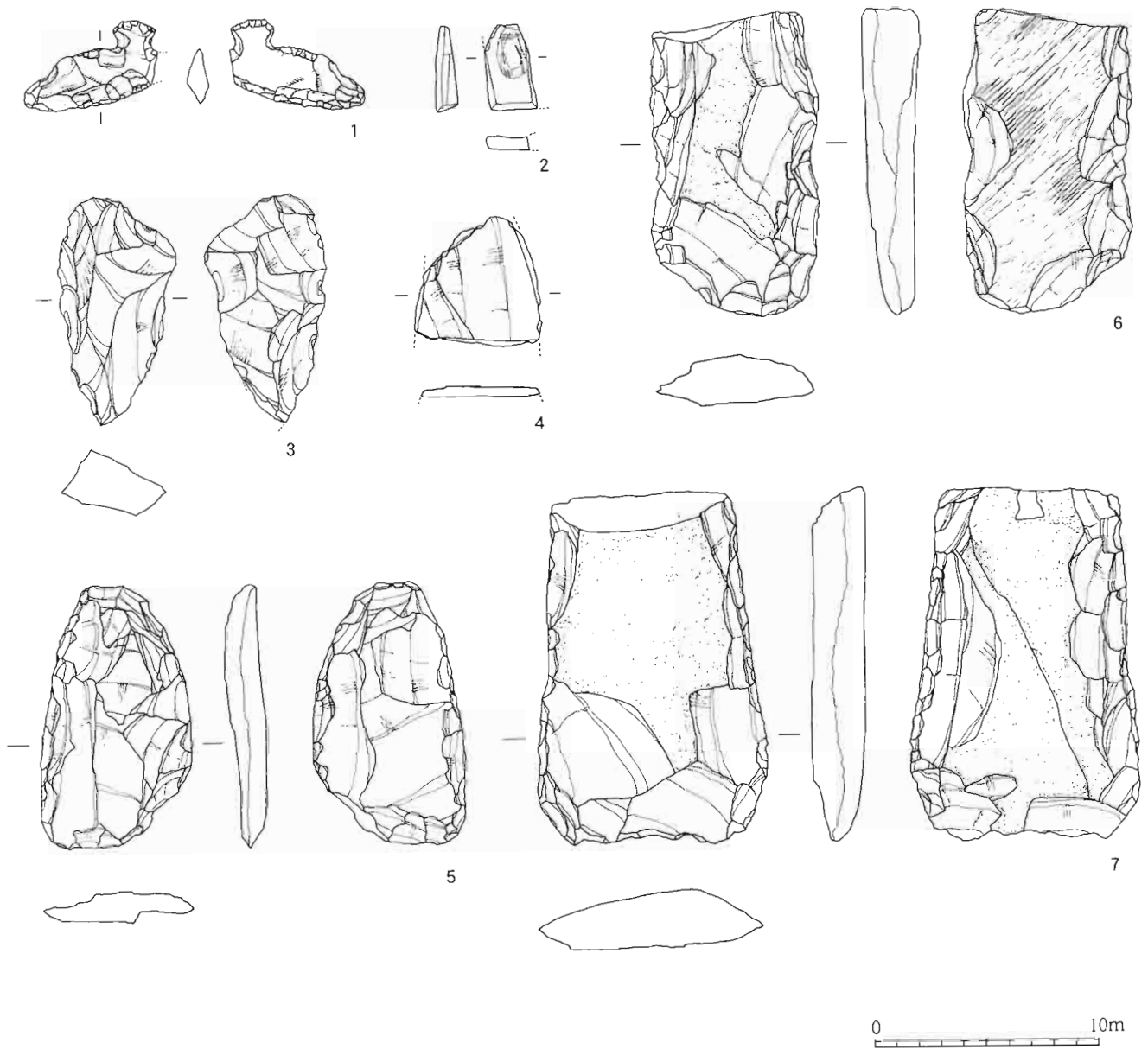
第11図32～36は高杯で、34～36は外来系である。32・33とも、口縁部は長く外反し、上半部と下半部の境は明瞭である。脚部を欠く。34は受部が深く、上半部はほぼ直立し内湾気味に外反する。下半部との境は明瞭で、外面に突出させている。35は低い脚部で、裾部から大きく外反する。裾部には5穴の穿孔が残る。36も低い脚部である。中実の柱状部から裾部には4穴の穿孔が穿たれている。

第11図37は台付碗である。柱状部から裾部には穿孔が穿たれている。

第12図38・44は鉢である。38は外来系の薄手の鉢である。搬入品。44は完形品で、底は丸みをもつ。39～43は碗である。39・43は平底で、41は球形をなす。39は搬入品。

このほか、上層から長頸壺の口縁部と考えられる第13図46と筒形器台の口縁部(47)が出土している。ともに内外面に丹が残っている。弥生時代中期の所産である。

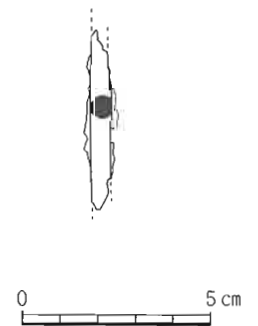
さて、これまで紹介した遺物の大半は、3層中もしくはその下位からの出土である。これらのうち溝の底面に近い最下層から出土した遺物は16の甕と2・13・14の甕に27の壺が伴う。両者は離れた場所からの出土で、ある程度まとまりをもって出土している。前者には8・10の甕が伴い、ま



第14図 H-1区1号溝出土の石器実測図(1/3)

た後者には22の甕が伴う。このほか、16の甕と31の壺と41の碗がひとかたまりで出土している。

第14図1は安山岩製の石匙、2は砥石、3はスクレイパーと思われる。4～7は打製石斧である。とくに7の打製石斧は大型の完形品である。1は下層、2～7は上層より出土。第15図は鉄鏃の基部である。



第15図 H-1区1号溝出土の鉄器実測図(1/2)

H-1区トレンチ1号溝（第16図）

調査区南側にH-1区1・2号溝の確認を目的に調査途中に設定したトレンチである。調査では遺構検出において北東方向から南西方向へと延びるH-1区1号溝が確認できたことから、幅約1.5mのサブトレンチを設け掘り下げを行った。なお、2号溝の確認はできていない。

トレンチでの溝の規模は、溝に斜めにトレンチが入っているため、推定で幅が4.5m前後、底面の幅が1m前後、検出面からの深さが1.8m前後を測る。溝の断面形態は「V」というよりは「U」字形をなしている。また北側斜面には不整形な小ピットが認められた。

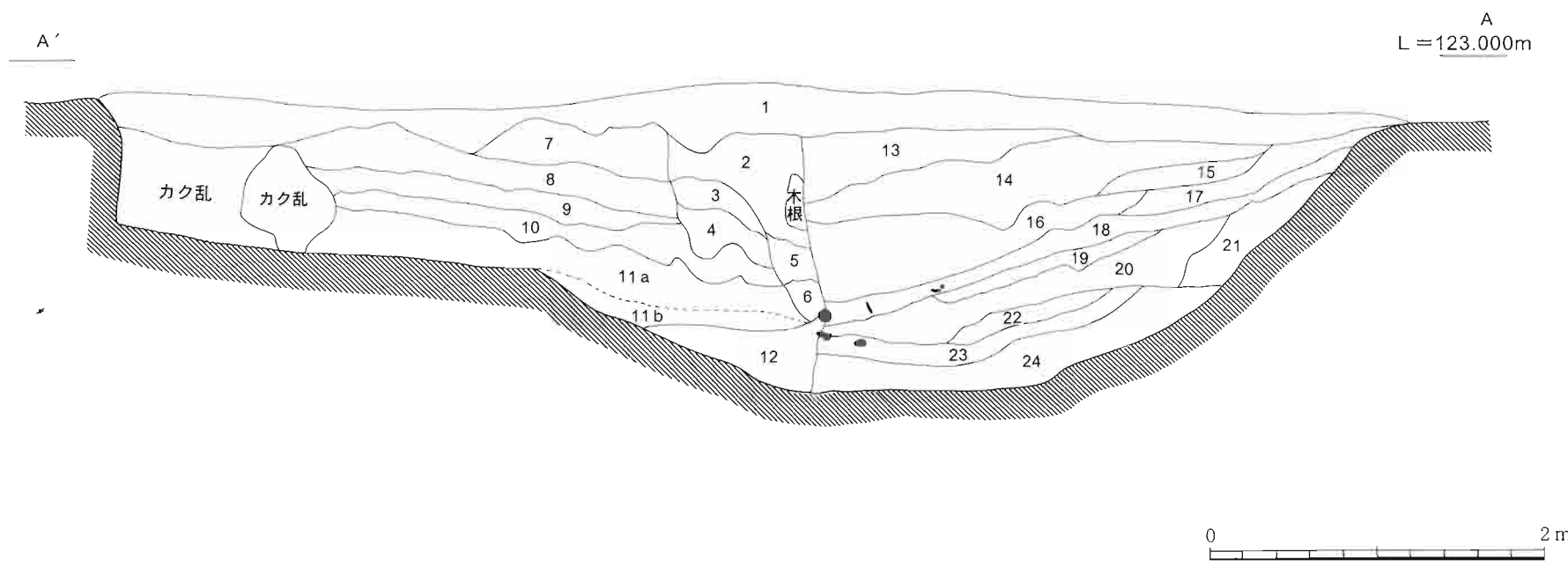
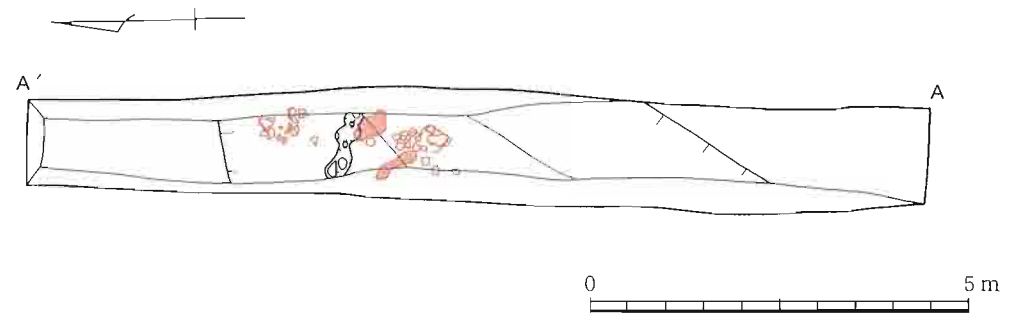
溝の埋土堆積状況は第16図に示すとおり24層に分けることができる。この土層断面はそのほぼ中央付近を境に南北の堆積の様子が異なっている。それは、6・10層である黒色の腐食土に対応するのが13層で、焼土や炭などを含む11層に対応するのが14～16層であるように一種の段差が生じていることである。南側の13～24層は黒色の腐食土である13層、土器などを含む14～16層、地山ブロックや地山の砂礫を含む17～24層の大きく3つの層に分けられ、自然な堆積状況をなしている。この堆積状況はH-1区調査区の1号溝のA-A'の土層断面と比較すると13層が3層、14～16層が4・5層、17～24層が6層に対比できそうで、その様相は類似していると言える。ところが北側の2～12層はその対比が6・10層が3層、12層が4・5層に対比できるが、6層に対比できる層が存在していない。調査中からこの土層の解釈についてはいろいろと検討したが、仮に断層などの自然発生的なものとした場合は、すでに13～24層は自然堆積であるため12層下に17～24層に対比できる層が存在しなければならないが、12層下の地山は24層下と同じ砂礫層でありこのことは考えづらい。



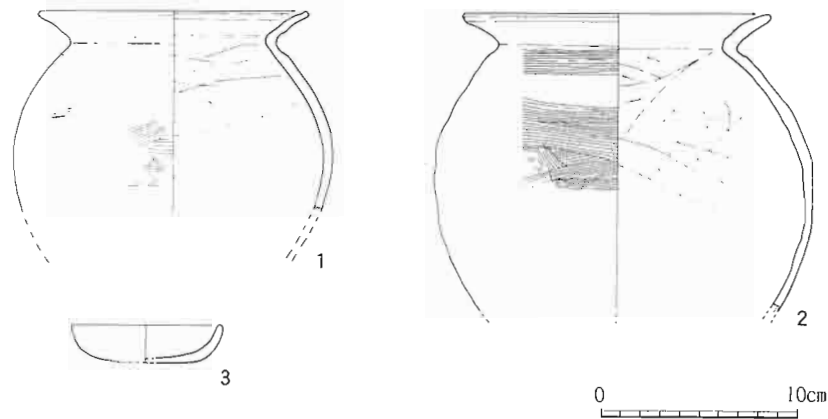
写真9 H-1区トレンチ1号溝の土層断面

そこで、現段階では①土層の南北で境が明瞭に別れ、②それを境とする南北に鍵層となる黒色の腐食土が互いに存在することは、この溝がほぼ完全に埋没しての在り方で、③12層以下に自然堆積の17～24層が見られず、④また2～6層が後世の掘り込みでなく流れ落ちる様相が窺え、⑤その境に沿って溝の斜面には不整形な小ピットが存在するなどの理由から、ここに溝に付属する橋などの何らかの施設が存在し、溝が埋没した後にそれが朽ち果てたためにこのような現象となったと理解しておきたい。狭いトレンチという範囲での在り方なので、今後の周辺調査での大きな課題であろう。

次に遺物は上層から土器片が出土したが、全体的にはそれほど遺物は多くなく、小ピット付近から土器や焼土、炭がまとまって検出された。



第16図 H-1区トレンチ1号溝実測図(1/100) および同断面土層実測図(1/40)



第17図 H-1区トレンチ1号溝出土の土器実測図(1/4)

出土遺物 (第17図、第3表、図版7～10・12)

1・2は甕である。1は口縁部が直線的に外反し、端部内側はつまみ上げる。胴部は球形をなす。外面はハケ、内面はヘラ削りを施す。口径13.6 cm、胴部最大径16.3 cmを測る。2は口縁部が内湾気味に外反し、胴部は球形をなす。外面はハケ、内面はヘラ削りを施す。口径13.2 cm、胴部最大径19.5 cmを測る。

3は碗である。小型で、薄く仕上げている。器高1.9 cm、復元口径7.7 cmを測る。1・2は小ピットより約30 cm上から、3は下層(11・12層)からの出土。

H-1区2号溝 (第18・19図)

調査区北側をほぼ東西方向に走るH-1区1号溝(3号環濠)に切られる溝である。西側のG-1区内においてG-1区1号溝(3号環濠)に切られるG-1区2号溝(2号環濠)の続きにあたる。またH-1区3・4号溝にも切られ、H-1区内で検出した溝のなかでは最も古い溝である。

調査ではH-1区1号溝との切り合い関係が顕著な2号溝の西側部分を主に掘り下げを行い、東側部分についてはトレンチによる確認にとどめている。さらに、1・3・4号溝との切り合いの状況を把握することを目的にベルトをなるべく多く残し詳細な土層観察を行ったが、調査の終盤においては遺構の現状保存も考慮してこれらベルトの取壊しは行っていない。

この溝は東側からほぼ東西方向にのびて、溝の西側から北に約10 mほど屈曲し、さらに西へほぼ直角に折れる張出部を有する。張出部は西側の調査区外へと延びているが、G-1区ではG-1区1号溝に切られているためか、続きと考えられる溝は検出できていない。この遺跡ではK-2区、K-3区、N区、O-1区において2号環濠に付設された「コ」字状を呈する張出部が確認されている。そうした例を参考とするならば、この溝の張出部の続きは、調査区外の農道下で再度屈曲して「コ」字状の張出部となるのであろう。溝の東側上面は3・4号溝に切られるが、1・2トレンチによりその存在が確認でき、H-1区1号溝と並行するように東へ延びていることが明らかとなった。

2号溝の規模についてはH-1区内にあっては検出した長さが約18 m、検出面での幅が約2～2.5 m、底面の幅が40～60 cm、検出面からの深さが85 cm前後を測る。また張出部の幅は2.6～2.9 m、底面の幅が40～60 cm、検出面からの深さが110 cm前後を測る。溝の断面形態は「U」字形をなし

ている。

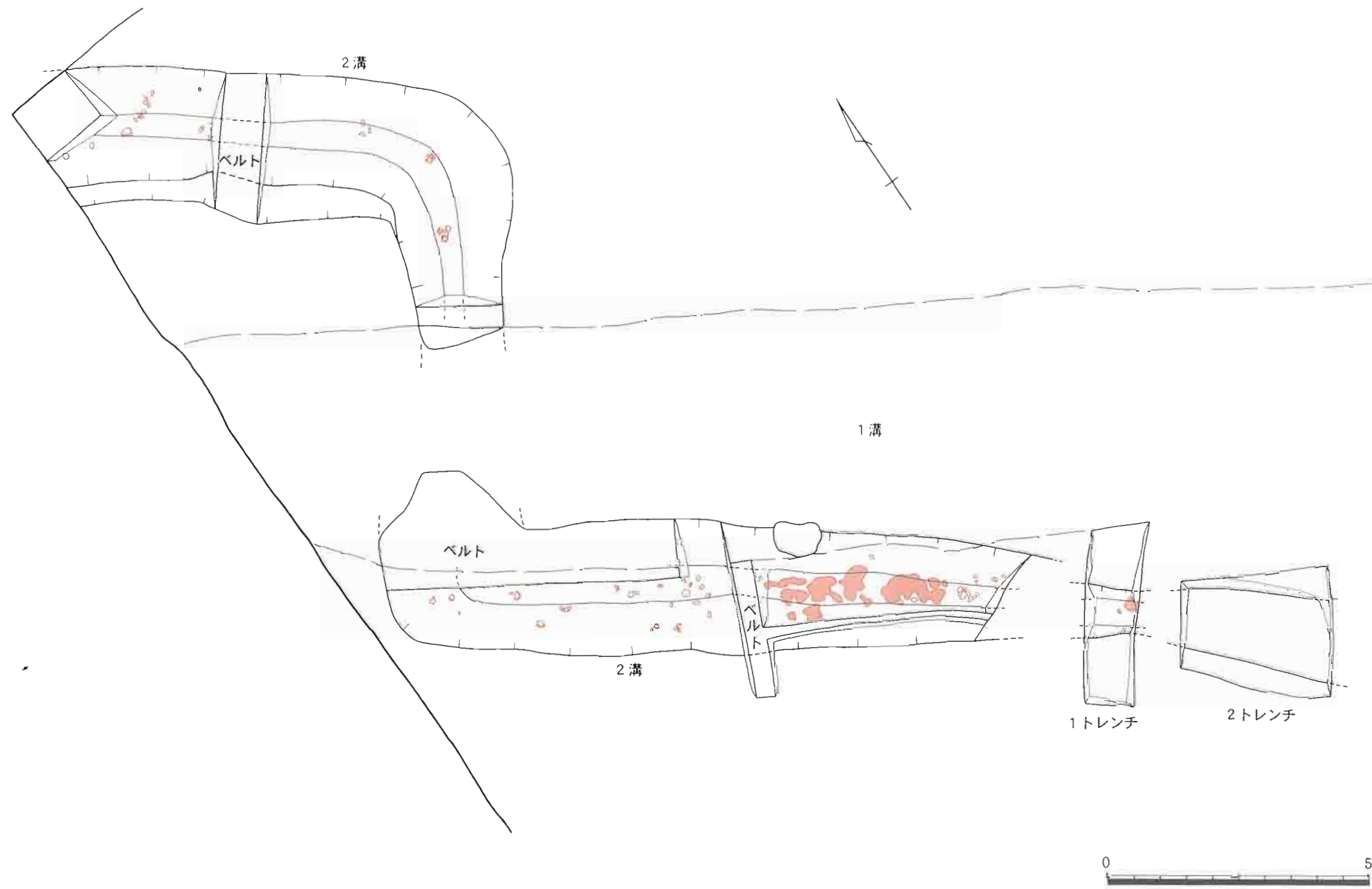
溝の埋土堆積状況は第19図に示すとおり張出部との状況の違いが見られる。まず張出部の横断面A-A'は大きく8層に分けることができる。1層は茶色土に地山の茶色ブロックを含む。2層は前後の層とある程度ははっきりした区別がつけられ、3つに分けられる。2a層は暗茶褐色土で、土器や炭、地山礫を多く含んでいる。2b層は茶色土に地山の砂礫を含む。2c層は明茶色土である。3～8層にはいずれも地山の砂や礫を含むが、自然な堆積状況を示す。3層は地山の砂層。4層は茶色土に地山の砂礫を含む。5層は4層と同じであるが、含む砂の量が多い。6層は地山の砂層。7層は茶色土に地山の砂礫を含む。8層は地山の砂を含んでいる。

次に溝の横断面であるB-B'および縦断面であるC-C'は、大きく4層に分けることができる。1層は5つに細分されるが、基本的には同一層である。1a層は地山の黄色ブロック層である。1b層は地山の茶色ブロック（多）と地山の黄色ブロック（少）の混在した層である。1c層は1b層と逆の地山の茶色ブロック（少）と地山の黄色ブロック（多）の混在した層である。1d層は1b層と1c層の中間にあたり、地山の茶色ブロックと地山の黄色ブロックの量がほぼ同じぐらいに混在した層である。1e層は地山の茶色と黄色ブロックに粘土が含まれる。2層は暗茶色土で、土器や焼土、炭を含む。3層は2つに細分される。3a層は茶色土、3b層は暗黒茶色土で、土器や焼土、炭を含む。4層は暗褐色土に地山の黄色ブロックをわずかに含む。

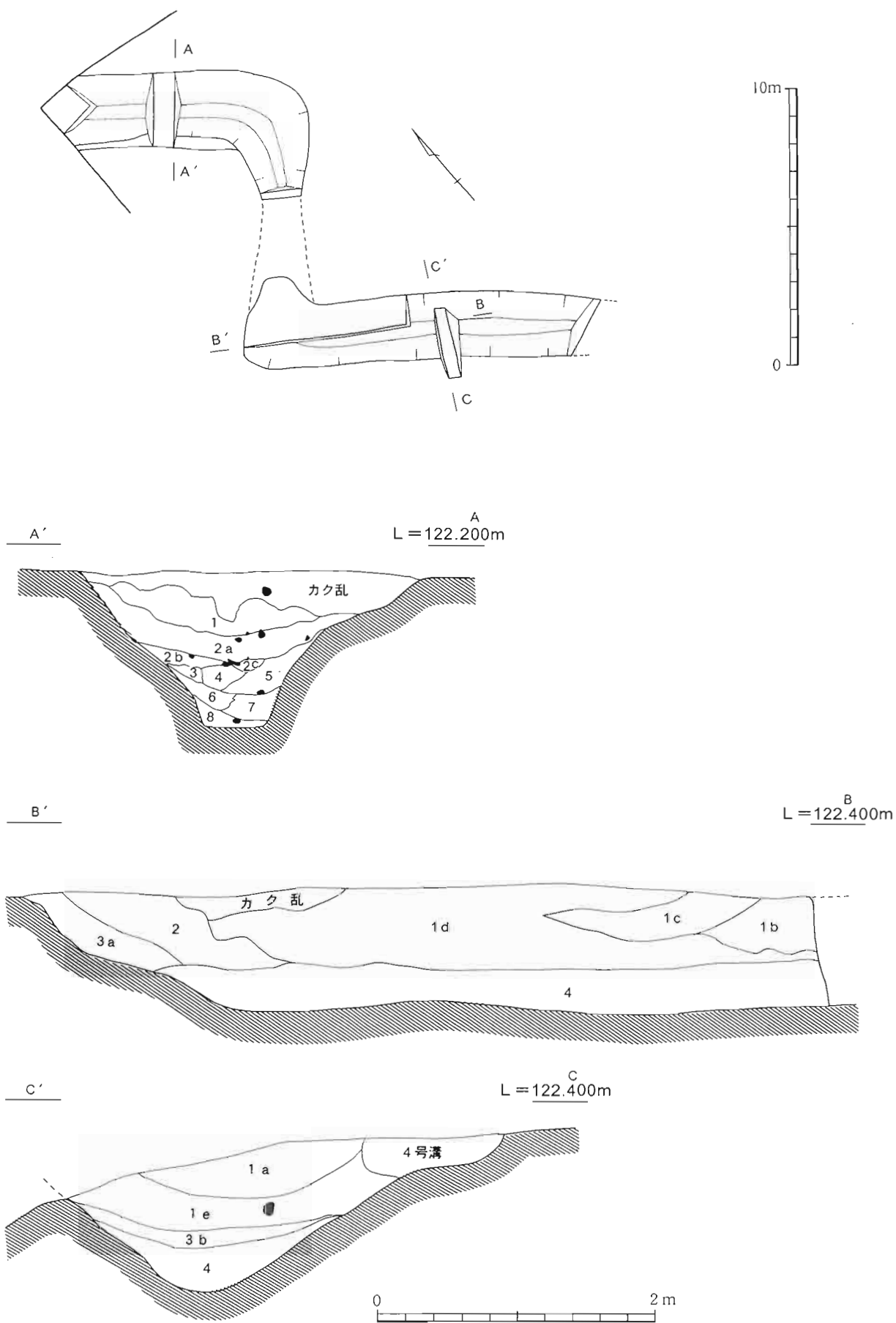
以上のように、同じ溝であっても土層の堆積状況は大きな違いを見せている。とくにB-B'およびC-C'上層にみられる1・2層は地山のブロック層であり、溝の廃絶に伴う自然な堆積とは考えにくい。その特徴をまとめてみればH-1区1号溝や他の調査区の溝にみられる鍵層となる黒色の腐食土が見られず、2～4層はブロック層を余り含まない自然な堆積をなし、しかも土器などが含まれていて、1e層に含まれる粘土はH-1区1号溝の底面付近にみられる地山の粘土と推定されることである。これらのことから、このブロック層については切り合うH-1区1号溝を掘削する際にそこからの排土を投げ入れ埋めた結果生じたものと考えられる。



写真10 H-1区2号溝張出部の発掘状況(北より)



第18図 H-1区2号溝平面実測図(1/100)



第19図 H-1区2号溝実測図(1/20) および同断面土層実測図(1/40)

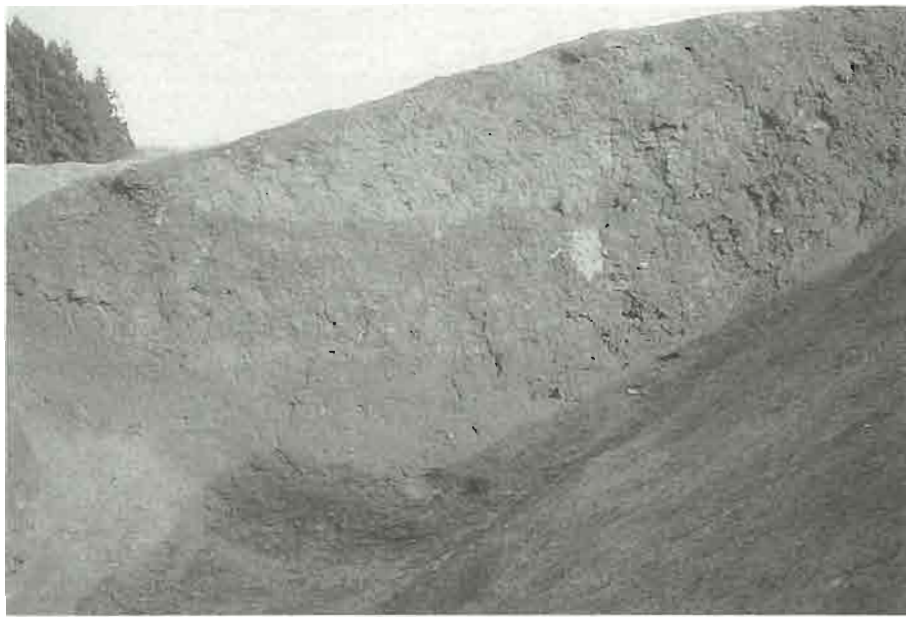


写真11 H-1区2号溝の土層断面(C-C')

張出部と比較した場合、やはり土器などを含む2層上層に地山ブロックを含む1層があり、その状況はB-B'およびC-C'ほど顕著ではないものの、同様な在り方とみることができる。このことはH-1区2号溝からH-1区1号溝への溝の掘り直しにあたって、H-1区2号溝が完全に埋没する前に意図的に行われたものと判断される。

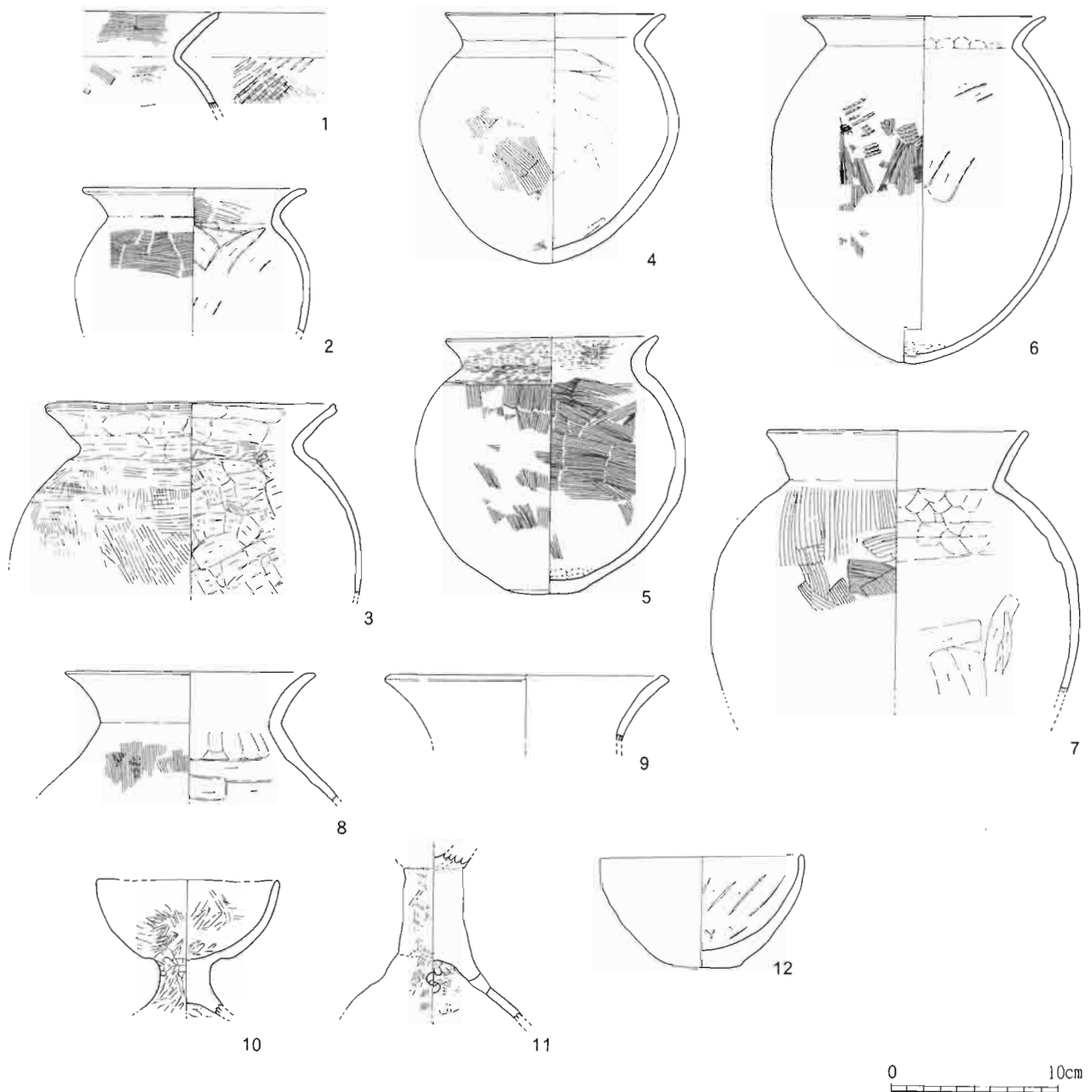
遺物の出土状況については、2a・3b層（張出部では2a層）からある程度まとまって出土している。なかでも、1トレンチ西側からは焼土や炭が広範囲にわたって検出された。以下、この溝から出土した土器は主なもののみを図示し、その器種構成などは今後予定している総括的な報告のなかでまとめることとする。

なお、遺物の一括しての取り上げについては、1層を上層、2層以下を下層として行っている。

出土遺物（第20・21図、第9・15表、図版7～10・12）

第20図1～8は甕である。1は口縁部は内湾気味に外反する。胴部外面はタタキ後ハケ、内面にハケを施す。2は胴部上半が張り、口縁部は内湾しながら外反する。胴部外面にハケ、内面にヘラ削りを施す。復元口径13.4 cm、復元胴部最大径14.2 cmを測る。3は口縁部が直線的に立ち上がり、端部に凹線が巡る。胴部上半は肩が張り気味で、外面にハケ、内面にヘラ削りを施す。口径17.3 cm、胴部最大径21 cmを測る。搬入品。4は小型の甕で、胴部は丸みをおび、底部は不安定な丸底で、器壁は厚みがある。器高14.9 cm、口径13 cm、胴部最大径15.3 cmを測る。5は口縁部が短く、内湾気味に外反する。胴部は丸く、底部は丸底気味のレンズ底である。内外面ともハケを施す。器高15.4 cm、口径12.6 cm、胴部最大径16 cmを測る。6はほぼ完形品の甕で、口縁部は内湾しながら外反する。胴部は卵形をなし、底部は尖り気味で丸くはない。器高20.7 cm、復元口径14.6 cm、胴部最大径18 cmを測る。7は口縁部が内湾気味に外反する。胴部上半は肩が張り気味で、外面ハケ、内面にヘラ削りを施す。復元口径15.8 cm、復元胴部最大径22.2 cmを測る。8は胴部上半が張り気味で、頸部は細く、口縁部は内湾気味に外反する。復元口径15 cmを測る。

9は壺の口縁部であろうか。口縁部は内湾気味に外反し、端部はほぼ平坦に仕上げる。



第20図 H-1区2号溝出土の土器実測図(1/4)

10は台付碗である。体部は深く、欠落しているが短い脚部が付くと考えられる。口径10.8cmを測る。

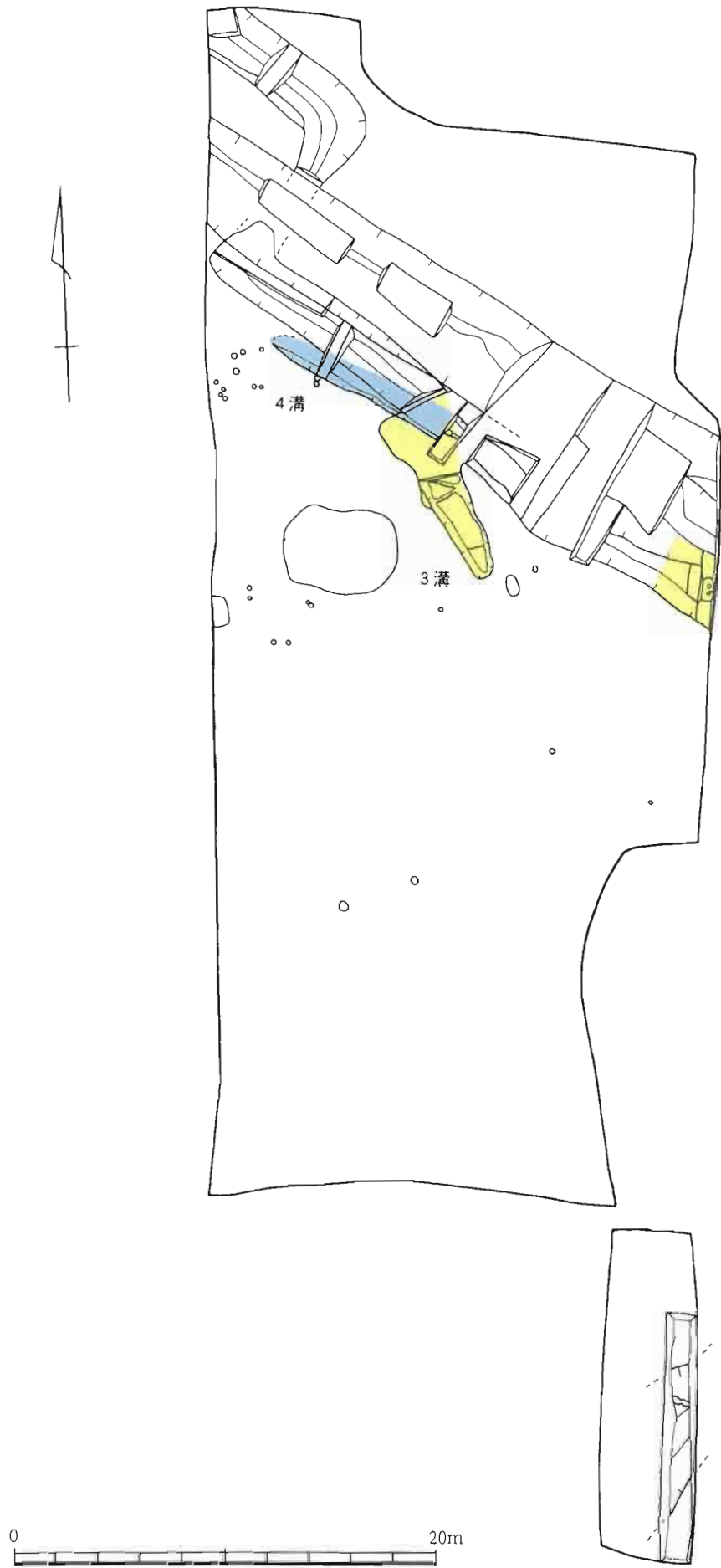
11は高坏の柱状部である。柱状部は細く中実で、裾部に穿孔が4穴ある。脚部は欠く。

12は碗である。底は平底をなす。器高6.3～6.7cm、復元口径12.2cm、底径4cmを測る。1～5・7・9は下層出土。

第21図1は鉄鏃である。定角式で、基部が一部欠損する。



第21図
H-1区2号溝出土の鉄器実測図(1/2)



第22図 H-1区遺構配置図③—中世・近世—(1/300)

3) 中世・近世

中世の溝1条（H-1区3号溝）と近世の溝1条（H-1区4号溝）が検出された。

H-1区3号溝（第22図、第5表）

土坑状をなす溝である。H-1区4号溝に切られ、どのような形状などを示すかははっきりとつかめなかった。H-3区2号溝と関連があるのかもしれない。検出した規模は長さが約9m、検出面での幅が2m前後、検出面からの深さが15～50cmを測る。溝には数か所の段があり、断面形態は概ね「U」字形をなしている。この溝から出土した遺物は少なく、青磁などがある。

出土遺物（第13・24図、第8・9表）

溝からの遺物が少ないので、H-1区1・2号溝上面に中世の遺物が出土したので参考程度に掲載する。第13図48・49は土師器の坏である。第24図1～3は青磁碗である。1は内面に沈線が、2は外面に蓮弁文が施されている。

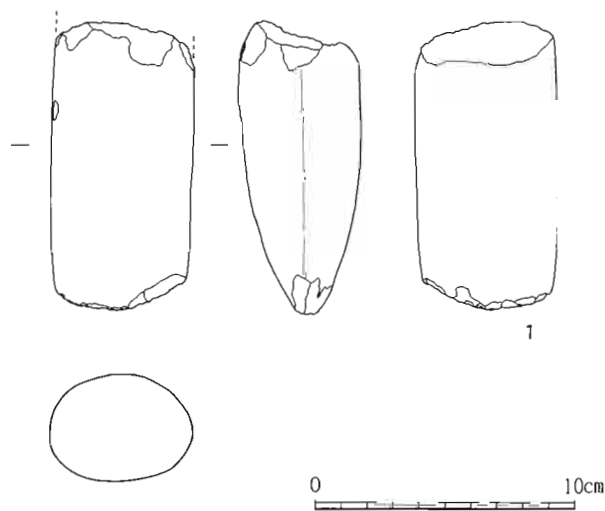
H-1区4号溝（第22図、第5表）

調査区はほぼ東西方向に走る溝で、H-1区2・3号溝を切る。西側は途中でなくなり、東側も途中でなくなるため、H-3区4号溝と同一の溝なのかははっきりしない。検出した溝の規模は長さが約10m、検出面での幅が1m前後、検出面からの深さが20cm前後を測る。溝の断面形態は「U」字形をなしている。近世期の畑地の境界溝であろう。

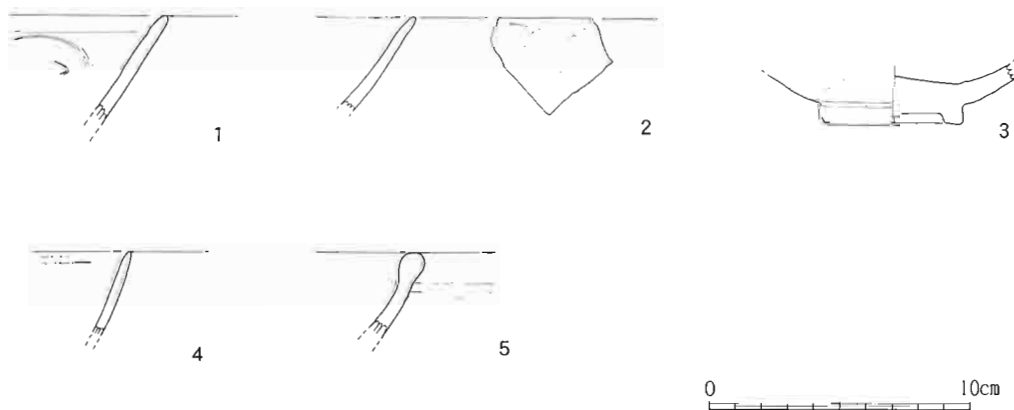
出土遺物（第23・24図、第9・14表）

第24図4は染付碗で、内面にコバルトブルーで2本の施文を施す。5は鉢であろうか。

第23図1は磨製石斧である。蛇文岩製。流れ込み資料である。



第23図 H-1区4号溝出土の石器実測図(1/3)



第24図 H-1区3・4号溝出土の土器実測図(1/4)

第3節 H-2区の調査（第25図）

1) 調査の内容（第25図）

H-2区は小迫辻原遺跡全体の内容および範囲確認調査として、平成3年度に発掘調査を実施した調査区である。この調査区はH区全体からみれば東側半分を占める面積があり、東側はI区、西側はH-3区、南側はK-2区、北側は杉木が植えられた斜面との境界に接している。ほぼ四角い形をしたH-2区の調査前の現況地形は南西側が高く、そこから北側、東側へと緩やかな傾斜を示す畑地であった。このH-2区の東北隅には柿木が1本植えられていたため今回の調査範囲からは外した。

調査ではこれまでのC区・P区・L-1区の調査において発見されていた台地を分断すると考えられる1号条溝が遺跡北側のどの場所を走り、どのような在り方を示すかその全容を把握すること念頭において、L-1区からこの調査区へと延びることを想定した上で、東側は農道のぎりぎりまでを調査区域とした。ところが調査では結果的に1号条溝の検出はできず、この1号条溝がこの調査区よりさらに東側のI区のなかを走っていることが事実となった。

H-2区の調査は国庫補助事業である日田地区遺跡群発掘調査事業の一つとして、O-2区の調査と並行して行った。調査では調査区の南側と西側において遺構が集中してみられ、一部の遺構は削平を受けていたものの比較的保存状況は良かった。この調査区での遺構面は南側は暗茶色の固くしまるローム層であるが、北側では黄色のローム層や一部の場所では砂礫層であった。

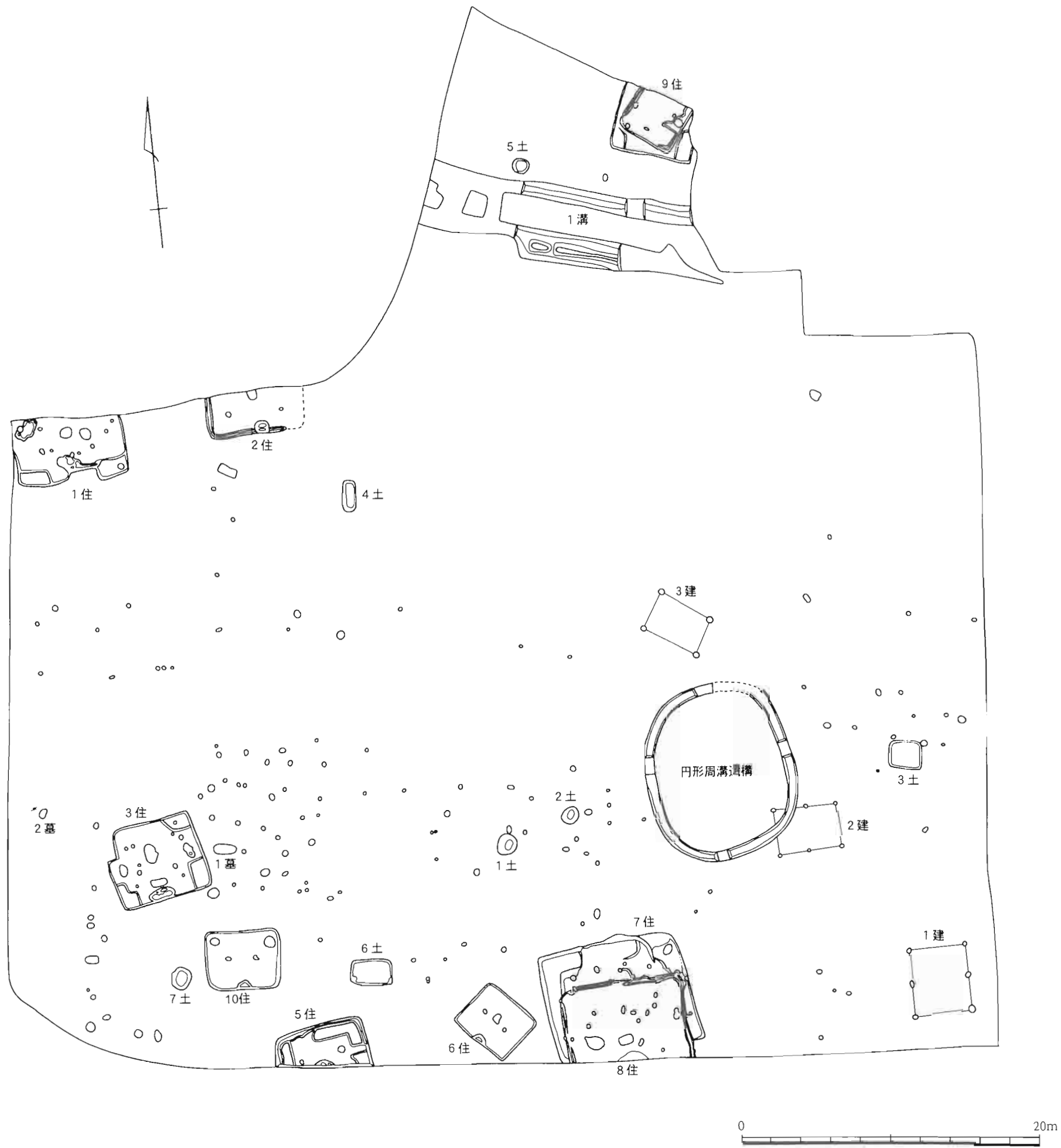
H-2区で検出した遺構は弥生時代の遺構が土坑6基、掘立柱建物跡1棟、墓（小児用甕棺墓）2基、円形周溝遺構1基、古墳時代前期の遺構が竪穴住居跡12棟、掘立柱建物跡2棟、近世の遺構が土坑1基、溝1条などである。このほか、柱穴多数が検出されている。これらの遺構からは土器類のほかに石器や鉄器、玉類が出土している。以下、調査の経過を簡単にまとめる。

調査は平成3年8月26日にバックホウ（0.75）を使って表土剥ぎを開始した後、O-2区において方形に巡る溝（3号方形環濠）が検出されたことから作業の中心をO-2区とし、H-2区の遺構検出作業は10月31日からと遅れてスタートした。遺構検出が終わった11月12日からは竪穴住居跡の掘り下げを開始し、この頃から調査作業の主体はO-2区からH-2区へと移った。12月9日には平板測量図（1/100）の作成を行い、12月16日から遺構の個別実測（1/20）を始めた。

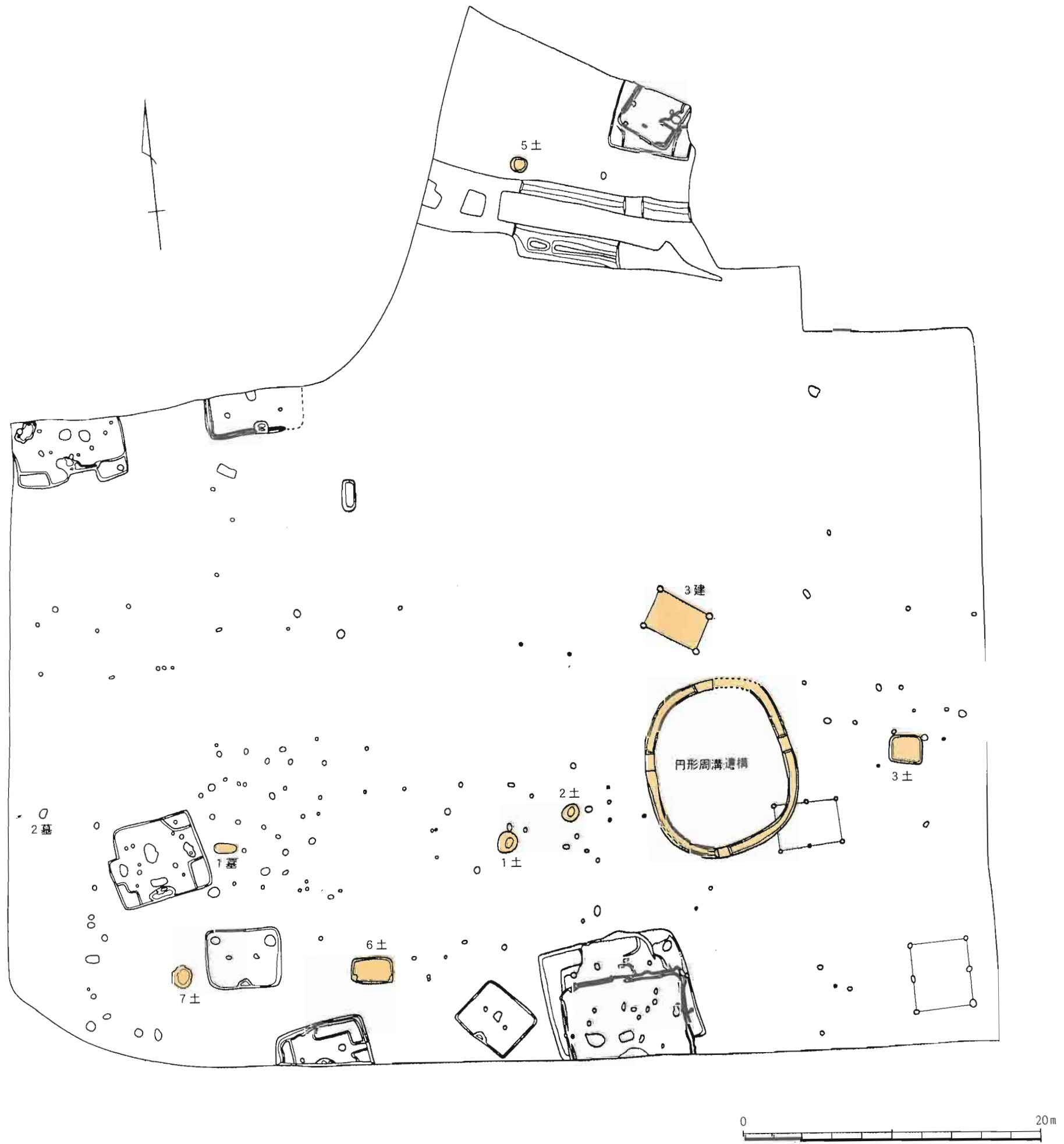
年が開けた平成4年1月から2月中旬頃までは、2つの区の掘り下げや測量作業を並行して行い、2月18日には掘り下げ作業の大半を終え、2月23日から空中写真撮影のための清掃作業を行って、2月25日には空中写真撮影を行った。この撮影後の2月26日にはベルトの除去作業やレベリングを行ってこの調査区の作業は終了した。3月3日に器材の水洗・撤去を行い、その後調査区の埋め戻し作業を開始し、3月25日をもって全作業が完了した。

なお、H-2区の調査対象面積5,451㎡で、調査面積は3,450㎡である。

最後に、この調査区での特徴をまとめると、①調査区全体の遺構の残存状況は、他の調査区と比べると比較的良好であったこと。②遺構の密度は比較的高かったこと。③日田市内では初例となる弥生時代の円形周溝遺構が確認されたこと。④古墳時代前期の竪穴住居跡が数多く見られたこと。⑤この時期の竪穴住居跡のなかには、北側の台地末端ぎりぎりの位置に建てられているものが存在すること。⑥古墳時代前期の竪穴住居跡に付属していたと考えられる掘立柱建物跡が確認されたこと。⑦古代・中世期の遺構がほとんど見られないことなどである。



第25図 H-2区遺構配置図①(1/300)



第26図 H-2区遺構配置図②-弥生時代(1/300)

2) 弥生時代 (第 26 図)

この時期の遺構としては土坑6基、掘立柱建物跡1棟、墓(小児用甕棺墓)2基、円形周溝遺構1基が検出された。これらの遺構の分布をみると、調査区の北側にあるH-2区5号土坑を除くとすべての遺構が調査区中央より南側に集中している。とくに2基の墓(小児用甕棺墓)は調査区西側の近接した場所に営まれている。

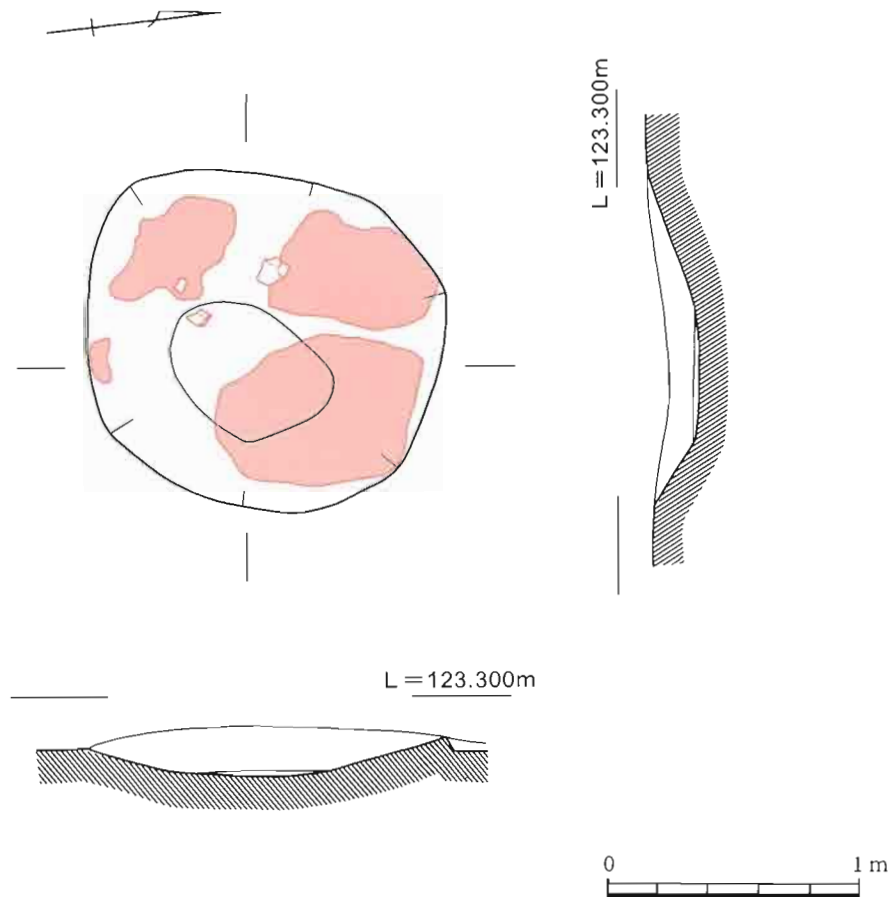
とはいえ、全体的に遺構の密度は薄く、台地西側や南側での在り方と比較した場合には極端に少ない。このことは近接するH-1区、H-3区、K-3区、K-4区、L-2区などの状況からも窺え、削平による影響も十分考えられるが、H-2区周辺は弥生時代集落の密度の薄い場所といえそうである。

1. 土坑 (第 3 表)

この時期に該当すると考えられる土坑は6基である。これらの土坑は平面形態や深さなどまちまちで、その分布にも規則性は認められない。なお、H-2区の土坑については竪穴住居跡内に残る屋内土坑は外し、個々に存在するものだけに番号を付している。

H-2区1号土坑 (第 27 図)

調査区のほぼ南側中央で検出した土坑である。平面形はほぼ円形をなしており、その規模は長軸の長さ140 cm、短軸の長さ130 cm、深さ18 cmを測る。土坑の断面形態は浅い皿状を呈している。



第27図 H-2区1号土坑実測図(1/30)

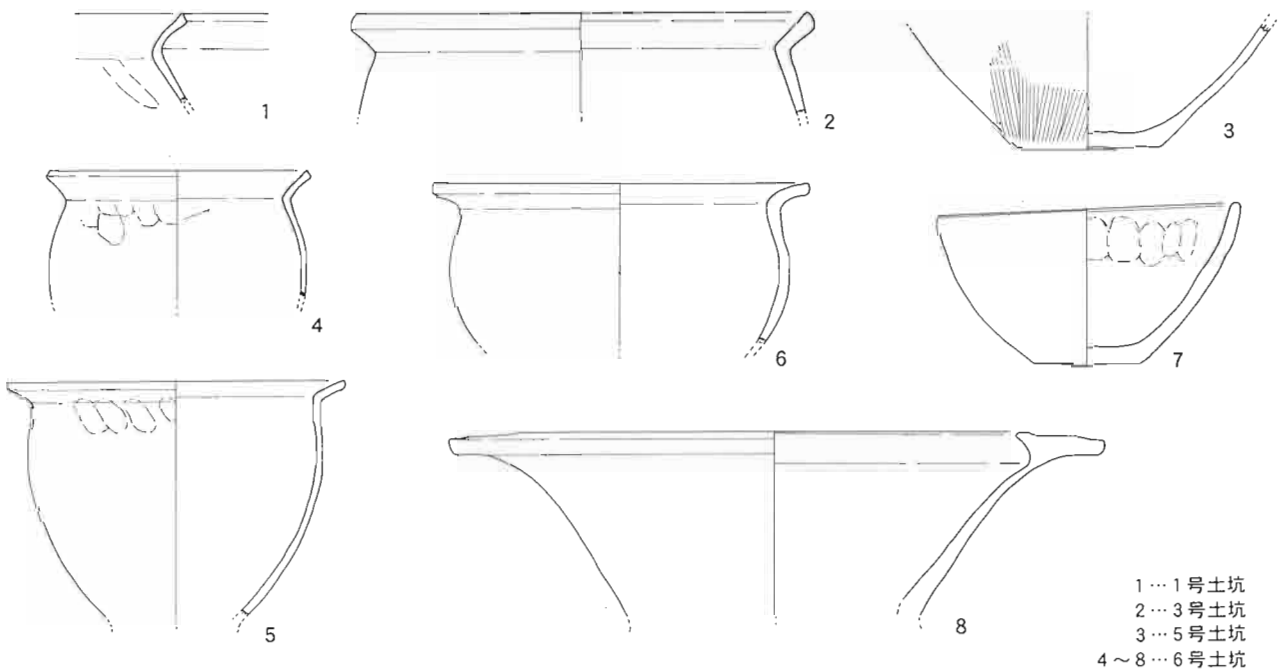
土坑内からは土器片が出土したほかに、焼土や炭の広がりがみられた。この土坑については周辺に柱穴が存在することから竪穴住居跡に伴う炉跡とも考えたが、周辺には該当する柱穴は認められなかった。また、小迫辻原遺跡内でも確認されている土器焼成坑とも考えたが、しっかりとした炭層や焼成面がないことからこれにも該当しない。この土坑から出土した遺物には甕などがある。

出土遺物（第28図-1）

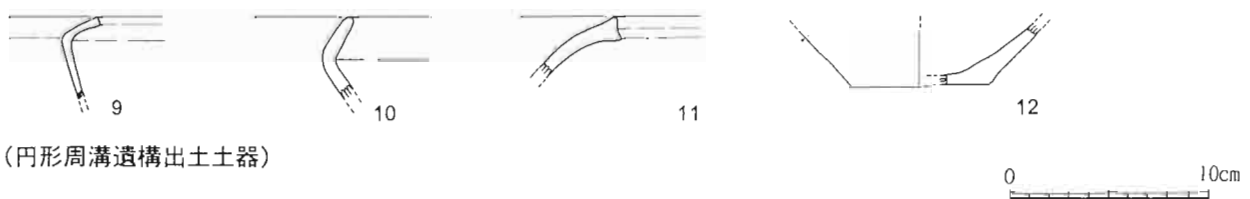
図示した遺物は甕の口縁部である。「く」字状をなし、口縁端部は上方に跳ね上げている。調整は内面がナデ調整。焼成は良好である。

H-2区2号土坑（第29図）

調査区のはほぼ南側中央、H-2区1号土坑の東側約4mの場所で検出した土坑である。平面形はほぼ円形をなしており、その規模は長軸の長さ112cm、短軸の長さ109cm、深さ9cm測る。土坑の断面形態は浅い皿状を呈している。残存状況は決して良くはない。土坑からは土器片が出土したほかに、床面直上に広い範囲で焼土や炭の広がりがみられた。この土坑についても周辺に柱穴が存在することから竪穴住居跡に伴う炉跡とも考えたが、該当する柱穴は認められなかった。また、H-2区1号土坑同様に土器焼成坑とも考えたが、しっかりとした炭層や焼成面がないことからこれにも該当しない。この土坑から出土した遺物には甕などがあるが、図示できる遺物はない。



(1・3・5・6号土坑出土土器)



(円形周溝遺構出土土器)

第28図 H-2区1・3・5・6号土坑および円形周溝遺構出土の土器実測図(1/4)

H-2区3号土坑（第30図、図版13）

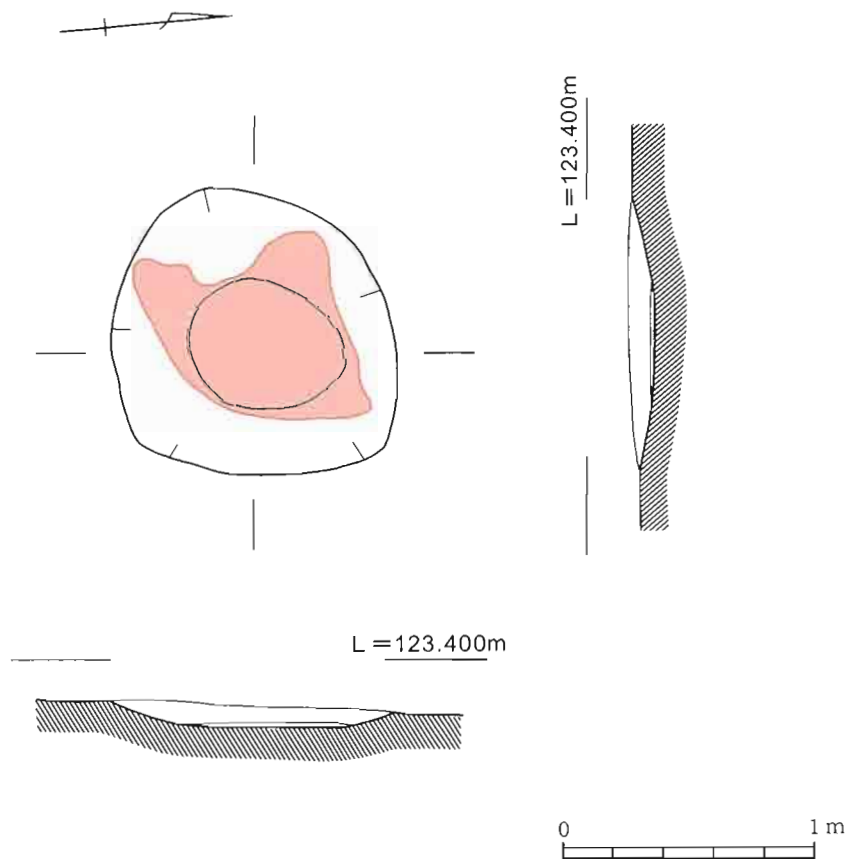
調査区のほぼ東側中央で検出した土坑である。平面形は長方形をなしており、その規模は長軸の長さ220cm、短軸の長さ186cm、深さ19cmを測る。土坑の断面形態は底面が平坦な「コ」字状を呈している。土坑内からは第28・31図に示す土器や石器が床面近くから出土した。

出土遺物（第28図-2、第31図）

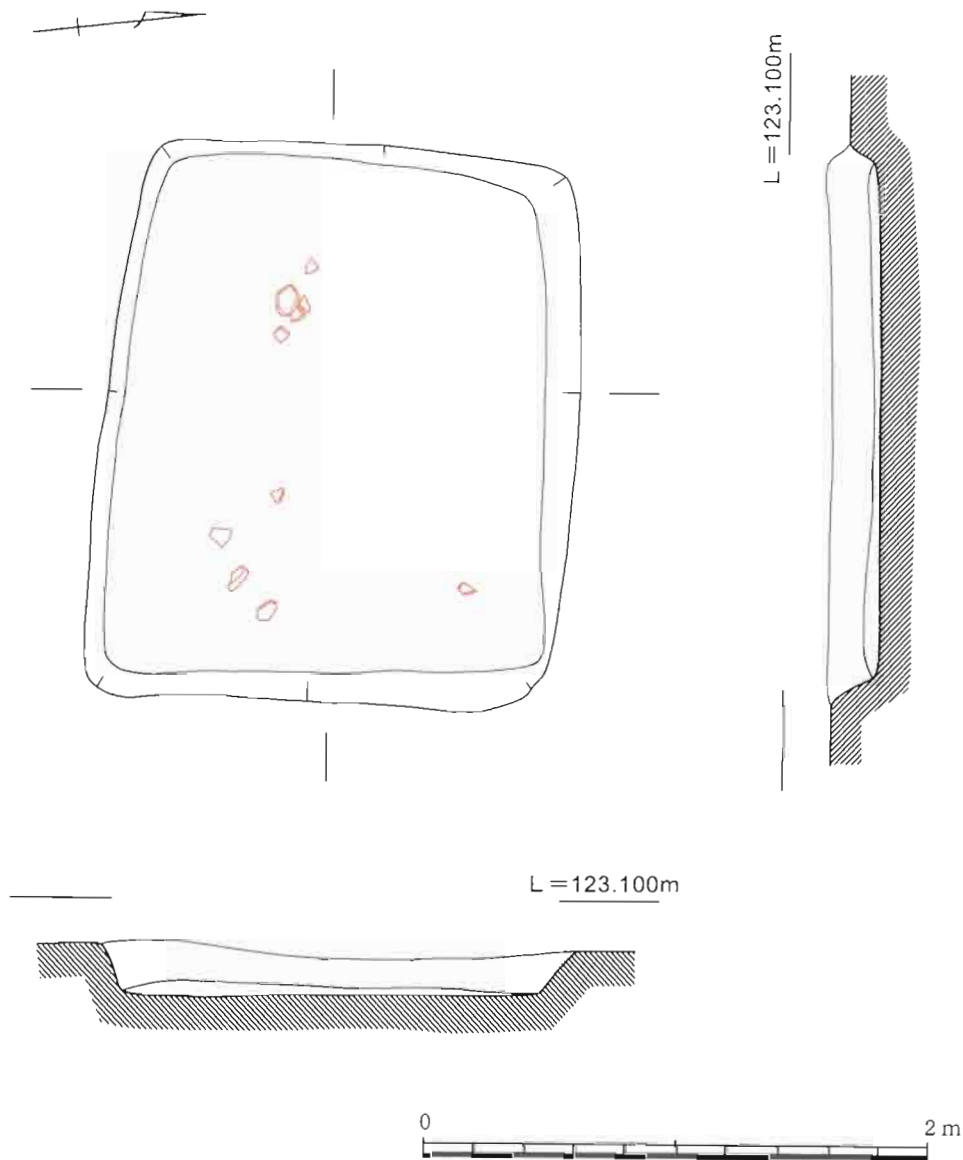
第28図-2に図示した遺物は甕の口縁部である。「く」字状をなし、口縁部は短く、口縁端部は上方に跳ね上げている。復元口径は23.8cmを測る。表面の摩耗が著しく調整は内外面とも不明である。第31図の1・2とも砥石で、1は埋土中、2は床面より5cm直上で出土している。1は縦長で、6面に砥面が残り、そのうち2面には幅約1cmの溝が残っている。2は不整形で、6面に砥面が残り、とくに表面には径13cmほどの窪みが顕著に残っている。1・2とも砂岩製である。

H-2区5号土坑（第32図）

調査区の北側中央で検出した土坑である。平面形はほぼ円形をなしており、その規模は長軸の長さ12.5m、短軸の長さ11.2m、深さ8.4mを測る。土坑の断面形態は底面が平坦な「コ」字状を呈している。土坑内からは図示した甕の底部のほかに、跳ね上げ口縁の甕などの遺物が出土している。



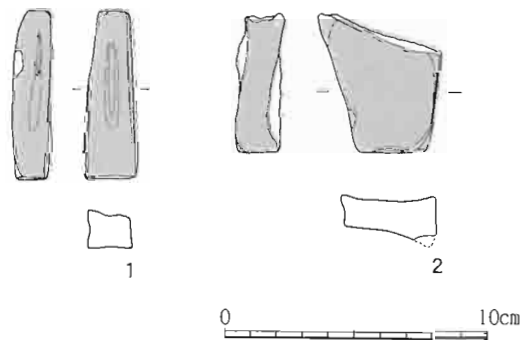
第29図 H-2区2号土坑実測図(1/30)



第30図 H-2区3号土坑実測図(1/30)

出土遺物 (第28図・3)

図示した遺物は甕の底部である。底面は平底で薄い。外面には丹塗りの痕跡が残っている。底径は7.4cmを測る。調整は内面がナデ調整、外面がタテハケ後ナデ調整。焼成は良好である。



第31図 H-2区3号土坑出土の石器実測図(1/3)

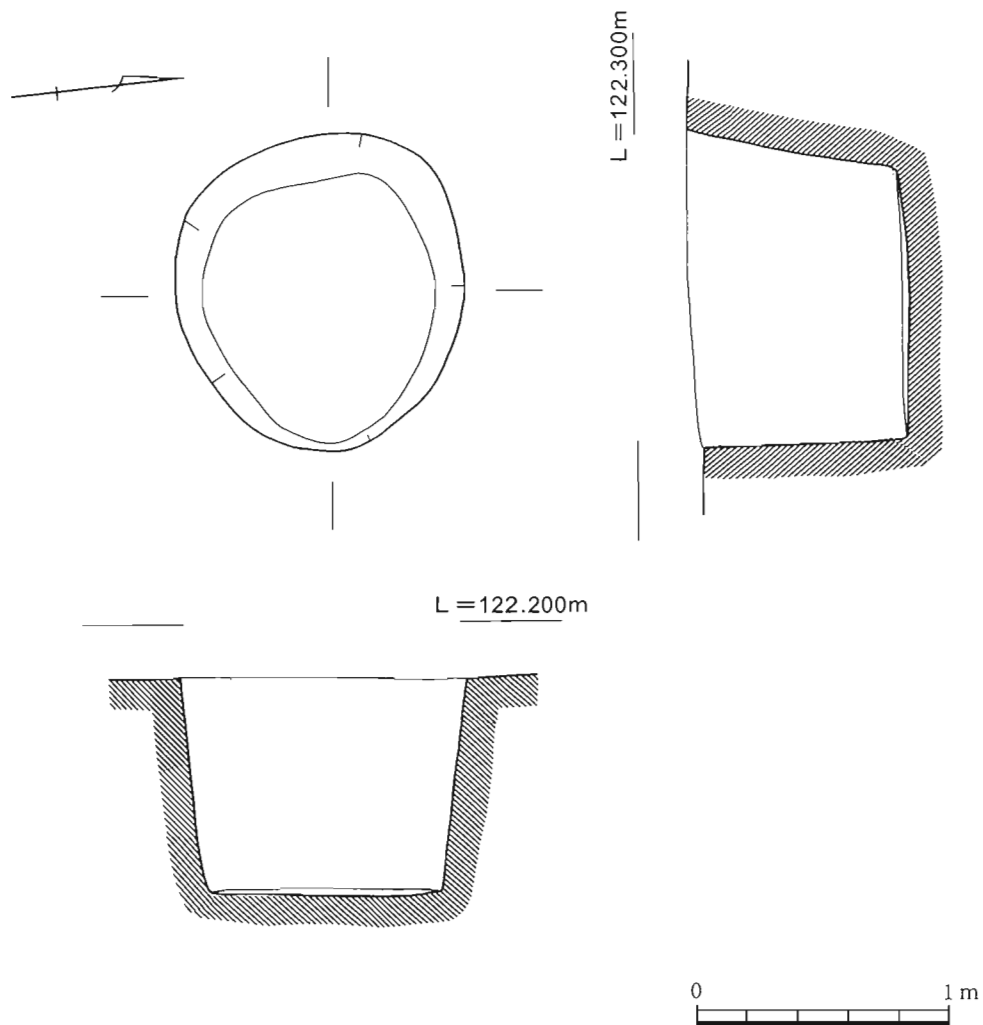
H-2区6号土坑 (第33図、図版13、写真12)

調査区の南側で検出した土坑である。平面形は長方形をなしており、その規模は長軸の長さ278cm、短軸の長さ182cm、深さ11cmを測る。土坑の断面形態は底面が平坦な「コ」字状を呈してい

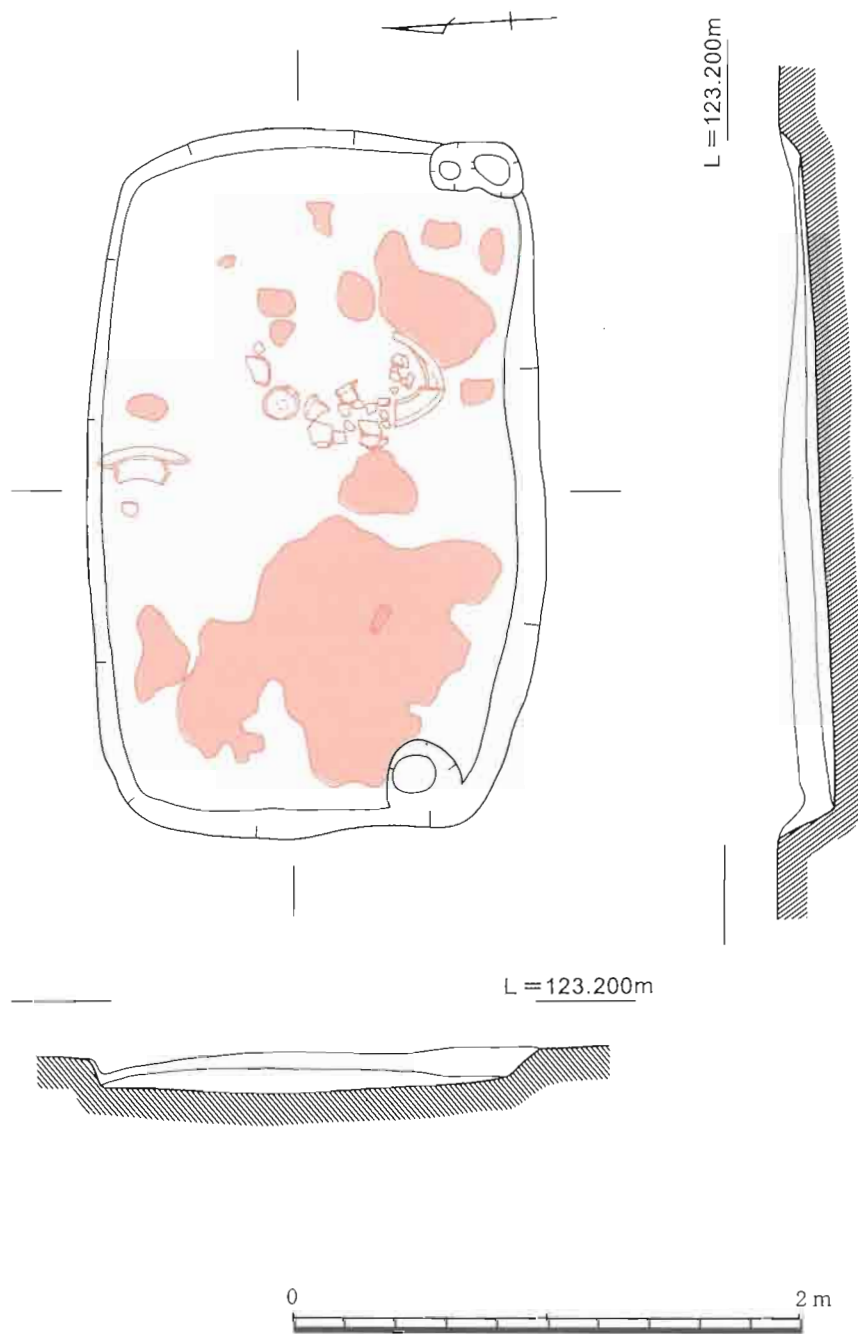
る。土坑内には埋土に混じって、床面直上より焼土や炭と粘土の堆積が広い範囲でみられた。とくに土坑ほぼ中央の焼土や炭の中からは甕・壺・鉢などの土器がまとまって出土し、これらの土器を伴う炭と焼土の回りの粘土の広がりとはとくに西側に集中していた。第28図に示す出土した土器はいずれももろく、火熱による2次焼成痕跡がみられるなど出土状況とも考え合わせると、この土坑内で火熱を受けたと思われる。が土坑床面に直接火熱の痕跡がないことから、土器焼成坑とは考えずらく、別の何らかの使用による結果であろう。

出土遺物 (第28図-4~8)

4は小型の甕である。胴部下半は残っておらず、「く」字状をなす口縁の端部は上方に跳ね上げている。復元口径は15.6cm、復元胴部最大径は15.6cmである。調整は内外面とも調整は不明で、焼成は良好である。5も甕である。底部は残っておらず、口縁部は外に外反する「く」字状をなす。復元口径は17.2cm、復元胴部最大径は15cmである。調整は内外面とも調整は不明で、焼成は良好である。4と同一個体の可能性もある。6も甕である。胴部下半は残っておらず、「く」字状をなす口縁は外側に大きく外反する。復元口径は19.7cm、復元胴部最大径は17.2cmを測る。調整は内外面とも調整は不明で、焼成は良好である。7は鉢である。底部は平底で、口縁部はわずかに内湾す



第32図 H-2区5号土坑実測図(1/30)



第33図 H-2区6号土坑実測図(1/30)

る。器高は7.9cm、口径は15.3cm、底径は5.3cmを測る。調整は内外面とも調整は不明で、焼成は良好である。8は壺である。胴部から下半は残っておらず、口縁部は上面が平坦な鋤先状をなす。口径は33.6cmを測る。調整は内外面とも不明で、焼成は良好である。

H-2区7号土坑 (第34図)

調査区の北西隅で検出した土坑である。平面形は楕円形をなしており、その規模は長軸の長146

cm、短軸の長さ125cm、深さ20cmを測る。土坑の断面形態は底面が平坦な「コ」字状を呈している。土坑の西側には焼土塊がみられ、竪穴住居跡に伴う炉跡や土器焼成坑とも考えたが、前者には周辺に柱穴が認められないことから、可能性があるとするは後者であろう。この土坑から出土した遺物には甕の破片などがある。



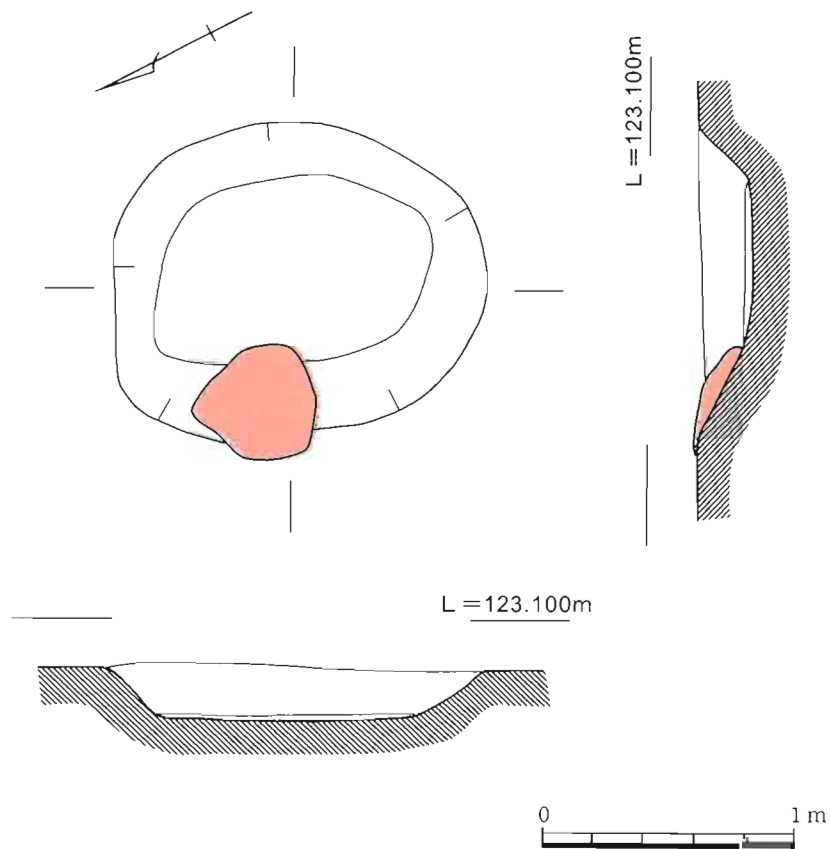
写真12 H-2区6号土坑遺物出土状況

2. 墓 (第4表)

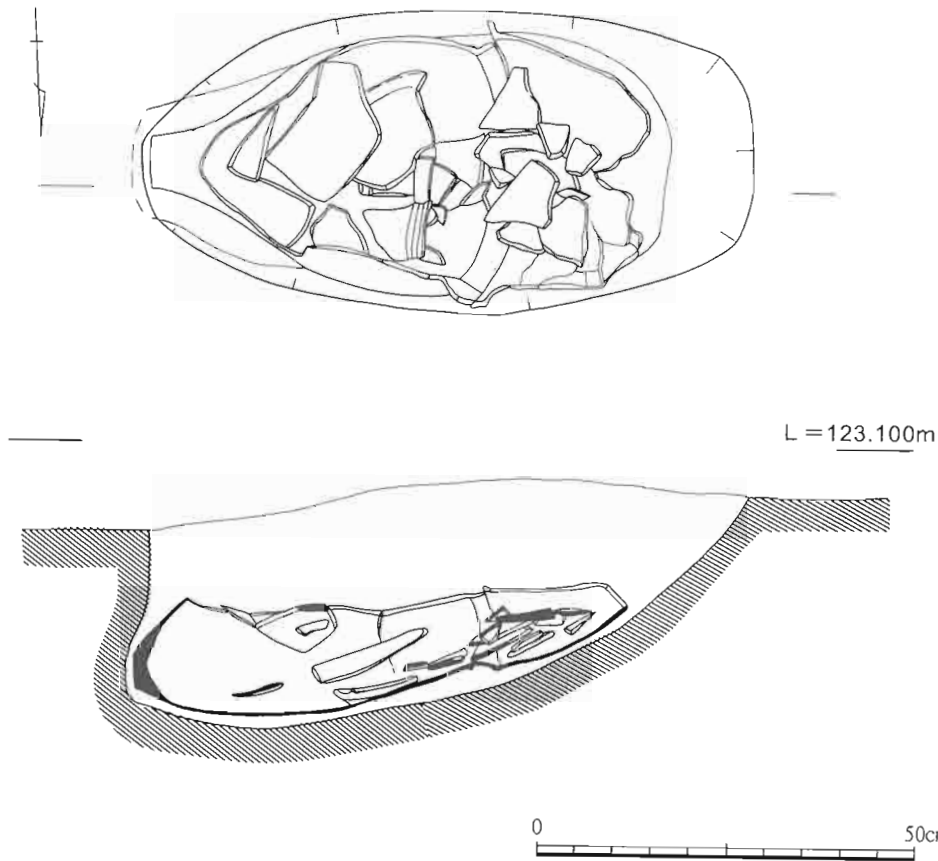
墓は2基が確認され、いずれも小児用甕棺墓で調査区西側に近接してつくられている。

H-2区1号墓 (第35・37図、図版14)

調査区西側で検出した小児用甕棺墓である。上下とも甕を用いる合口甕棺墓である。墓壙の平面形は楕円形をなし、その規模は長軸の長さ80cm、短軸の長さ40cm、深さ28cmを測る。西側の甕が高くなるよう据えられているので、西頭位と考えられる。副葬品は出土していない。



第34図 H-2区7号土坑実測図(1/30)

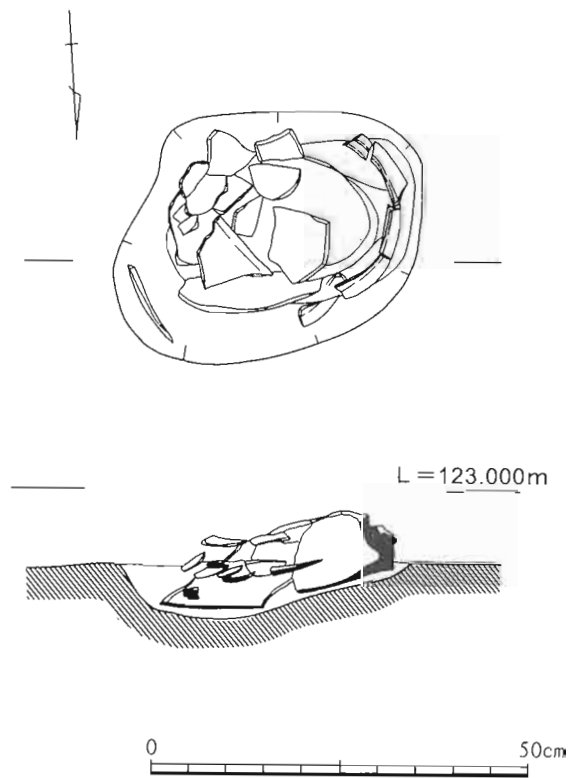


第35図 H-2区1号墓実測図(1/10)

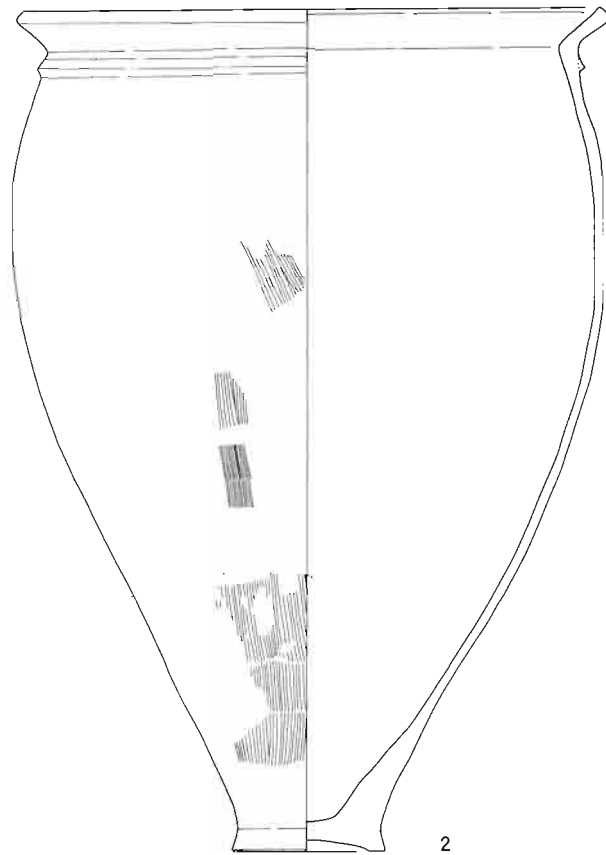
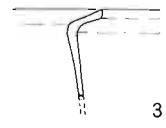
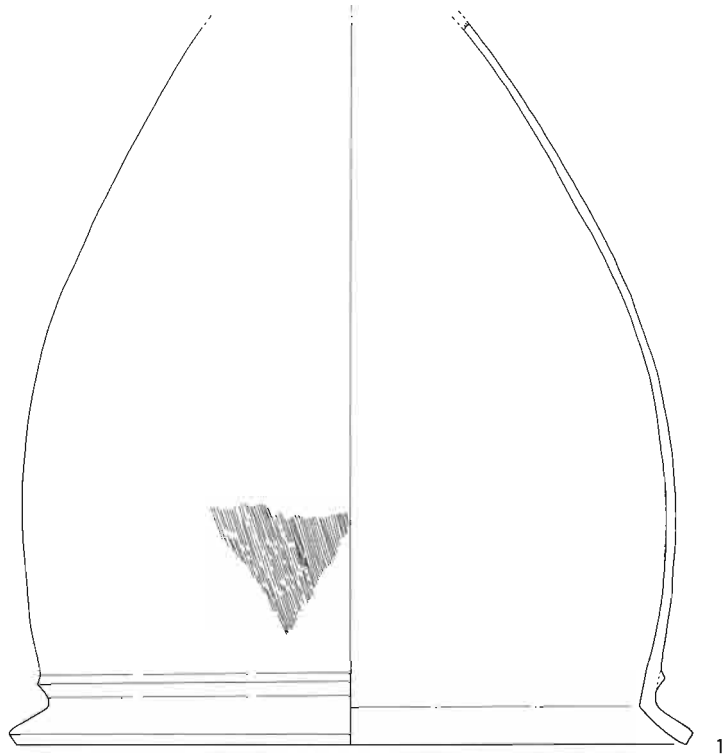
第37図1は上甕に使用された甕である。底部は残っておらず、「く」字状をなす口縁は外反し、口縁下に一条の突帯を有する。口径は36cm、胴部最大径は34.4cmを測る。2は下甕に使用された甕である。底部は上底で、「く」字状をなす口縁は外反する。口縁端部は上方に跳ね上げ、口縁下に一条の突帯を有する。器高は44.1cm、口径は31.2cm、胴部最大径は31cm、底径は8cmを測る。調整は外面がハケ調整。

H-2区2号墓(第36・37図、図版14)

調査区西側で検出した小児用甕棺墓である。上面が削平を受け残りは良くない。合口なのか単体かは不明。墓壙の平面形は不整形で、その規模は長軸の長さ31cm、短軸の長さ31cm、深さ7cmを測る。甕の位置から、西頭位と推定される。副葬品は出土していない。

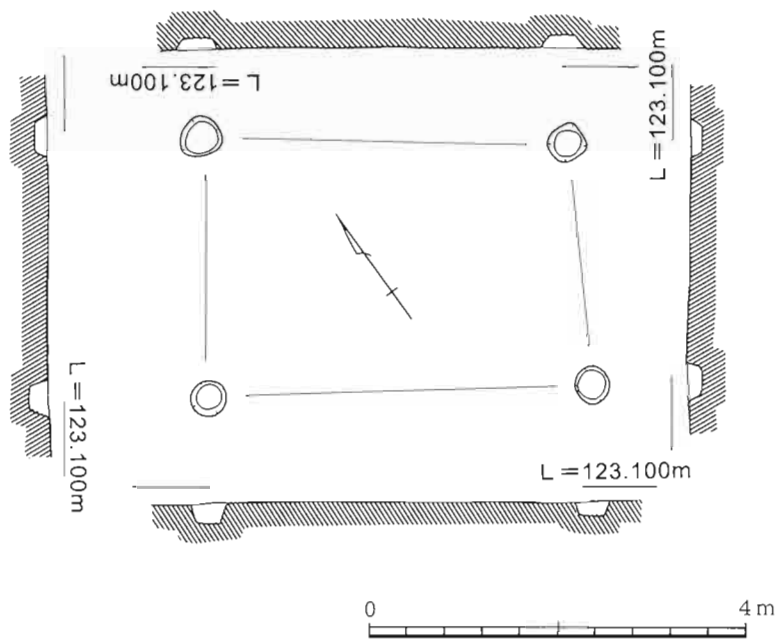


第36図 H-2区2号墓実測図(1/10)



- 1… 1号小児塚棺 (上壙)
- 2… 1号小児塚棺 (下壙)
- 3… 2号小児塚棺

第37图 H-2区1・2号墓土器実測图(1/4)



第38図 H-2区3号掘立柱建物跡実測図(1/80)

2号墓の土器はもろく口縁部のみを示した。第37図の3は甕の口縁部で、「く」字状をなし口縁は外反する。調整は外面がハケ調整。

3. 掘立柱建物跡（第2表）

この時期に該当すると考えられる掘立柱建物は1棟である。

H-2区3号掘立柱建物（第38図）

調査区の中央東よりの位置で検出した掘立柱建物である。その規模は1間×1間で、柱間寸法は心心距離で東西長軸長さ405cm、南北短軸長さ274cmを測る。床面積は10.4㎡である。柱穴からは土器の小片が出土したが時期の決めてとはならず、埋土の状況からこの時期と判断した。

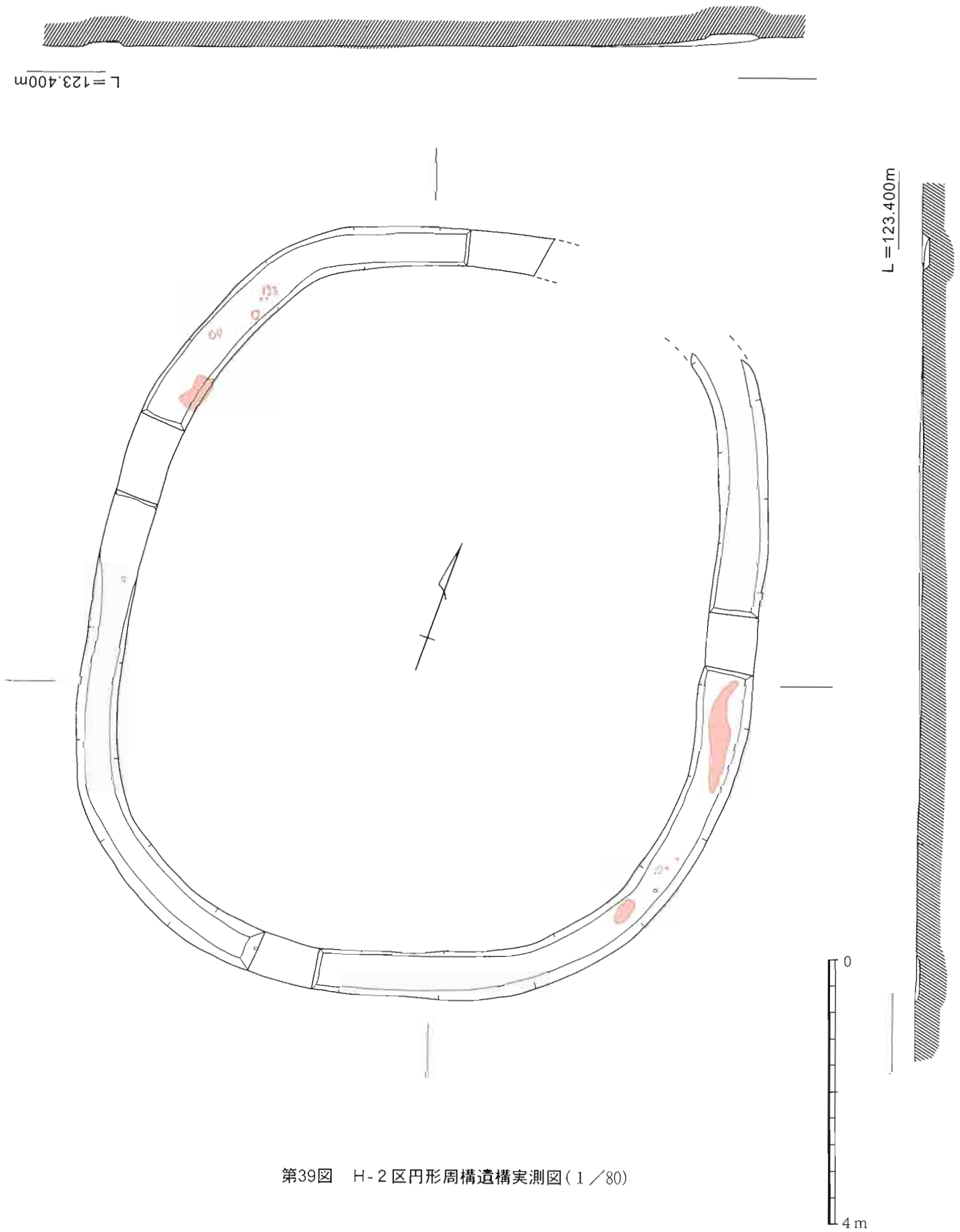
4. 円形周溝遺構（第6表）

H-2区円形周溝遺構（第39図、図版14）

調査区の中央より南西で検出した円形周溝遺構である。北側の溝の一部は削平されている。その平面形態は楕円形をなし、その規模は長軸長11.8m、短軸長10.12mで、溝の幅は80cm、深さ10cmを測る。溝中の2ヶ所に焼土の範囲がみられたほか、土器や小礫が出土している。

出土遺物（第28図）

第28図9は甕の口縁部で、「く」字状に大きく外反する。10も甕の口縁部で、「く」字状に外反する。11は壺の口縁部で、「く」字状に大きく外反する。調整は内外面がハケ調整。12は甕の底部で、平底をなす。復元底径は7.4cmを測る。



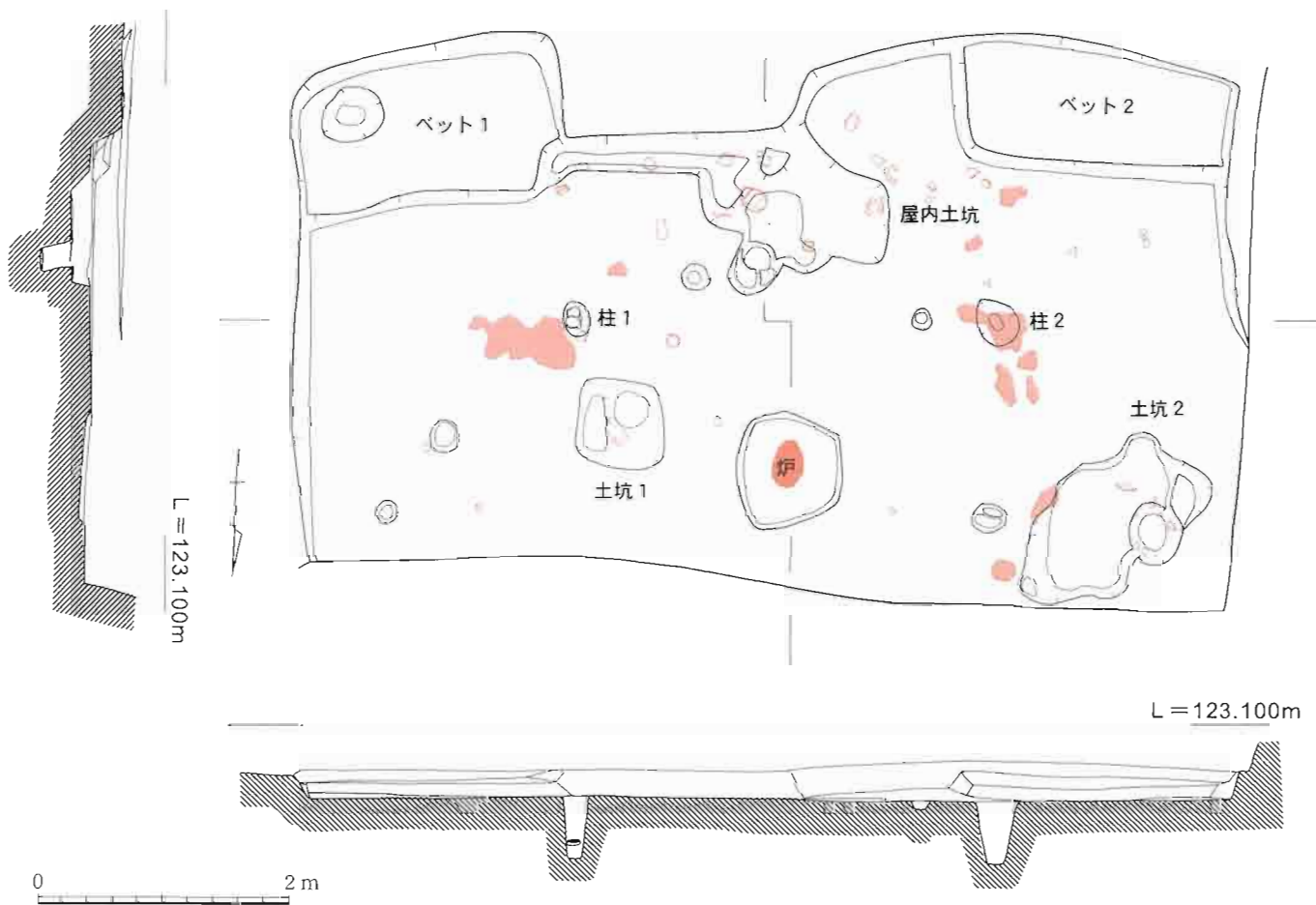
第39図 H-2区円形周構遺構実測図(1/80)

3) 古墳時代前期 (第41図)

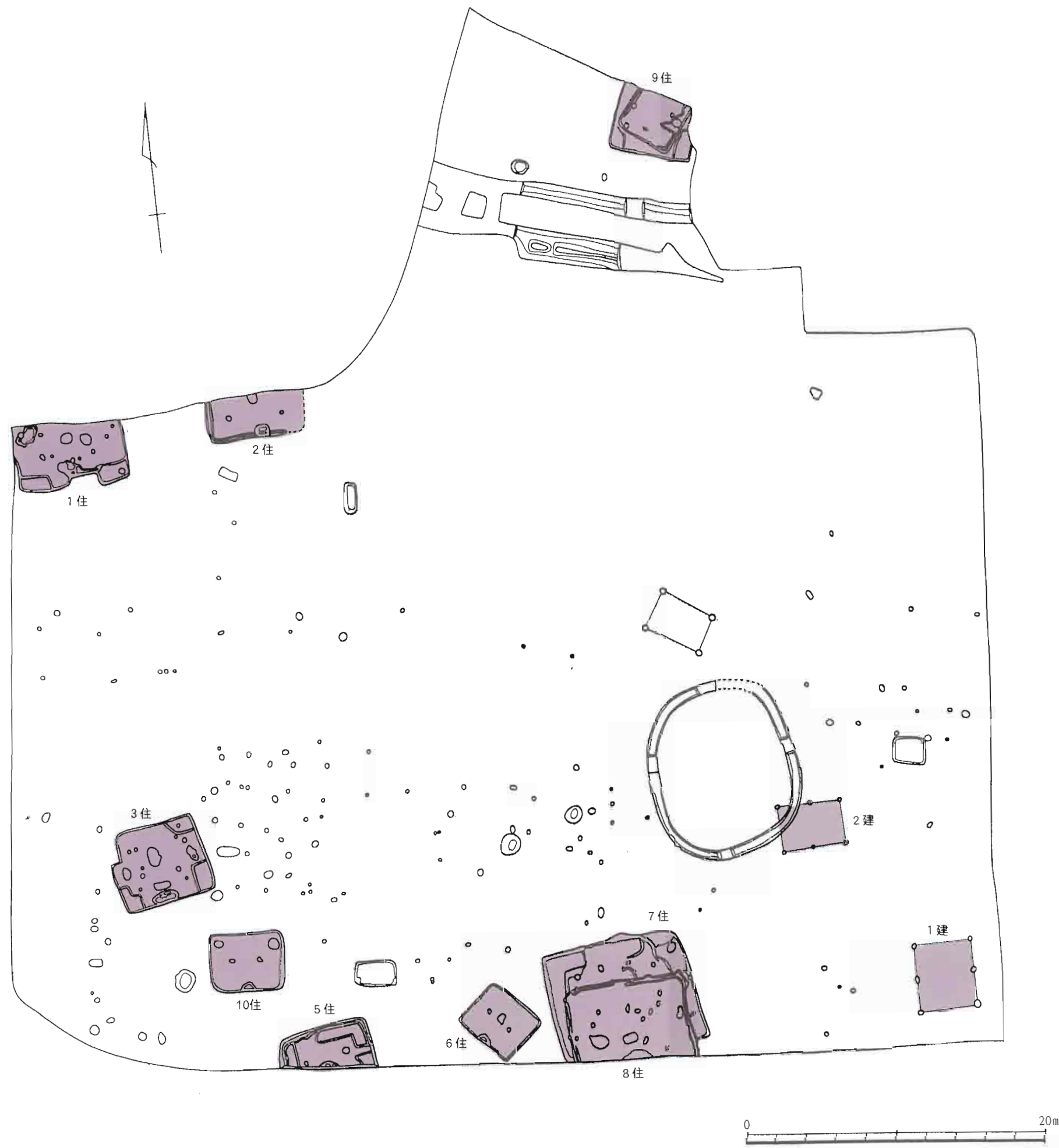
この時期の遺構としては竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡2棟を検出された。これらの遺構は調査区の中央を中心としてその周りを取り囲むかのように調査区の際に分布している。このため、大半の竪穴住居はその半分程度の検出ししかできていない。さらに竪穴住居に限ればいくつかの特徴がある。

まず、H-2区9号A・B竪穴住居のように台地末端ぎりぎりに竪穴住居を建てることが確認されたことである。次に、建て替えを行ったと考えられる竪穴住居の存在が目立ち、このなかには一辺が8m前後もある大型の竪穴住居の建て替えも存在していること。さらに、竪穴住居の方向がある程度統一されていることで、それは数軒を除く大半がほぼ東西方向を基準としているかのような在り方をなしている。また、削平の度合いなどもあるが、5・8・9・10号竪穴住居などのように総じて床面までが深い竪穴住居が散見されることである。このほか、他の調査区ではなかなか確認することが困難であった同一時期の掘立柱建物2棟の存在である。

このように、この調査区だけでみた場合にはこれら竪穴住居などの時期の問題はあるにせよ、西側に存在する環濠群の外側、東側の1号条溝の西に存在する集落の一部として、この時期の小迫辻原遺跡内での集落構造を考える上での数多くの情報を提供しているといえる。



第40図 H-2区1号竪穴住居跡実測図(1/60)



第41図 H-2区遺構配置図③—古墳時代前期—(1/300)

1. 竪穴住居跡（第1表）

この時期に該当すると竪穴住居は12軒ある。このうち建て替えを行っている竪穴住居が3軒あり、その呼び名は調査段階のままの番号としている。このため、調査中に該当しないと判断した4号竪穴住居は欠番のままとし、7号竪穴住居はその後の整理段階において建て替えの竪穴住居と判断したのでA・Bの二つに分けて報告をする。

H-2区1号竪穴住居（第40図、図版15、写真13）

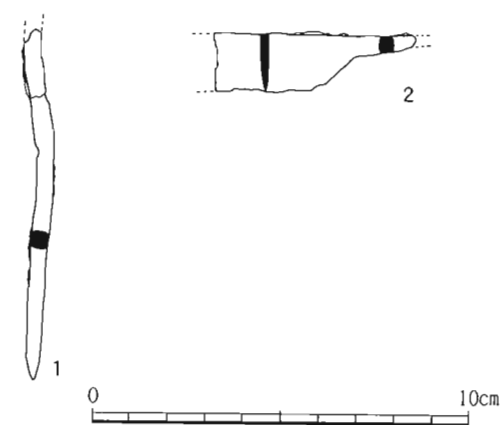
調査区の北西隅で検出した。平面形は方形を基本として2ヶ所のベット状遺構部分が外に張り出す形態をなす。規模は長軸の長さ760cm短軸の長さ440cm以上、深さ約30cm前後を測る。主柱穴は2本が確認され、その位置から4本柱構造と考えられる。南側中央壁際には屋内土坑があり、竪穴住居の中心と思われる位置には炉跡が残る。ベット状遺構は竪穴住居の南側隅に2ヶ所、張り出す形で配置されている。埋土中からは、炉跡以外の主柱穴周辺で焼土や炭の広がりが検出された。遺物は埋土上面に多く見られ、床面直上の遺物は屋内土坑周辺で出土したが量は多くない。

出土遺物（第42～44図、図版21）

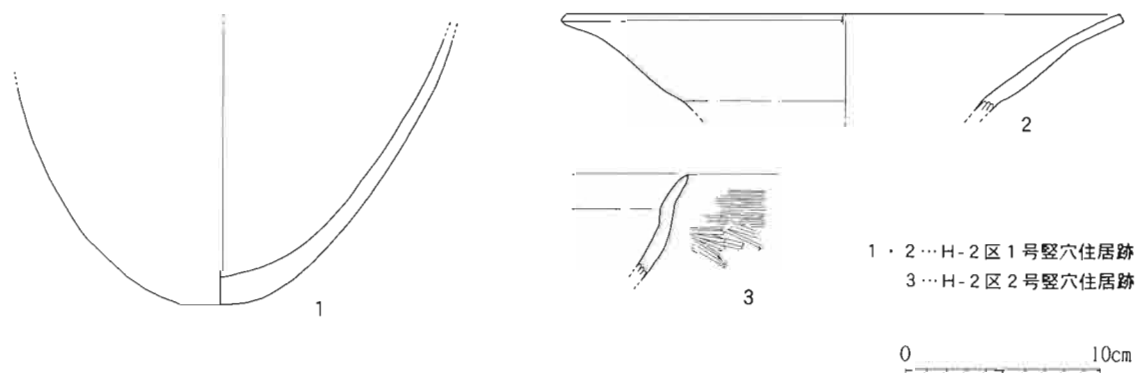
第43図1は壺の底部であろうか。レンズ底をなす。2は高坏の坏部である。下半部と脚部は残っ



写真13 H-2区1号竪穴住居跡遺物出土状況



第42図
H-2区1号竪穴住居跡出土の鉄器実測図(1/2)

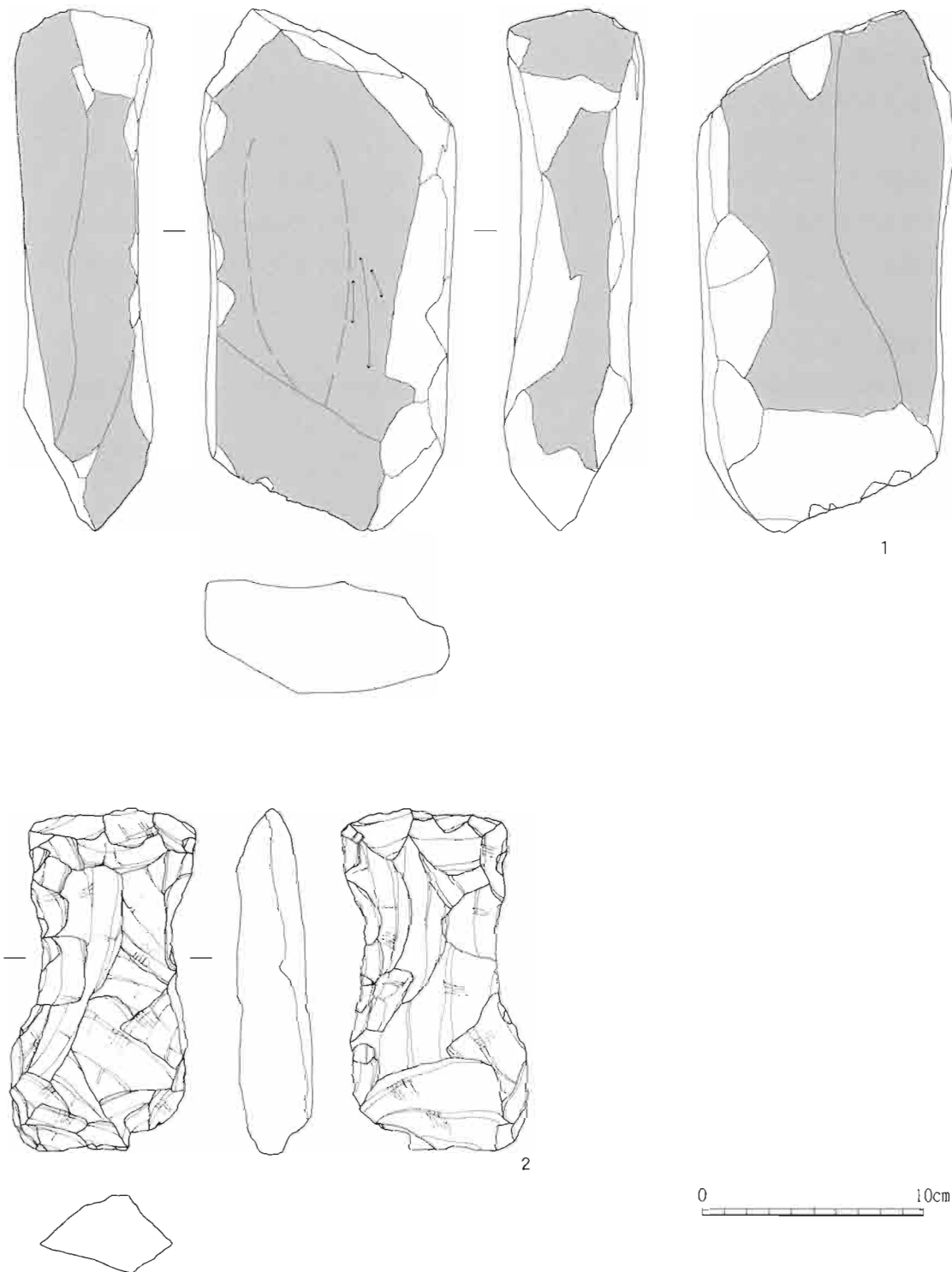


第43図 H-2区1・2号竪穴住居跡出土の土器実測図(1/4)

ておらず、上半部は長く外反する。上半部と下半部の境は不明瞭である。共に床面直上より出土。

第44図1は砥石である。砥面は6面あり、一部にススが付着する。安山岩製で、土坑1出土。2は打製石斧である。分銅形をなす。安山岩製。

第42図1は鉄鏃で、基部のみ残る。2は刀子で、先端および基部を欠損する。



第44図 H-2区1号竪穴住居跡出土の石器実測図(1/3)

H-2区2号竪穴住居（第45図、図版15）

調査区北西の1号竪穴住居東側でその半分を検出した。竪穴住居の東側約1/3は削平により残っていない。平面形は主柱穴の位置などから方形と考えられ、規模は推定で長軸の長さ520cm以上、短軸の長さ300cm以上、深さ10cm前後を測る。主柱穴は2本確認され、その位置から4本柱構造と考えられる。南側壁の一部と西側壁には壁周溝が巡り、南側中央壁には屋内土坑がある。また竪穴住居の中心と思われる位置には炉跡が残る。遺物は少なく、図示したもののほか外面にタタキ痕を残す土器片などが出土している。

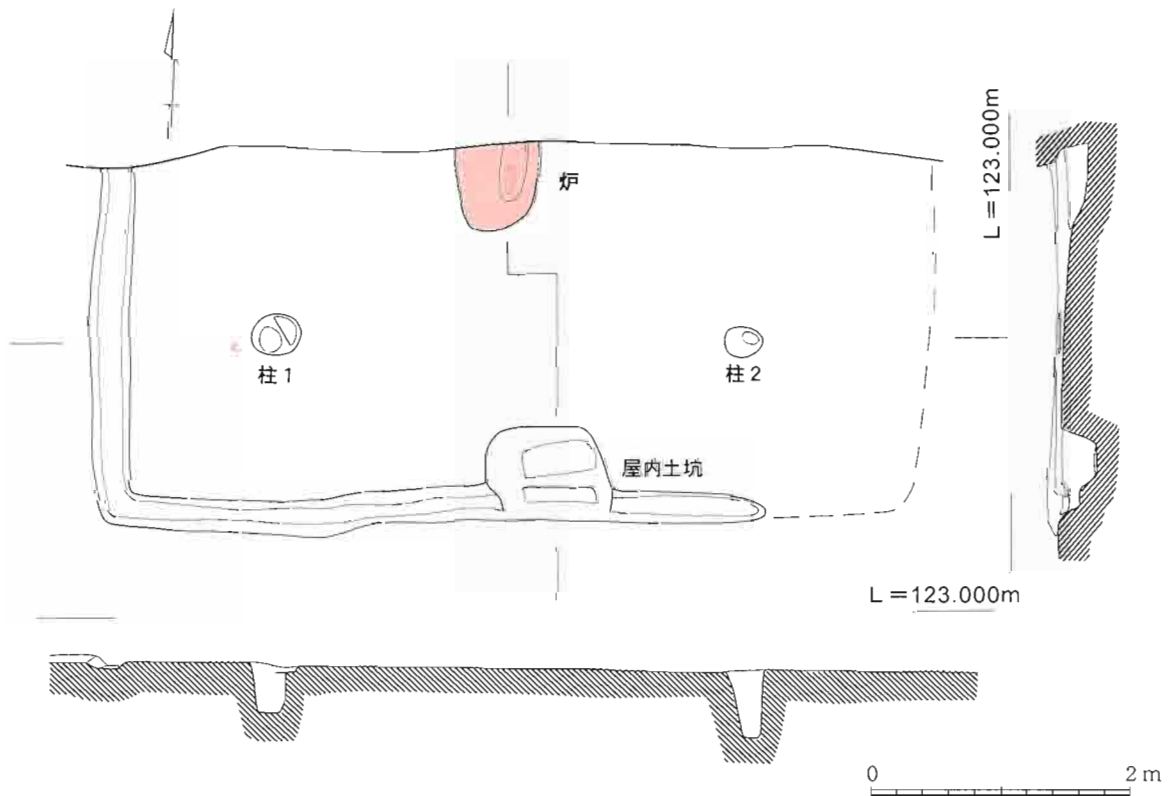
出土遺物（第43図）

第43図3は鉢である。口縁部は短く外反し、胴部外面にヘラ磨きを施す。

H-2区3号A竪穴住居（第46図、図版15、写真13）

H-2区3号竪穴住居については、調査段階では1軒の竪穴住居と考えながら掘り下げを行ったところ、3号A竪穴住居の貼り床の下からこの竪穴住居が切るもう一つの竪穴住居の主柱穴や炉跡、屋内土坑などが確認された。このことから、新しい竪穴住居を3号A、古い竪穴住居を3号Bと呼ぶこととした。

H-2区3号A竪穴住居は調査区の南西側で検出した。東北隅の壁面は削平により長方形に残っていないが、全体の様子からベット状遺構であると判断した。このため平面形は方形をなすと考えられる。規模は長軸の長さ540cm、短軸の長さ530cm以上、深さ約10～30cmを測る。主柱穴は4

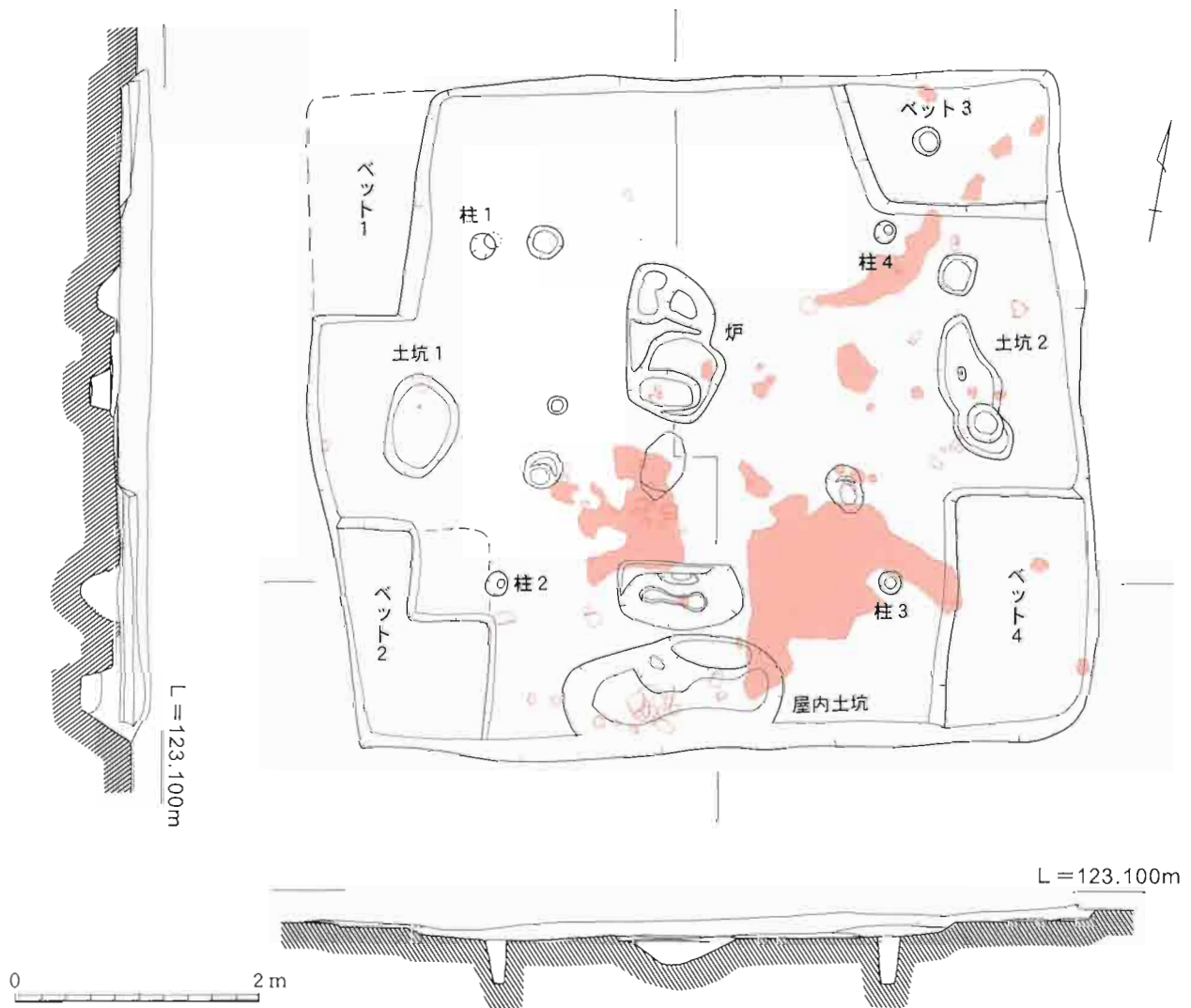


第45図 H-2区2号竪穴住居跡実測図(1/60)

本柱構造で、南側中央壁際には屋内土坑、中央には炉跡が残る。ベット状遺構は竪穴住居の四隅に付設されている。また、ベット状遺構1・2および3・4の間にはそれぞれ伴うと考えられる土坑がある。このほか埋土中に焼土や炭が広範囲にわたって確認され、焼失住居の可能性が考えられる。遺物は埋土上面から土器片が多く出土しており、床面直上の遺物は屋内土坑やその周辺にまとまってみられる。

出土遺物（第48～50図、図版19・21）

第48図1は甕の底部である。レンズ底をなし、外面がタタキ後ハケ、内面はハケ調整。2～5は高坏である。2は坏部の一部が残る。上半部と下半部の境が明瞭である。3も坏部の一部が残る。上半部と下半部の境は明瞭で、上半部は短く外反する。復元口径27cmを測る。ベット状遺構2の直上出土。4も坏部の一部が残る。上半部と下半部の境は明瞭である。復元口径33cmを測る。4に比べ上半部は長く外反する。5は脚部である。縦に2ヶ所の穿孔がある。底径11.5cmを測る。6は鉢で底を欠く。胴部は丸みを帯び、口縁部は短く直立する。復元口径10.4cm、復元での胴部最大径は11.7cmを測る。7・8とも複合口縁壺であろうか。7はやや開き気味の口縁外面に櫛描波状文が施されている。8は内湾する口縁外面に沈線1本に波状文が施されている。屋内土坑出土。9・11・12・13



第46図 3号A竪穴住居跡実測図(1/60)

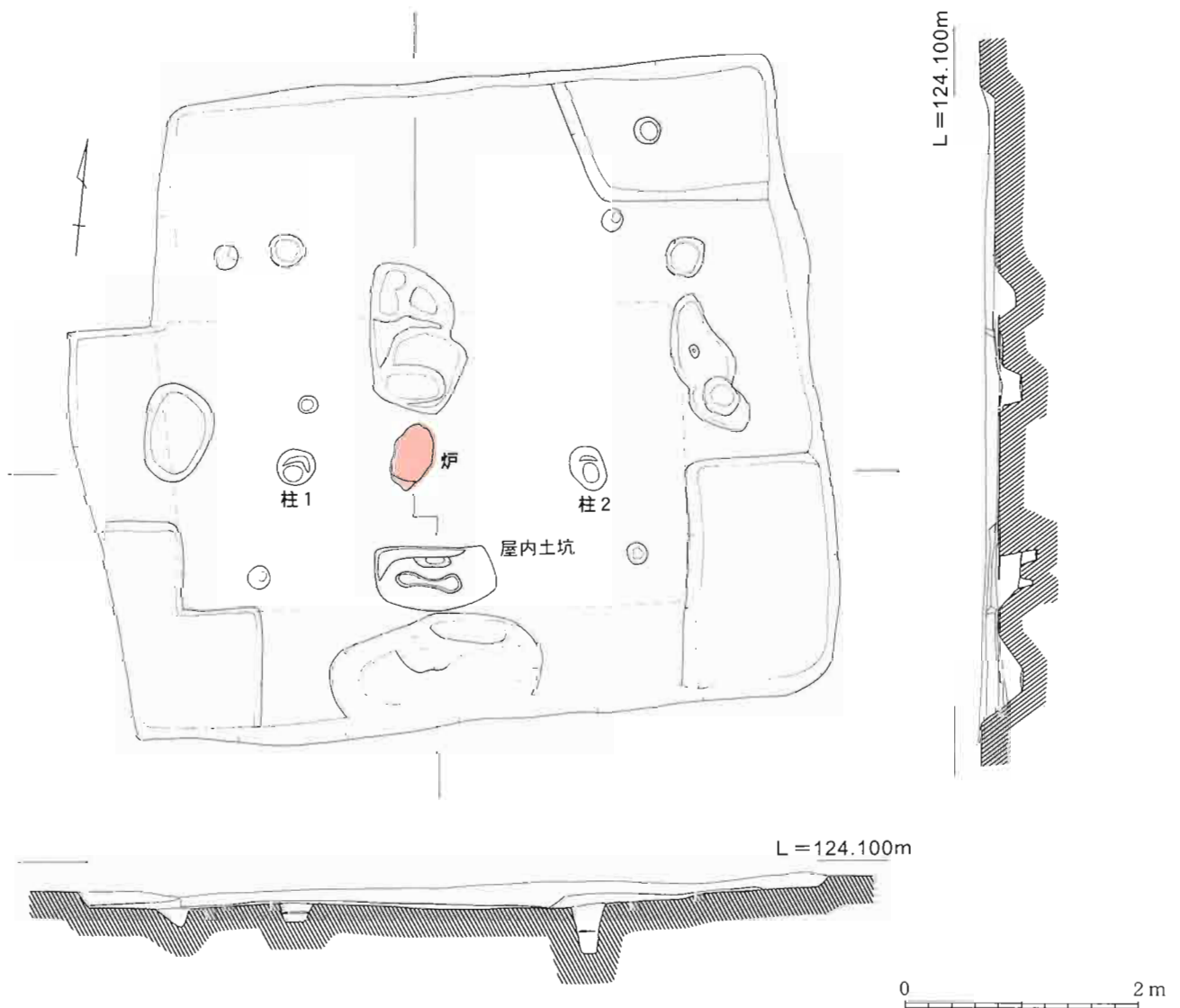
は手捏ね土器である。9は上部につまみが付く蓋状を呈する。11は小型の碗である。12は壺を模した手捏ね土器で、頸部下に刻み目を施した突帯を巡らせる。13は鉢であろうか。口縁部が内湾する。10は小型の杓子である。手捏ね風の雑な作りである。

第49図1・2はともに砥石である。1は欠損が著しく、1面の砥面のみ残る。2は4面の砥面を有する。2は床面直上出土。1・2とも砂岩製

第50図2は鉄鎌である。刃部は外湾気味で、基部は短く折り返している。表面にはサビとススが付着し、一部欠損する。

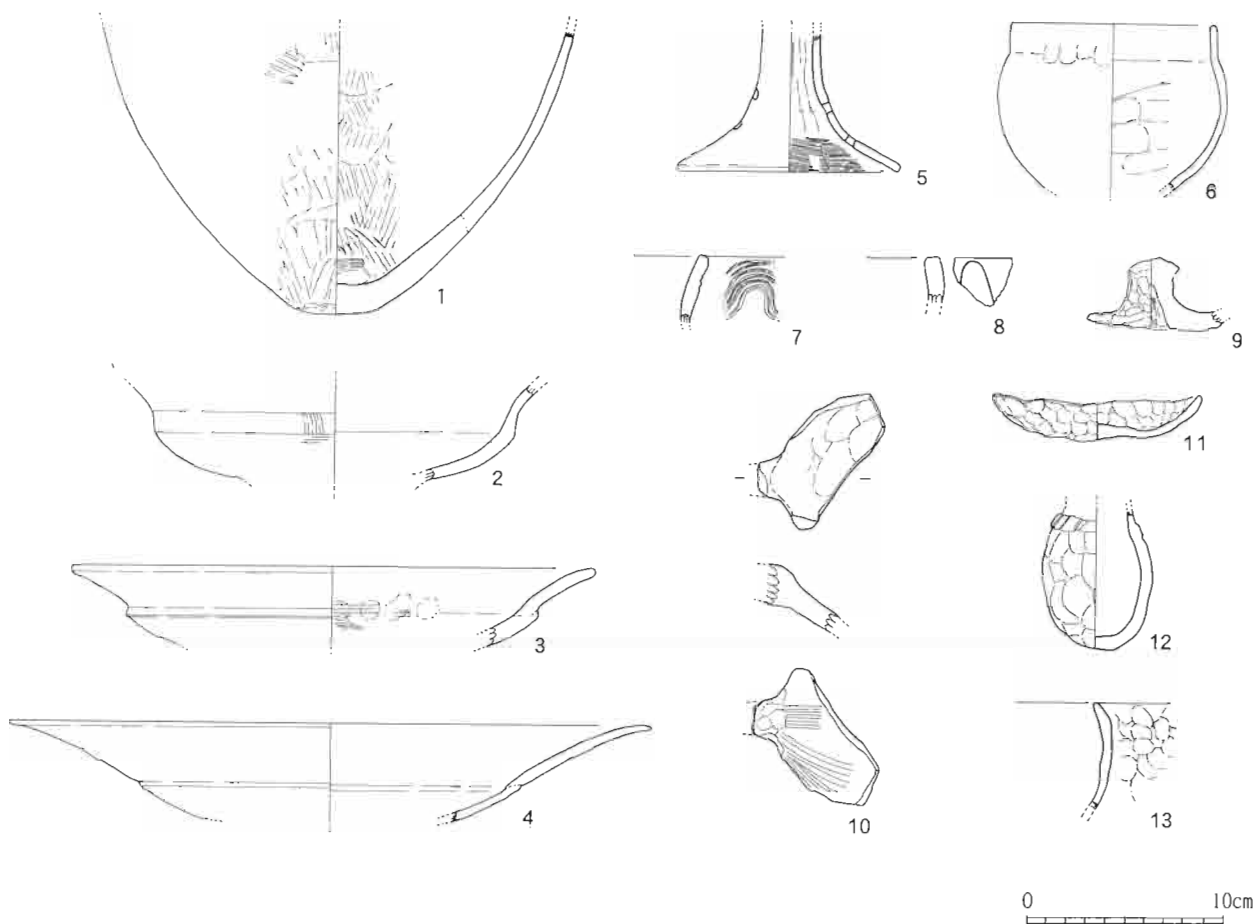
H-2区3号B 竪穴住居（第47図、図版15）

3号A竪穴住居に切られる竪穴住居で壁面は残っていない。この竪穴住居に伴うとされる支柱穴が2本確認され、その間に炉跡、さらには炉跡の南側に屋内土坑が検出された。この竪穴住居のプランについては、3号A竪穴住居に付設されたベット状遺構4ヶ所はいずれも削りだしによるもので、そのうちベット状遺構2の一部が盛り土によるものであった。このことから、この場所が3号B竪

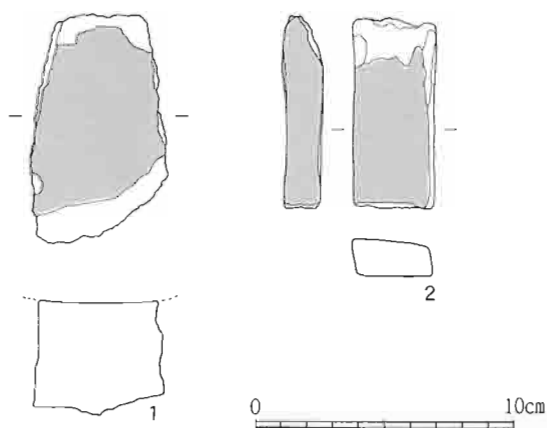


第47図 H-2区3号B 竪穴住居跡実測図(1/60)

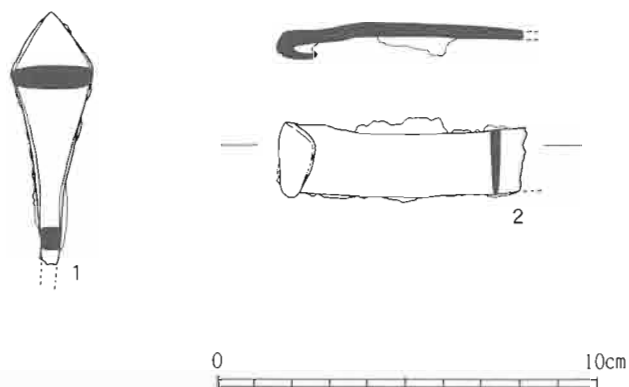
穴住居の南西隅のコーナーにあたると考えられ、主柱穴や炉跡、屋内土坑の位置関係を考慮すると、第47図のような平面形が長方形をなす、2本柱構造の竪穴住居であったと推定される。その規模は推定で長軸の長さ450cm、短軸の長さ260cmを測る。遺物は柱穴や炉跡などほとんどなく、図示した鉄鏃が屋内土坑の上場に張り付くように出土した。



第48図 H-2区3号A竪穴住居跡出土の土器実測図(1/4)



第49図 H-2区3号A竪穴住居跡出土の石器(1/3)



第50図 H-2区3号竪穴住居跡出土の鉄器(1/2)

出土遺物 (第50図、図版21)

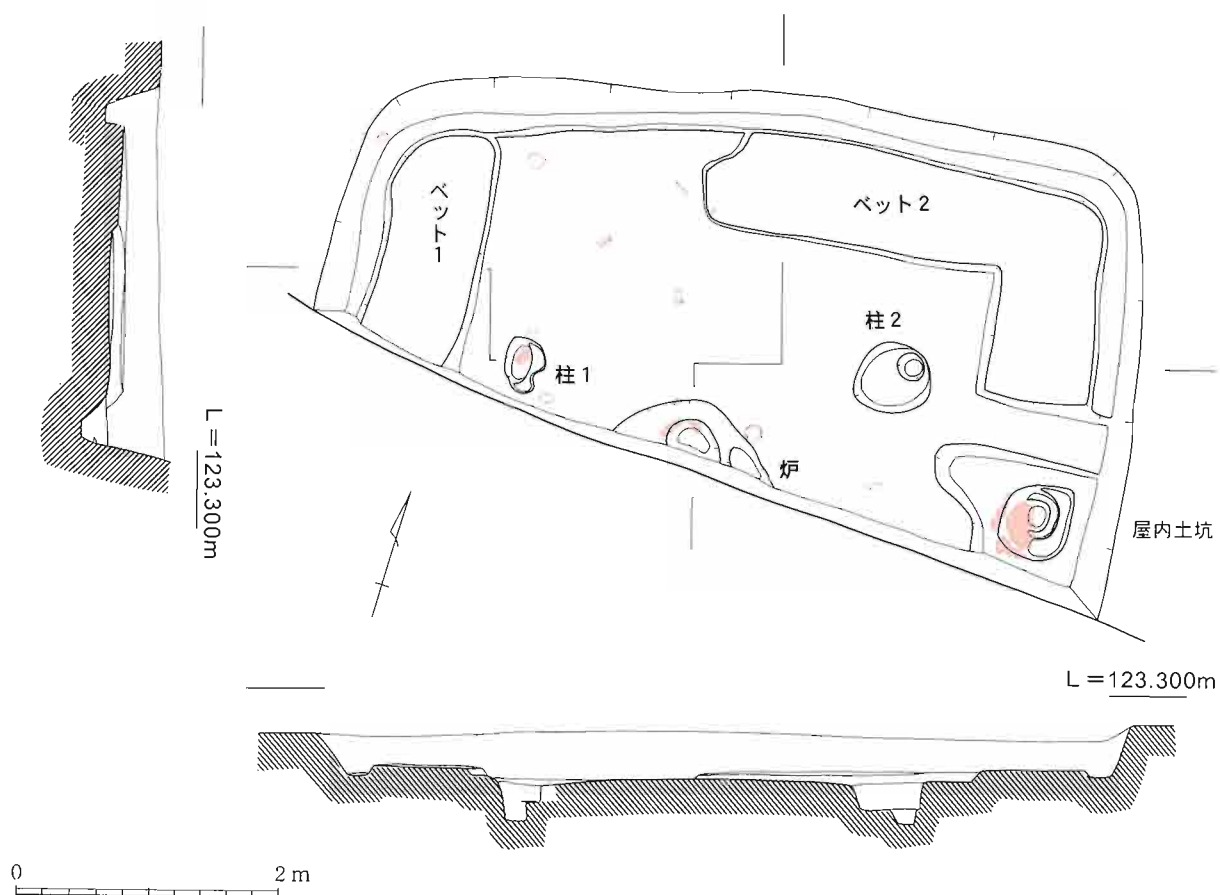
第50図1は鉄鏃である。柳葉形をなし、基部は欠損する。

H-2区5号竪穴住居 (第51図、図版15、写真14)

調査区南側でその半分を検出した。平面形は主柱穴の位置から方形と考えられる。規模は推定で長軸の長さ620cm、短軸の長さ340cm以上、深さ約30～60cmを測る。主柱穴は2本が確認され、その位置から4本柱構造と考えられる。竪穴住居の中心と思われる位置には炉跡、東側中央壁際には屋内土坑が残る。屋内土坑はピットを有する二段掘りの不定形な土坑で、ピットの上面には焼土や炭がみられた。ベット状遺構は西側と北東隅の2ヶ所に付設され、北東隅のベット状遺構は「L」字状をなす。また壁面周辺には壁周溝を巡らせている。遺物は埋土中から土器片が出土したが、床面直上や床面から数cm上からの遺物が多い。

出土遺物 (第52～54図、図版21)

第52図1は甕である。胴部は丸みをもつ。搬入品。2は壺の底部であろうか。レンズ状をなす。3は甑である。尖り気味の底部に、1穴の穿孔がある。4は壺である。「く」字状を呈し、口縁部は直線的に外反する。頸部に刻目を施した三角突帯を巡らせる。口径16cmを測る。5は高坏である。坏部上半部は長く外反し、下半部との境は僅かな段を有する。6は台付鉢である。口縁部が短く外反し、胴部は丸みをもつ。復元口径12.4cmを測る。7は台付鉢であろうか。底径12.4cmを測る。8は複合口縁壺であろうか。口縁部外面には「V」字状の沈線と4本と推定される横方向の沈線が施



第51図 H-2区5号竪穴住居跡実測図(1/60)

文されている。復元口径24.4cmを測る。9は鼓形器台である。筒部は残存せず、受部はほぼ直線的に長く発達し、端部は開かずのびる。脚部も同様の形態を呈すが、端部は外反する。受部下端および脚部上端に低い三角突帯を巡らせる。復元口径19.6cm、復元底径19.4cmを測る。1・5～7・9は床面直上出土。

第53図1はヤリガンナである。両端は欠損している。

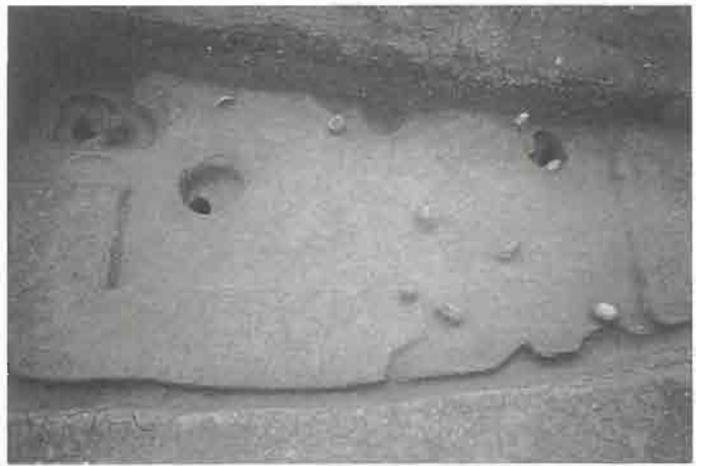
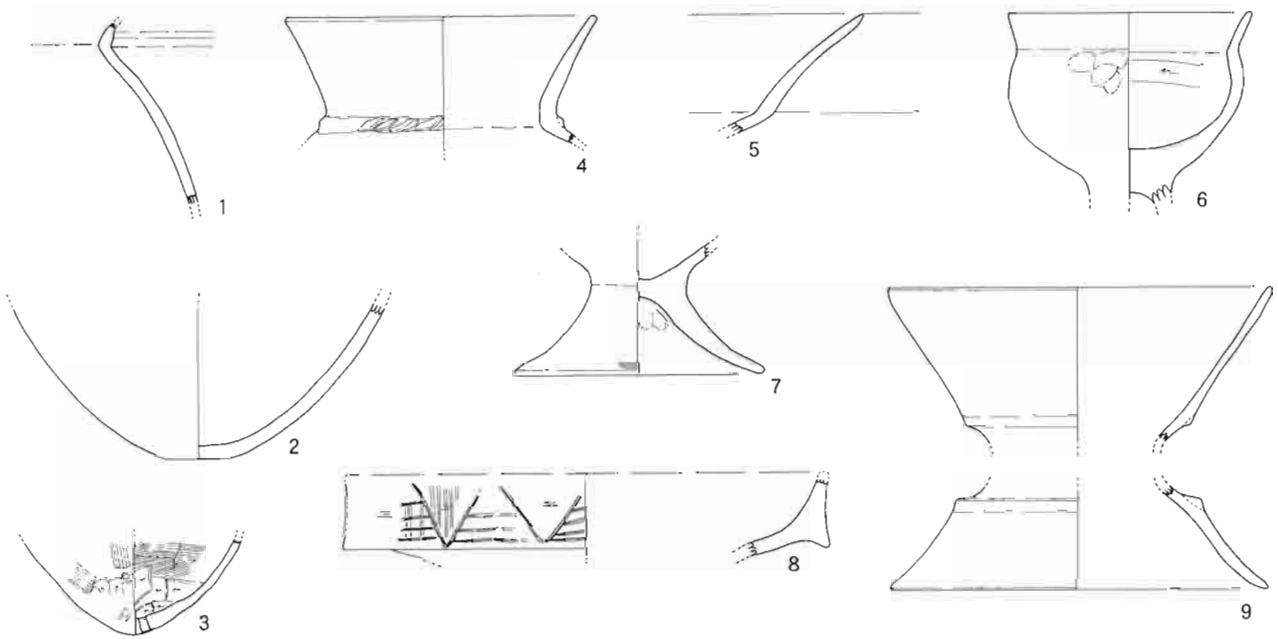
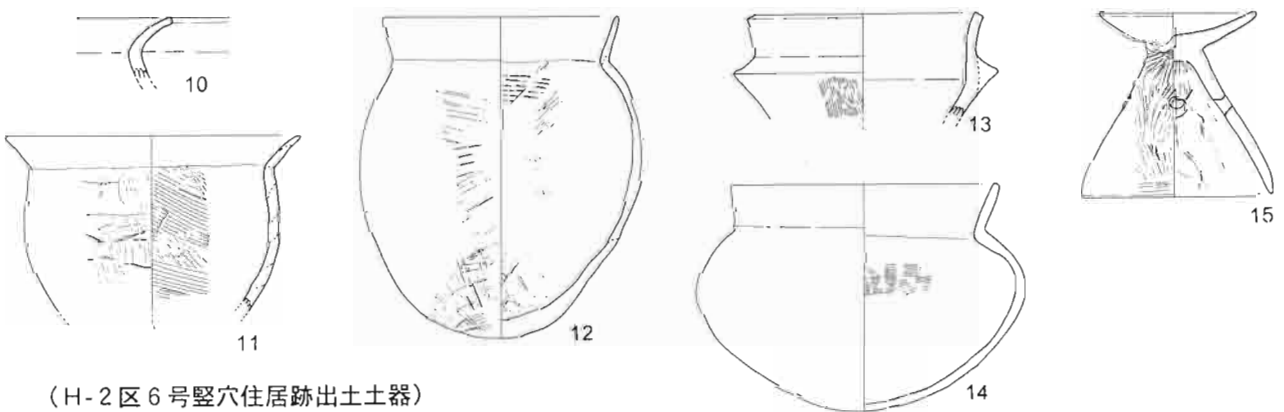


写真14 H-2区5号竪穴住居跡遺物出土状況



(H-2区5号竪穴住居跡出土土器)



(H-2区6号竪穴住居跡出土土器)



第52図 H-2区5・6号竪穴住居跡出土の土器実測図(1/4)

第54図1は小玉である。ガラス製で、色はコバルトブルーである。屋内土坑出土。

H-2区6号竪穴住居（第55図、図版15）

調査区南側で検出した。7・8号竪穴住居に近接して位置している。平面形は長方形をなす。その規模は長軸の長さ438cm、短軸の長さ372cm、深さ約5cm前後を測る。主柱穴が2本の2本柱構造である。南西側中央壁には屋内土坑、竪穴住居の中心には焼土塊が残る炉跡がある。遺物は屋内土坑や炉跡周辺から出土している。

出土遺物（第52図、図版21）

第52図10～12は甕である。11は口縁部は外半し、内面にハケを施す。口径15.2cm、胴部最大径13cmを測る。12は丸底気味の底部で、口縁部は内湾気味に直立する。外面に粗いタタキが残る。器高16.4cm、口径11.9cm、胴部最大径14.4cmを測る。13は二重口縁壺で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部との境は突起する。復元口径12.2cmを測る。14は鉢である。胴部は丸みをおび、口縁部は直立気味に外反する。器高11.5cm、口径13.7cm、胴部最大径16.9cmを測る。搬入品。15は小型器台である。受部は浅く、脚部には4ヶ所の穿孔がある。器高9.3cm、口径7.9cm、底径9.5cmを測る。10・12・15は床面直上、11は柱2出土。



第53図 H-2区5号竪穴住居跡出土の鉄器実測図(1/2)

H-2区7号A竪穴住居（第56・57図、図版15）

7号住については調査段階では1軒と考えたが、整理段階で再検討した結果、主柱穴の位置や壁周溝の存在から重複する2軒と判断した。新しい住居を7号A、古い住居を7号Bと呼ぶ。8号住とも切り合い関係にあり、その変遷は第62図に示すとおりである。

調査区の南側で検出した。主柱穴の位置から平面形は方形をなすと考えられる。その規模は推定で長軸の長さ800cm、短軸の長さ740cm、深さ約15cm前後を測る。主柱穴は4本柱構造で、第57図に示す柱1～4と考えたが、柱3については他の主柱穴と同様の深さからこれと判断した。南側中央壁と思われる位置には屋内土坑がある。炉跡は残っていなかった。ベット状遺構は西側に「L」字状に付設されている。また北東隅にもその一部が残る。壁面やベット状遺構の周囲には壁周壁が巡っている。遺物は土器片がほとんどで、図示した土器程度しかない。

出土遺物（第60図、図版19・21）

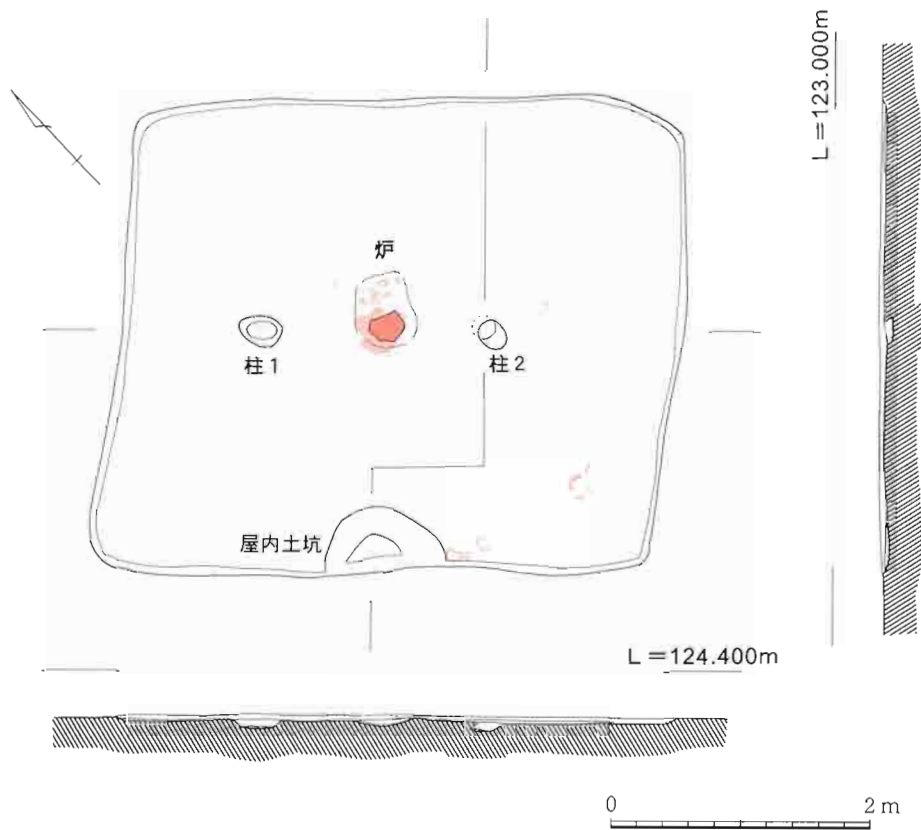
第60図6は小型の鉢である。底は尖り気味で、口縁端部は直立気味に立ち上がる。口径6cmを測る。床面直上からの出土。



第54図 H-2区5号竪穴住居跡出土の玉実測図(1/1)

H-2区7号B竪穴住居（第56、58図、図版15）

7号A竪穴住居に切られているため、東側の一部しか残っていない。平面形は方形もしくは長方形と考えられる。その規模は長軸の長さ750cm、短軸の長さ680cmを測ると推定される。主柱穴は



第55図 H-2区6号竪穴住居跡実測図(1/60)

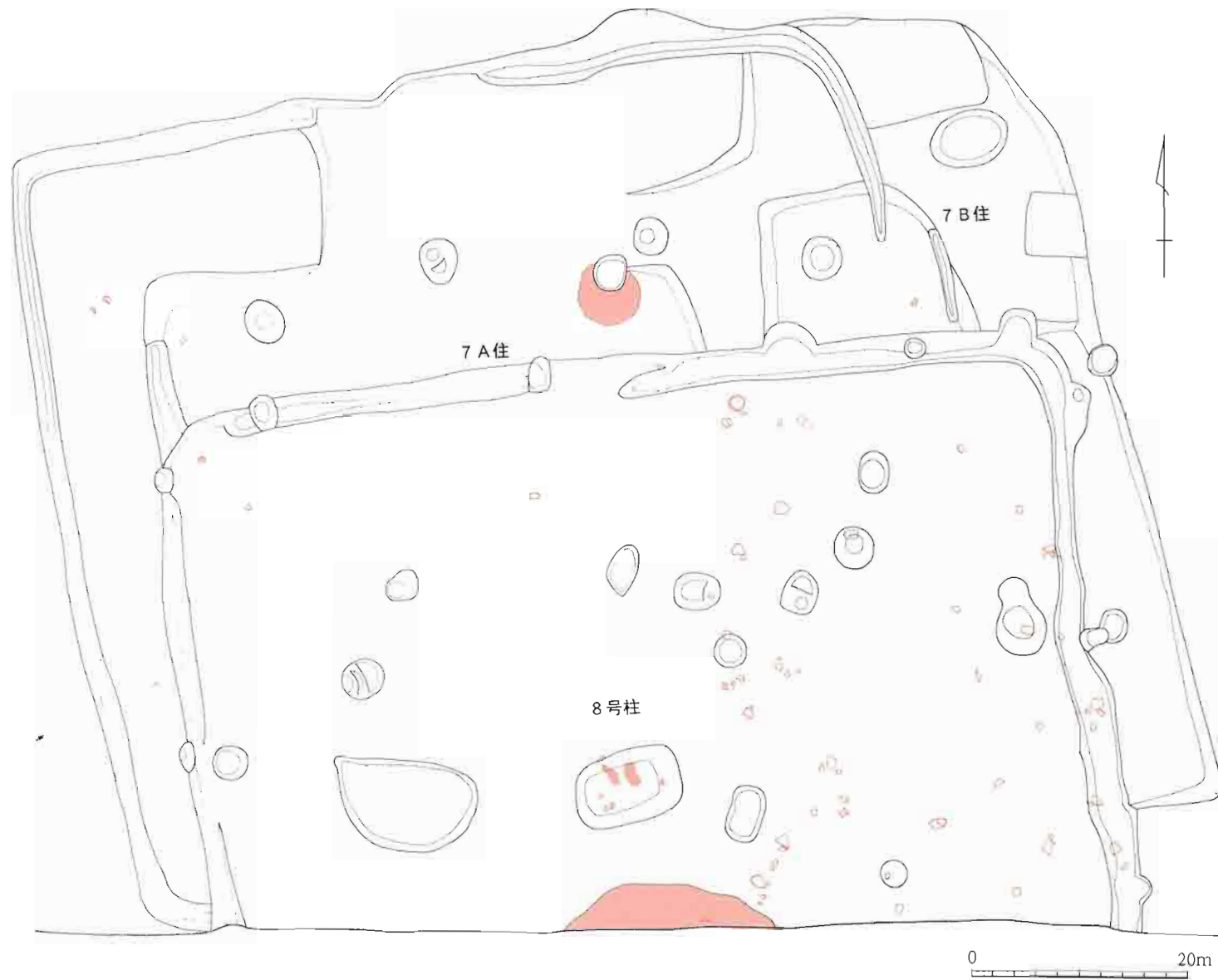
はつきりせず、深さと埋土の状況から図に示す柱1・2とする2本柱構造と考えた。また柱1は焼土塊を切って掘られており、その周辺には落ち込みがあることから古い時期の遺構が存在する可能性がある。炉跡や屋内土坑は検出されていない。ベット状遺構は東北隅にわずかに残っており、その下には壁周溝の一部が残存していた。遺物の出土はほとんどなく、小破片のみである。

H-2区8号竪穴住居(第56・59図、図版15)

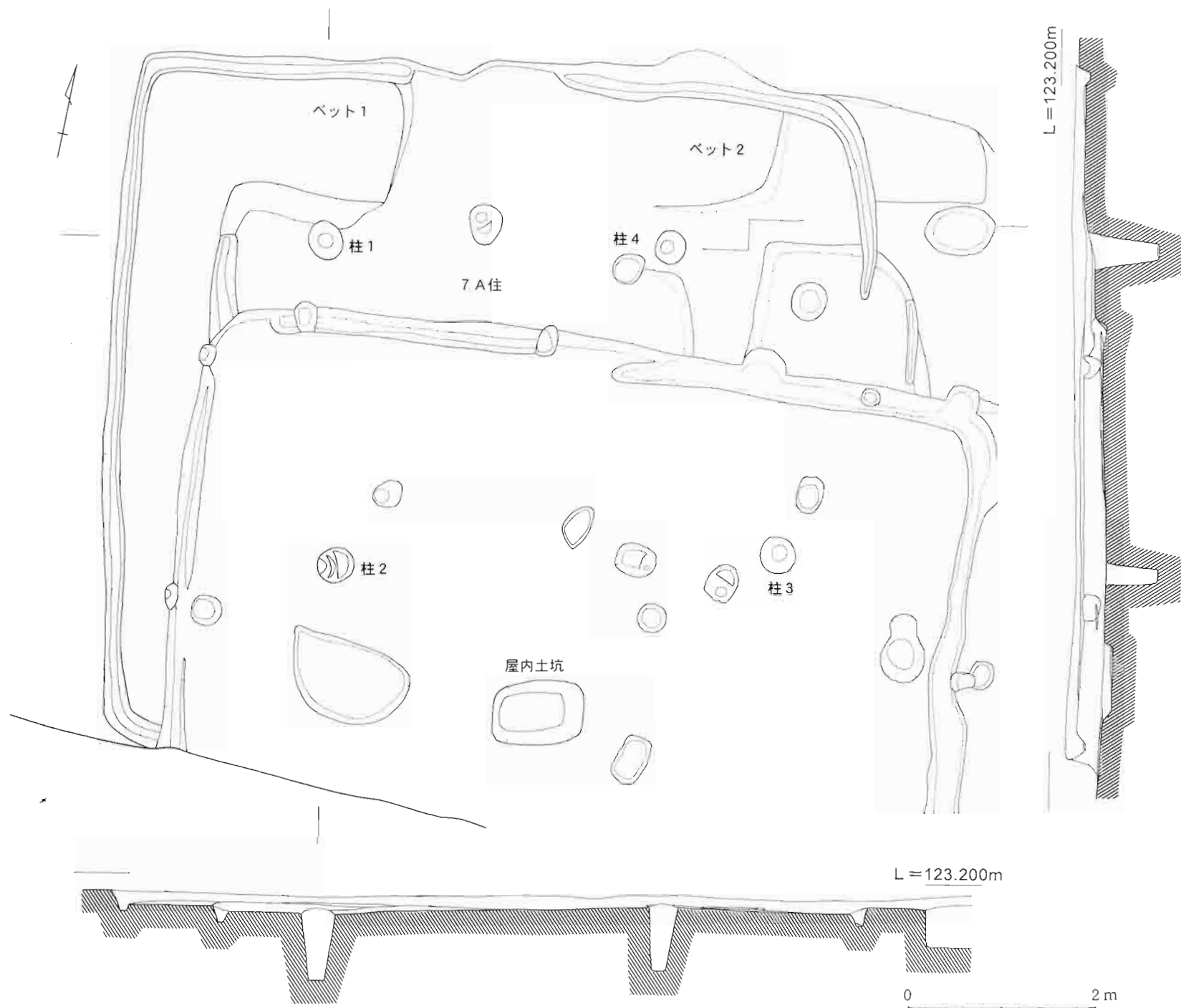
調査区南側でその半分を検出した。平面形は主柱穴の位置から方形と考えられる。規模は推定で長軸の長さ840cm前後、短軸の長さ560cm以上、深さ約30cmを前後を測る大型の竪穴住居である。主柱穴は2本が確認され、その位置から4本柱構造と考えられる。竪穴住居の中心と思われる位置には炭や焼土の範囲が見られ炉跡と考えられる。ベット状遺構は検出できなかった。周囲には壁周溝が巡る。また、その壁周溝や壁面下部には9つの補助柱である小ピットが検出された。この補助柱は北側壁の状況からすると、四周する壁下にそれぞれ2～2.5mほどの間隔をもって4本ずつの小ピットが配置されていると考えられる。大半の補助柱は下場が竪穴住居の外側になるよう斜めに掘られている。遺物は埋土上面の黒色土(腐食土)から多量の土器片が出土したが、竪穴住居廃棄後の遺物で、床面近くから出土した遺物は数少ない。

出土遺物(第60・61図、図版21)

第60図1は甕である。口縁部は内湾気味に外反する。胴部下半は欠損。口径25.6cmを測る。2は壺である。頸部は細く、口縁部は長く外反しながらのびそうである。大型の壺である。3は伝統



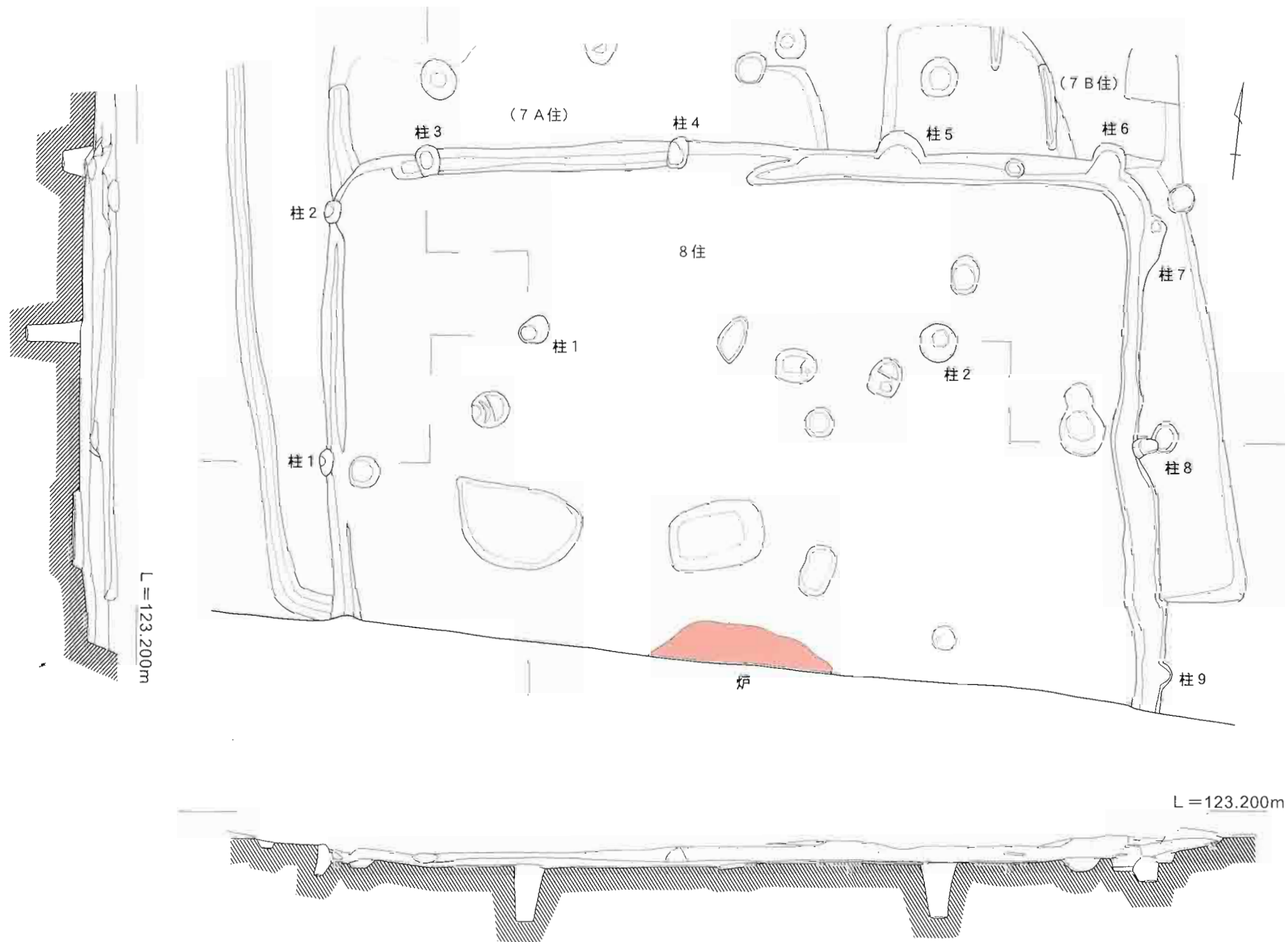
第56図 7号A・7号B・8号竪穴住居跡実測図(1/60)



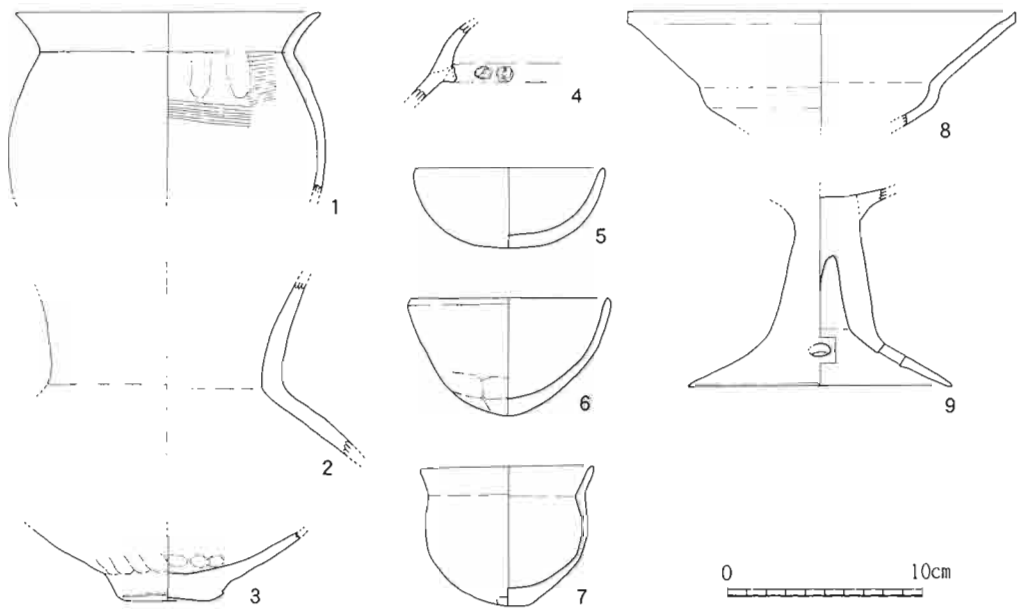
第57図 H-2区7号A竪穴住居跡実測図(1/60)



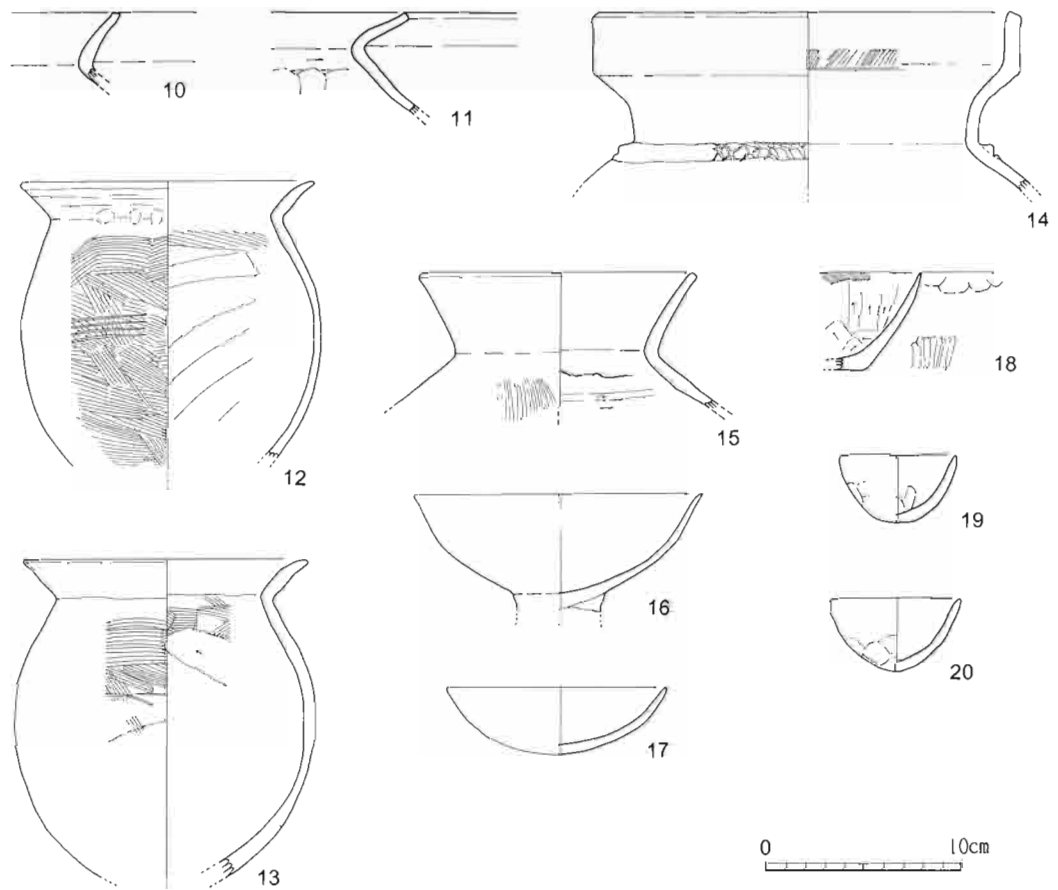
第58図 H-2区7号B竪穴住居跡実測図(1/60)



第59图 H-2区8号竖穴住居跡実測图(1/60)

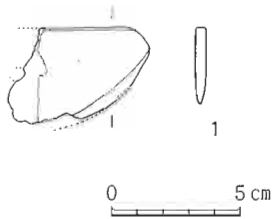


(7・8号竖穴住居跡出土土器)



(9号竖穴住居跡出土土器)

第60図 7～9号竖穴住居跡出土の土器実測図(1/4)



第61図 H-2区8号竪穴住居跡
出土の石器実測図(1/3)

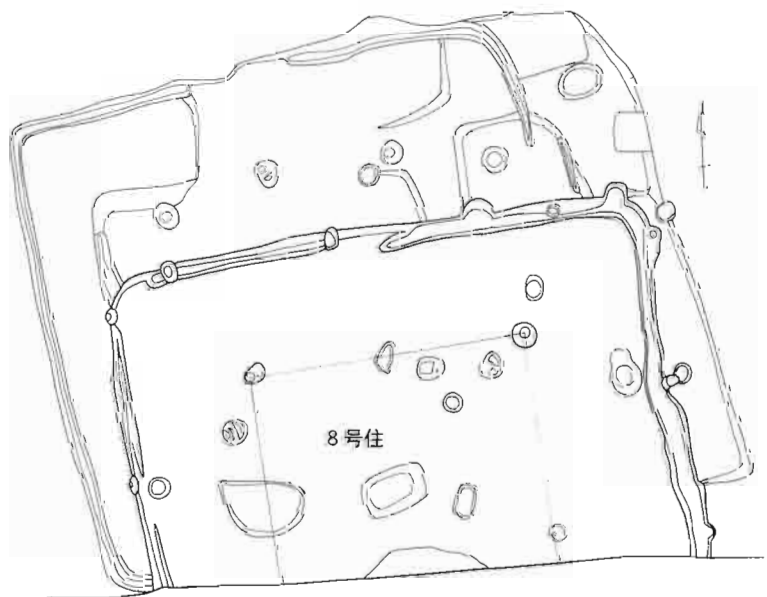
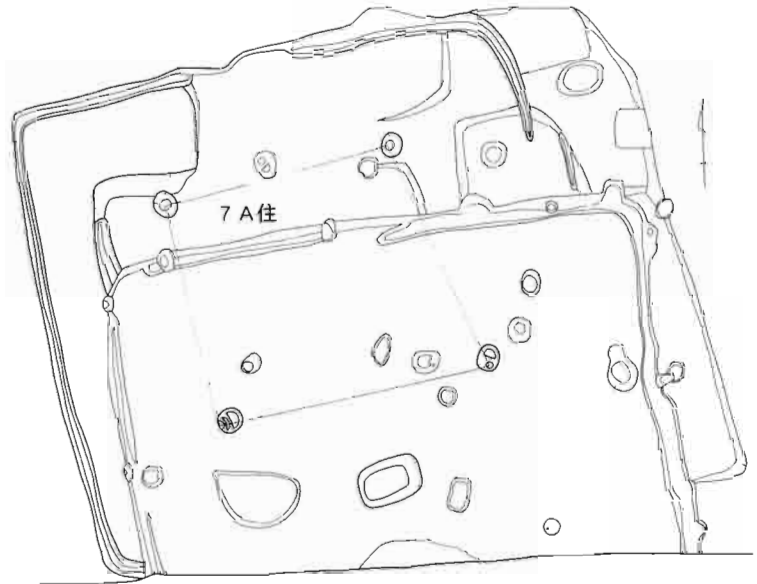
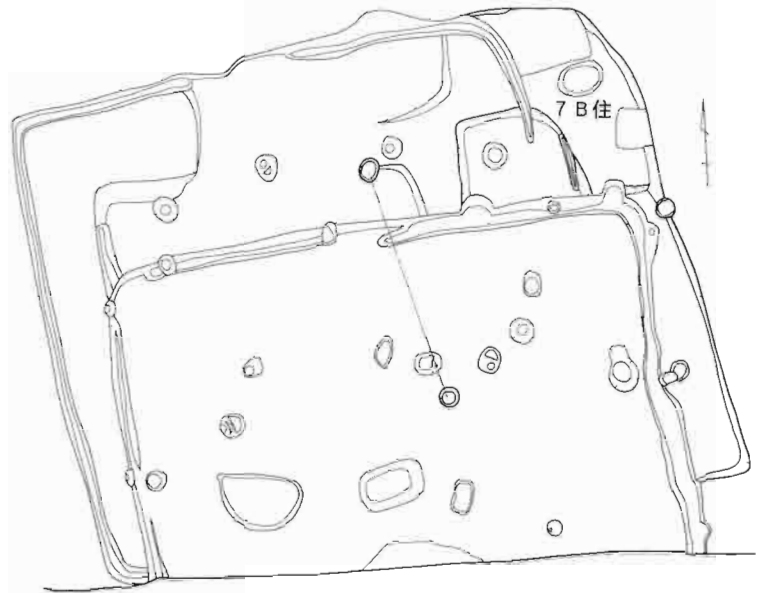
的V様式系の壺の底部である。内外面に指頭圧痕が残る。4は二重口縁壺である。口縁部の屈折部外面に三角突帯を貼り、2個の円体浮文を貼り付けている。5は碗である。底は丸みをもつ。器高4cm、口径9.7cmを測る。7は小型の鉢である。器高7cm、口径8.8cmを測る。8・9は同一個体の高坏である。坏部は深く、上半部と下半部の境は明瞭で、外面は大きく段をなす。端部は垂直にシャープな仕上げとしている。脚部は直線的に下がり、大きく開く。柱状部と裾部の境には穿孔が3穴ある。柱状部内面はヘラ削りを施す。口径20cmを測る。4は床面直上、2・3・8は床面に近い場所からの出土である。

第61図1は石庖丁である。輝緑凝灰岩製。流れ込み資料である。

H-2区9号A竪穴住居

(第63図、図版15)

9号竪穴住居については調査段階では1軒の竪穴住居と考えられたが、掘り下げが進むにつれこの竪穴住居に切られるもう一つの竪穴住居プランが確認された。このことから、古い竪穴住居を9号A、



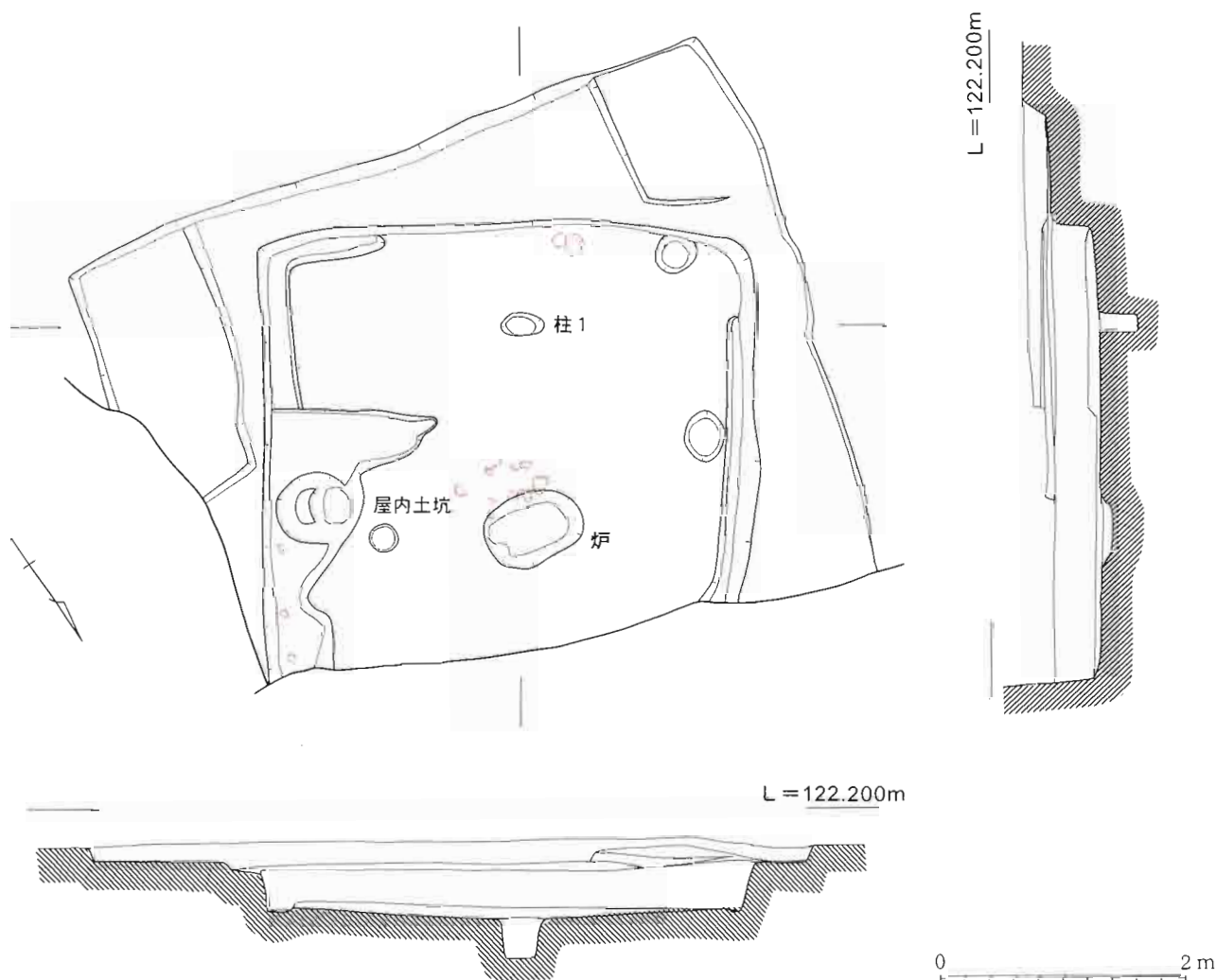
第62図 H-2区7号A・7号B・8号竪穴住居跡実測図(1/120)

新しい竪穴住居を9号Bと呼ぶこととした。

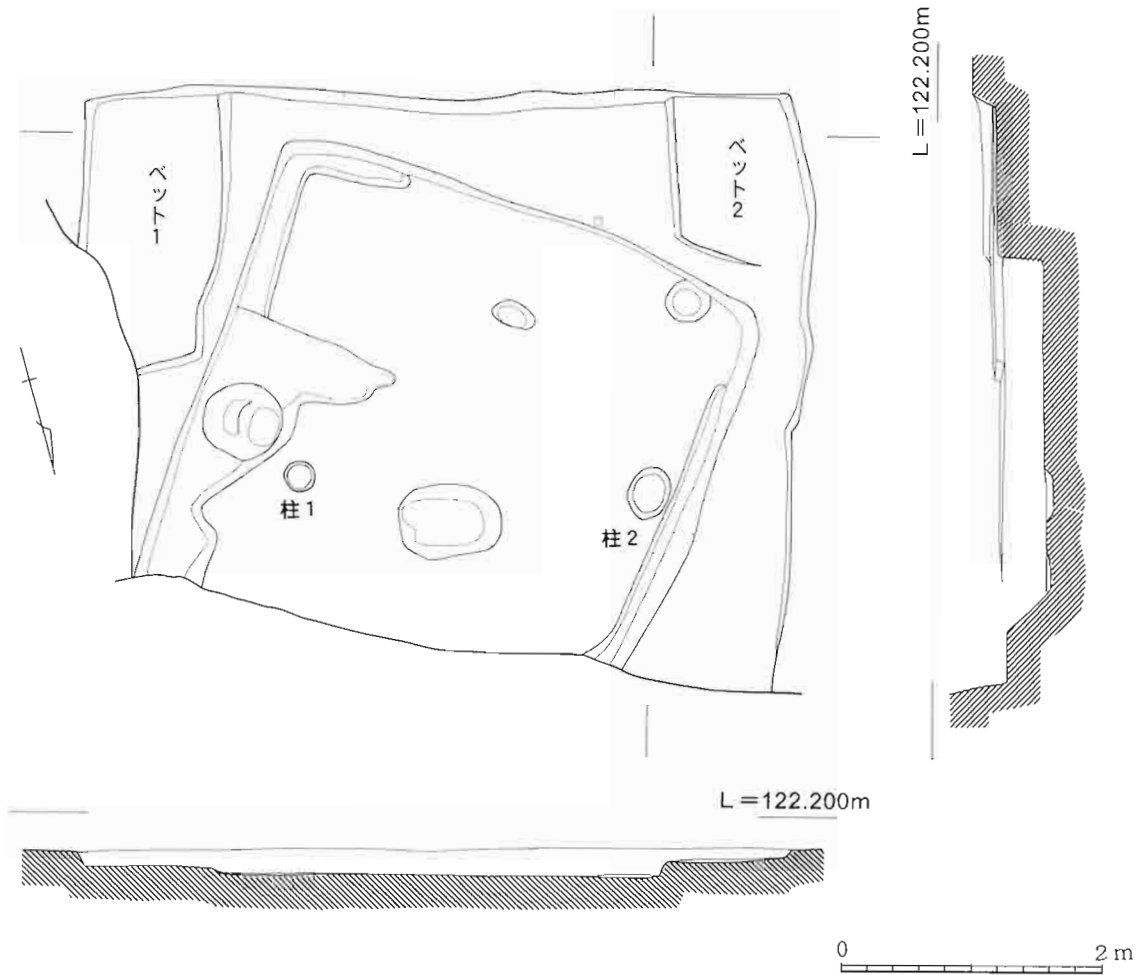
この竪穴住居は調査区の北側隅で検出した。平面形は主柱穴の位置から長方形をなすと考えられる。その規模は推定で中軸の長さ350cm以上、短軸の長さ400cm前後、深さ約50cm前後を測る。主柱穴は2本柱構造と推定され、東側中央壁際には屋内土坑、中央に炉跡が残る。ベット状遺構は検出でなく、部分的に壁周溝が巡っている。遺物は炉跡周辺からまとまって出土した。

出土遺物（第60・65・66図、図版19・21）

第60図10～13は甕である。11は口縁部が大きく外反する。内面はヘラ削りを施す。10・11とも口縁端部をつまみあげている。12は口縁部が大きく外反し、胴部は丸みをもつ。外面にハケ、内面にヘラ削りを施す。口径14.8cmを測る。14・15は壺である。14は口縁部が短く直立する二重口縁壺で、頸部下に「X」文字が施された三角突帯を巡らせる。口径22.2cmを測る。15は口縁部が内湾気味に外反する。外面にハケ、内面にヘラ削りを施す。復元口径14.2cmを測る。16は台付腕である。脚部欠損。復元口径15.5cmを測る。17・18は碗である。17は底部が丸みをもつ。口径11.3cmを測る。18は平底で、外面はヘラミガキ、内面にはヘラ削りを施す。器高5cmを測る。19は手捏土器である。内外面に指頭圧痕が残る。19は復元での器高3.4cm、復元口径6.1cmを測る。12・13は床面直上、16は屋内土坑より出土した。

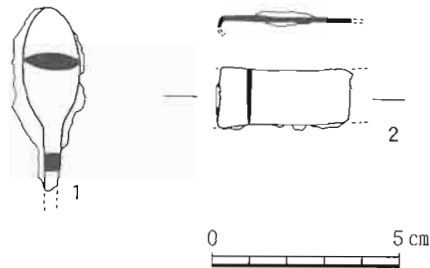


第63図 9号A竪穴住居跡実測図(1/60)



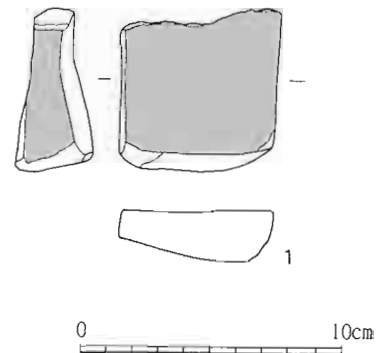
第64図 H-2区9号B 竪穴住居跡実測図(1/60)

第65図1は鉄鏃である。柳葉形をなし、基部は欠損する。2は鉄鎌である。小型で薄く、刃部は内湾する。一部欠損する。いずれも埋土中より出土。



第65図 H-2区9号竪穴住居跡出土の鉄器実測図(1/2)

第66図1は砥石である。平坦な砥石で、砥面は5面認められる。



第66図 H-2区9号竪穴住居跡出土の石器(1/3)

H-2区9号B 竪穴住居 (第64図、図版15)

9号A竪穴住居を切る竪穴住居でその半分を検出した。平面形は長方形と考えられる。主柱穴は2本確認し、2本柱構造と推定される。その規模は推定で長軸の長さ450cm以上、短軸の長さ570cm前後を測る。炉跡や屋内土坑は検出できなかったが、とくに炉跡については確認できず、掘り抜

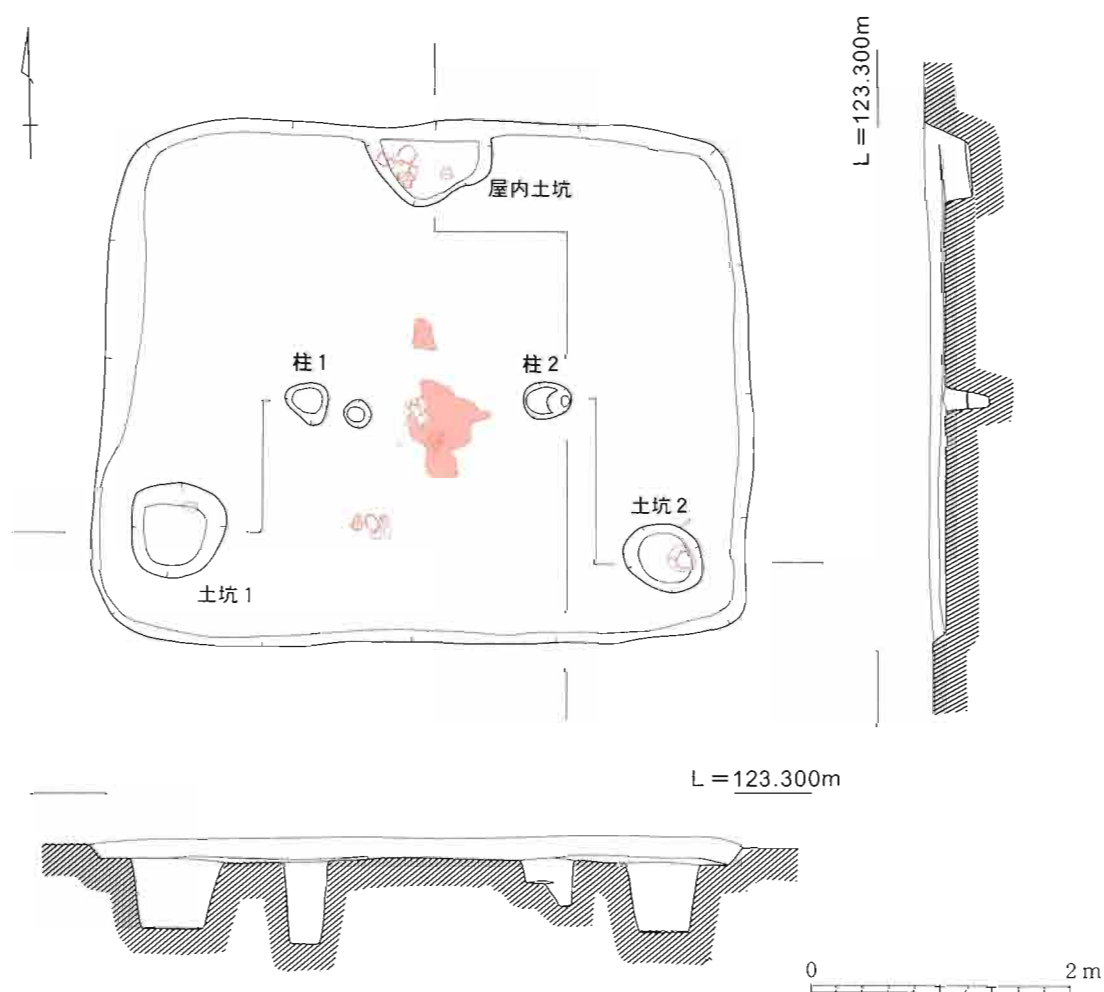
いた可能性もある。竪穴住居の南西、南東隅にはベット状遺構が付設されている。遺物は土器片が多くみられたが、床面直上の遺物は図示した程度でほとんどない。

出土遺物（第60図、図版21）

第60図19は手捏土器である。内外面に指頭圧痕が残る。器高3.7cm、口径6.8cmを測る。床面直上からの出土。

H-2区10号竪穴住居（第67図、図版18、写真15）

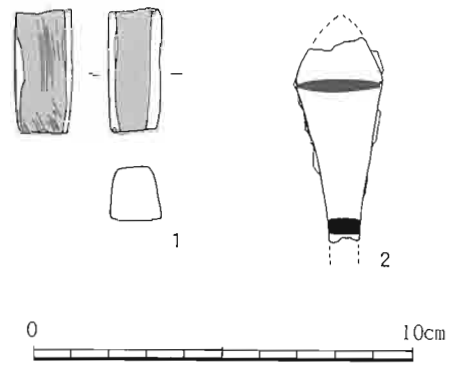
調査区南東側で3・5号竪穴住居に挟まれるように検出した。平面形は長方形をなす。規模は長軸の長さ512cm、短軸の長さ405cm、深さ20cm前後を測る。支柱穴は2本が確認されたことから、2本柱構造と考えられる。この竪穴住居の中心と思われる支柱穴間の位置には、わずかではあるが炭や焼土の広がり集中して認められたので、ここを炉跡と考えた。しかし他の竪穴住居にみられるようなはっきりとした掘り込みや焼土塊は検出できなかった。南側中央壁際には不定形の屋内土坑が残っている。また、竪穴住居の北東と北西隅付近からは2つの土坑が検出された。ともに平面が不定形をなす深さ約40cm程度の規模の土坑であり、このうち土坑1からは第69図5に示す小型器台が、また土坑2からは第69図2に示す完形品の甕が1点立ったままの状態出土した。検出



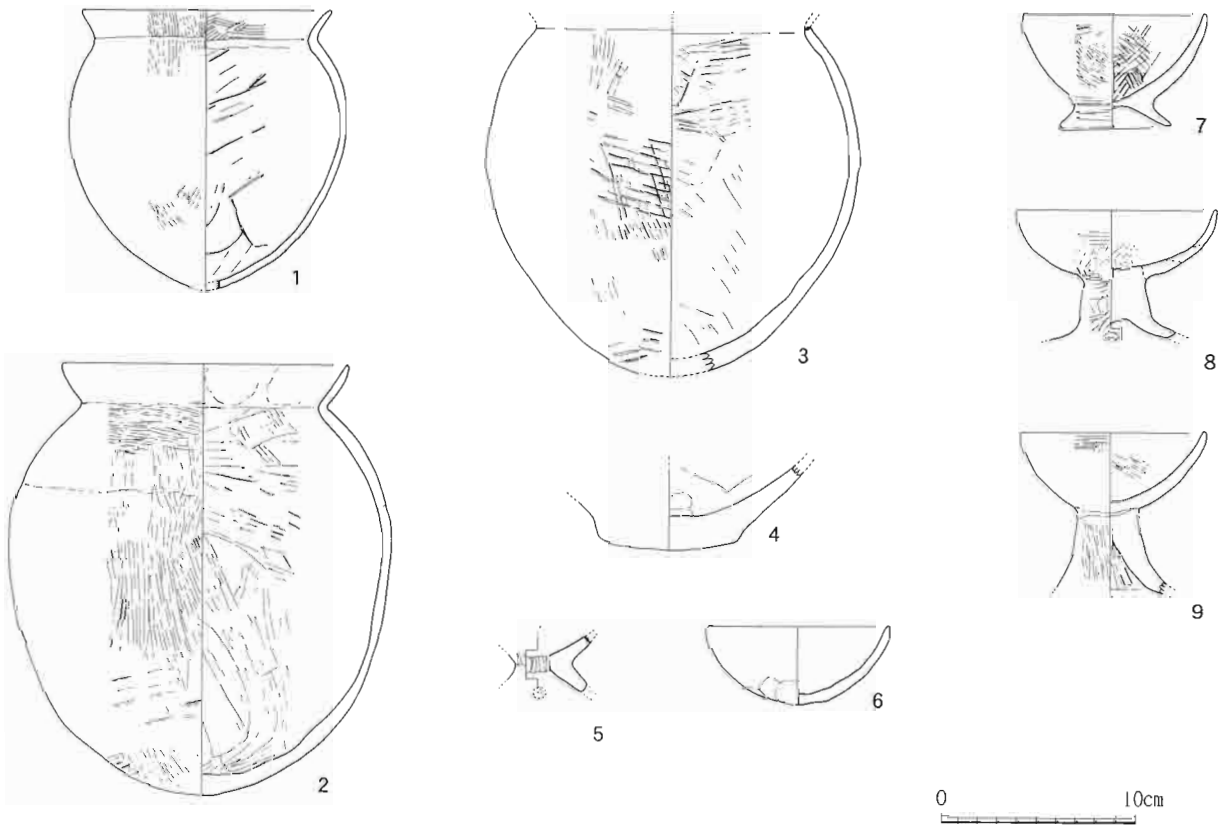
第67図 H-2区10号竪穴住居跡実測図(1/60)



写真15 H-2区10号竪穴住居跡遺物出土状況



第68図 H-2区10号竪穴住居跡出土の石器・鉄器実測図(1/2)



第69図 H-2区10号竪穴住居跡出土の土器実測図(1/4)

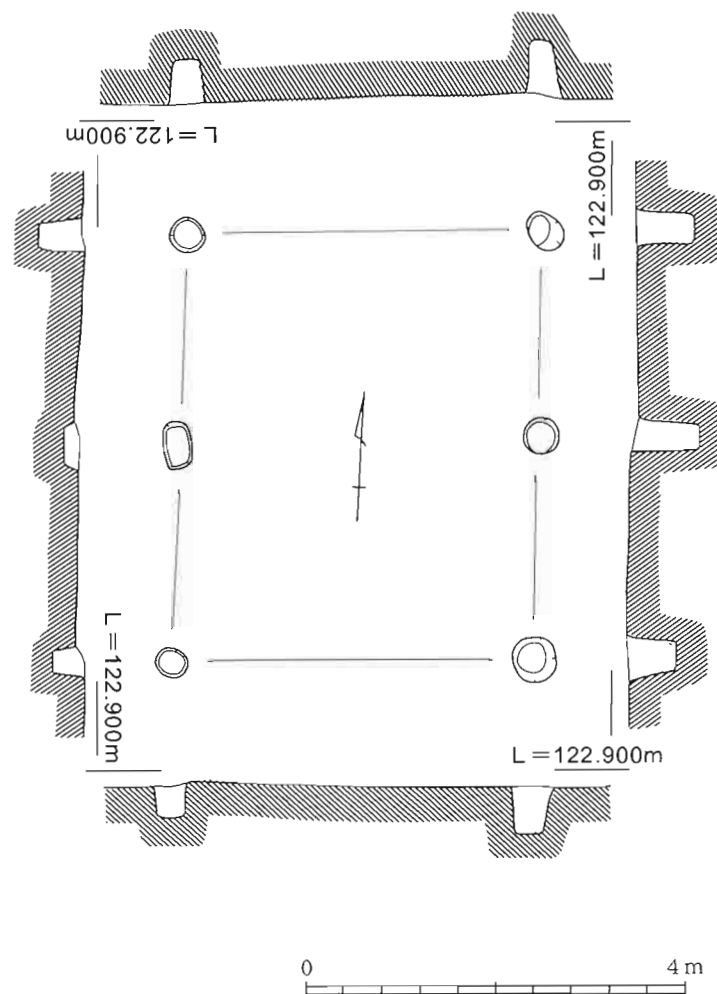
段階からこの竪穴住居に伴うものかどうか検討したが、埋土の様子やその位置などからして別の遺構とは考えにくく、この竪穴住居に付属する土坑と判断した。このほか、ベット状遺構や壁彫溝は認められなかった。遺物は埋土中から多くの土器片が出土しているがいずれも竪穴住居廃棄後のもので、屋内土坑の中からや炉跡周辺の床面直上からまとまった遺物が出土している。

出土遺物 (第68・69図、図版21)

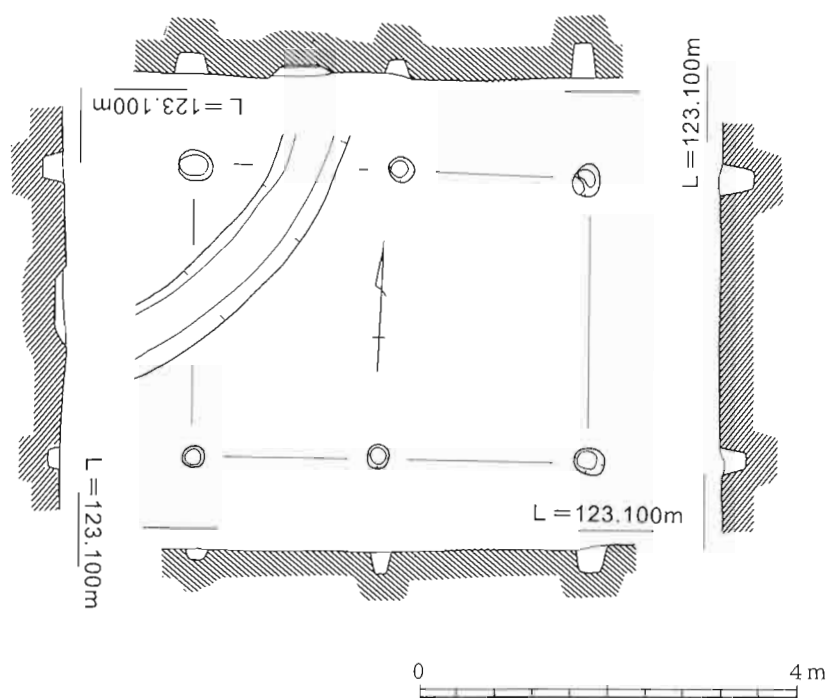
第69図1～3は甕である。1は底部を欠く。尖底気味の底部になりそうである。口縁部は短く外

反する。外面ハケ、内面ナデを施す。復元口径 12.6 cm、胴部最大径 14.2 cm を測る。2 は底部が丸底をなし、口縁部はやや内湾気味に外反する。外面ハケ、内面ヘラ削りを施す。器高 22.1 cm、復元口径 14.8 cm、胴部最大径 14.6 cm を測る。3 は口縁部と底部を欠く。底部は丸底と推定され、底部付近の外面にはタタキが残る。内外面ともハケ仕上げ。胴部最大径 19.2 cm を測る。4 は甕の底部であろうか。突レンズ状をなす。底径 7.2 cm を測る。5 は碗である。受部と脚部を欠く。受部と脚部は貫通し、脚部には穿孔が 3 穴残る。6 は碗である。口縁部が直立気味で、底は丸みをもつ。器高 4 cm、口径 9.4 cm を測る。7～9 は台付碗である。7 は脚部が低く、受部は深い。器高 5.8 cm、口径 9.3 cm、底径 5.9 cm を測る。8 は口縁部と脚部の一部を欠く。受部は浅く皿状をなす。脚部は短く外反する。穿孔が 3 穴残る。9 は脚部を欠く。8 に比べ受部は幾分深く、脚部は長く外反する。口径 9.5 cm を測る。1・4・9 は炉跡、2 は土坑 2、3・6・7 は屋内土坑、4 は上層、5 は土坑 1 出土。

第 68 図 1 は砥石である。長さ 3.2 cm、幅 1.3 cm、厚さ 1.4 cm を測る小型品である。砥面は 5 面あり、砂岩製である。埋土出土。2 は鉄鏝である。柳葉形をなし、先端部の一部と基部を欠く。床面近くから出土している。



第70図 H-2区1号掘立柱建物跡実測図(1/80)



第71図 H-2区2号掘立柱建物跡実測図(1/80)

3. 掘立柱建物跡 (第2表)

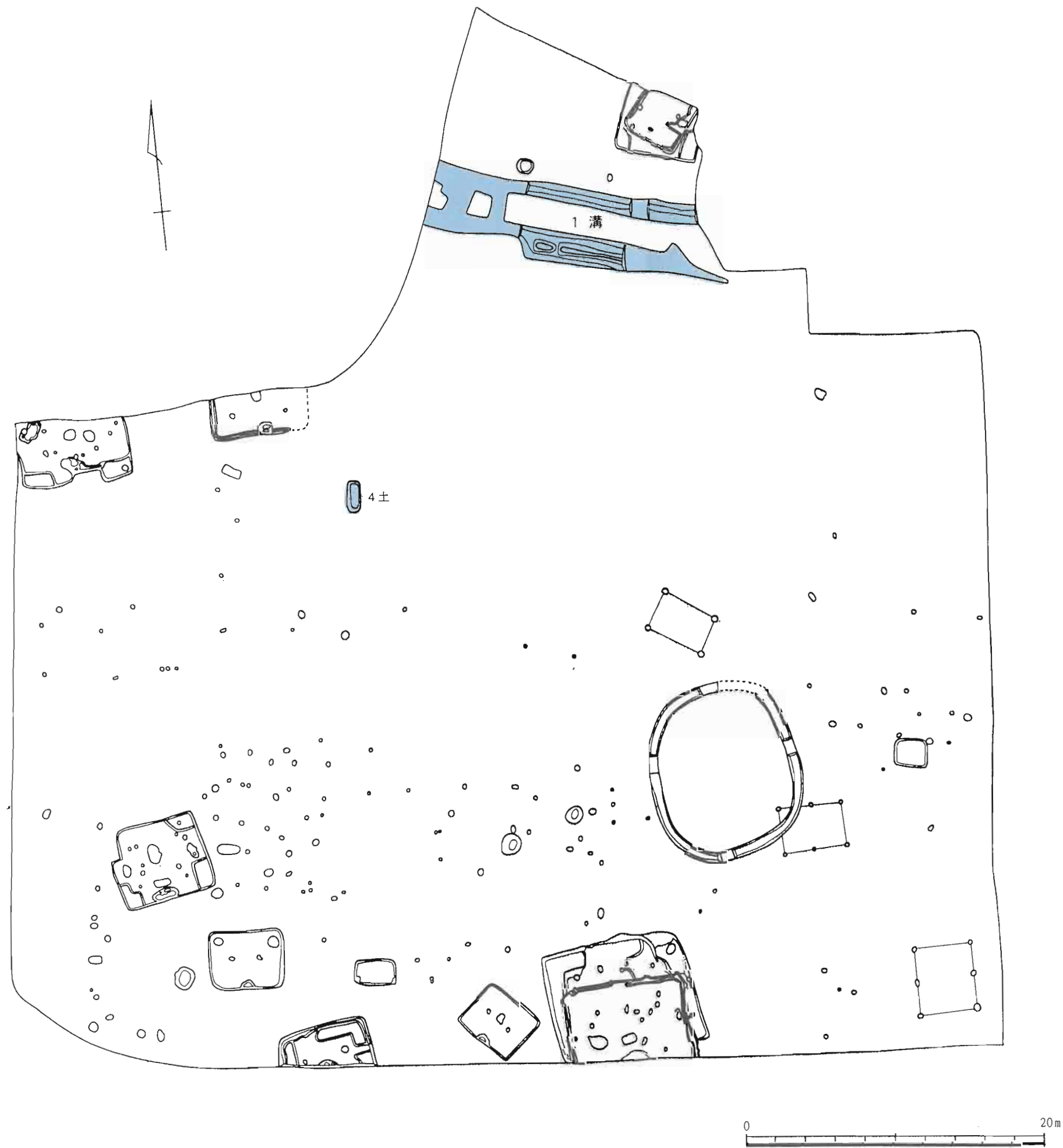
この時期に該当すると考えられる掘立柱建物は2棟である。いずれも1間×2間規模で、近接して存在している。埋土の様子や互いの方向が直行するようにあることから、同一時期に配置され建てられている可能性が高い。このほか、H-2区3号竪穴住居の東側や、H-2区1・2号土坑周辺にも類似した埋土の柱穴が存在し、その可能性を検討したが建物と判断するにはいたらなかった。この遺跡内にあっては、この時期の建物例としては数少ない資料である。

H-2区1号掘立柱建物 (第70図、図版18)

調査区の南東隅で検出した掘立柱建物である。その規模は1間×2間で、柱間寸法は心心距離で南北長軸長450cm、東西短軸長390cmを測る。床面積は16.9㎡を測る。柱穴からは弥生土器と考えられる土器小片に混じって、図示はしていないが外面にタタキ痕跡を残す薄手の土器片が出土したことから、この時期の所産と判断した。この掘立柱建物の主軸方向はほぼ南北方向で、この調査区内にみられる大半の竪穴住居の軸と同一であることから、竪穴住居に関連して建てられたものと推定される。

H-2区2号掘立柱建物 (第71図、図版18)

調査区南東の1号掘立柱建物より北に約7mの位置で検出した。1号建物と直行するよう東西方向を軸に建てられている。その規模は1間×2間で、柱間寸法は心心距離で南北長軸長417cm、東西短軸長307cmを測る。床面積は12.6㎡をはかり、1号掘立柱建物と比べるとやや小型である。柱穴からは土器の小片が出土しているが、図示できる資料はない。



第72図 H-2区遺構配置図④-近世-(1/300)

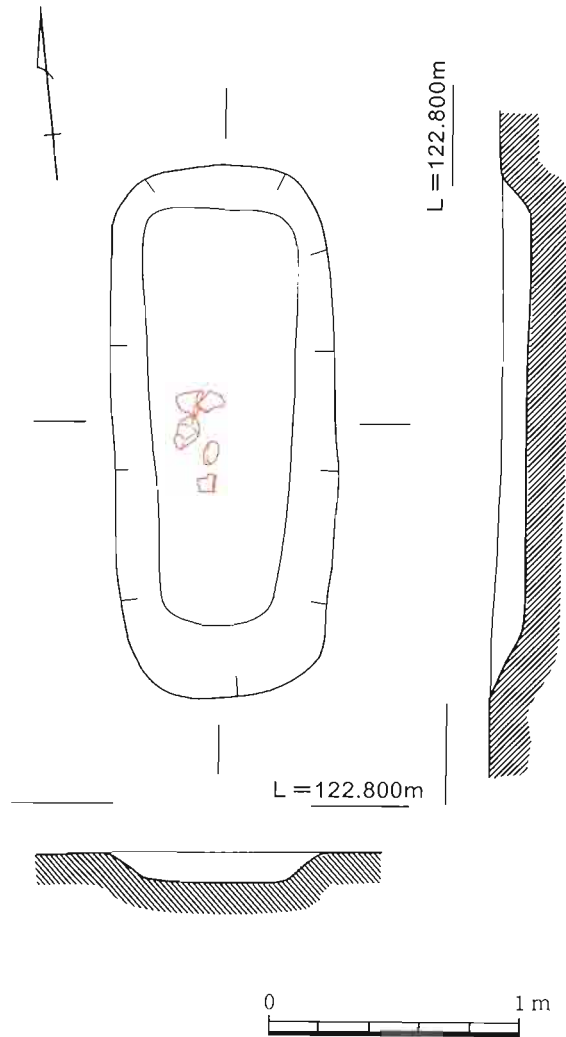
4) 近世 (第72図)

この時期の遺構としては土坑1基と溝1条を検出した。これらの遺構は調査区内の北側で確認されたもので、他の遺構が南側に集中しているのとは異なる。次の4節で報告する西側のH-3区では、東西にのびる近世の2本の溝が検出されている。しかし、この調査区内では検出することができず、第2図に見るようによほどH-2区とH-3区の調査区の境界で曲がっていない限りこの調査区へとびる様相を呈していることから、遺構面の削平により残っていないと考えた方がよさそうで、本来はこの時期の遺構がまだあったことが十分に予想される。

1. 土坑 (第3表)

H-2区1号土坑 (第73図)

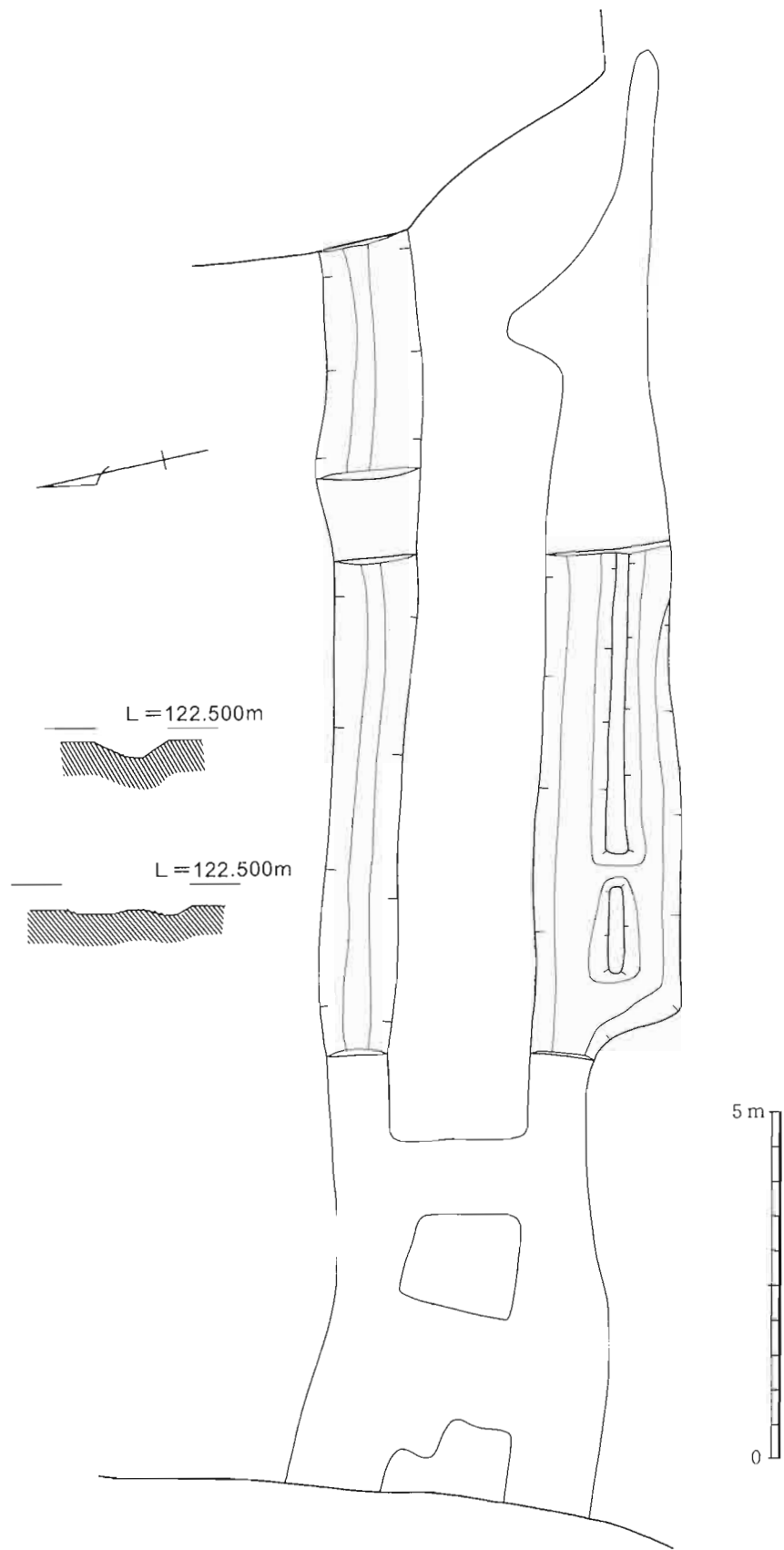
調査区のほぼ中央から北側の位置で検出した土坑である。検出の際には墓と思われたが、ベルトを残し土層観察も行った結果、墓としての痕跡は認められなかった。平面形態は楕円形をなしており、その規模は長軸長205cm、短軸長89cm、深さ約12cmを測る。この土坑の断面形態は底面が平坦な「コ」字状を呈している。土坑の底面は礫層を掘り込んでつくられているため、凹凸が激しい。この土坑内からは陶器片など数点が出土しており、時期がさらに下る可能性もある。



2. 溝 (第5表)

H-2区1号溝 (第74図) 調査区北側で検出した溝で、東西方向に横切っている。溝は2条が並行して走っているようであるが、切り合い関係などははっきりつかめなかったので、1つの溝と判断した。検出した溝の長さは約20cm、幅は90～210cm、深さは30cm前後を測る。溝の中からは青磁碗や染付の碗、陶器などが混在して出土しており、別々に掘られた可能性もある。はっきりとはしないが、畑地境界の溝の一部と考えられる。

第73図 H-2区4号土坑実測図(1/30)



第74图 H-2区1号沟实测图(1/100)

5) 採集遺物 (第12・14表)

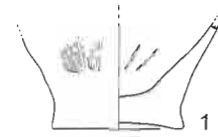
以下の遺物は、調査の際の遺構検出時に出土したものである。

土器 (第75図)

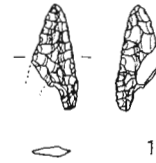
図示した遺物は甕の底部である。底は上げ底で、底径6.7cmを測る。外面はハケ、内面はナデが施されている。

石器 (第76図)

図示した遺物は石鏃である。両面とも細かな加工がなされている。脚部の一方が欠損する。最大長2.2cm、最大幅1.1cm、最大厚0.3cmを測る。姫島産黒耀石製である。



第75図 H-2区表面採集の土器実測図(1/4)



第76図 H-2区採集の石器実測図(1/2)

第4節 H-3区の調査

1) 調査の内容 (第77図、第1・2・3・5表)

この調査区はそれまで畑地として利用されていたわりには、H-1区やH-2区に比べて遺構の保存状態は良好で、表土から検出面までの深さが30cmにも満たないところもあった。検出面でのレベルは調査区の中央から北へ向かってゆるやかな傾斜がみられ、検出された遺構は調査区全体に濃い密度で広がっていた。

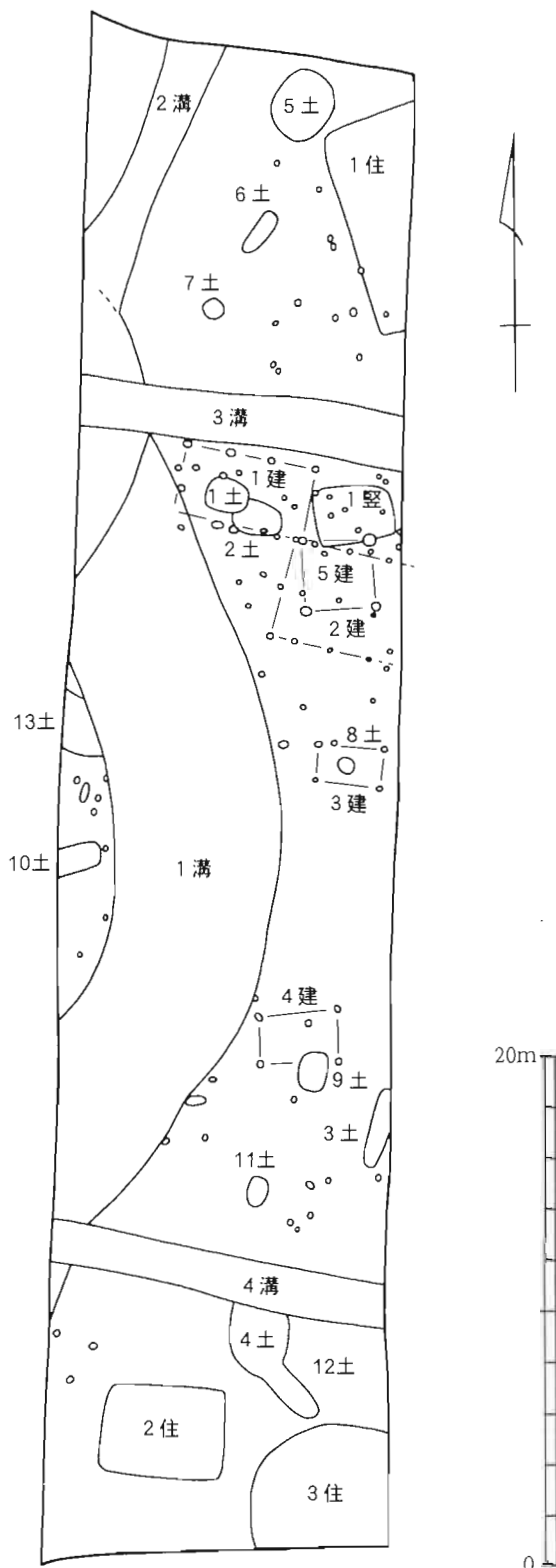
調査では1号環濠(H-1区2号溝)と3号環濠(H-1区1号溝)の切り合いを再度確認し、3号環濠(H-1区1号溝)のコーナーの在り方をみることに主眼をおいたため、遺構の掘り下げは行わず、検出段階での確認にとどめた。

その結果、両環濠の切り合いは検出時点での埋土の状況ではとらえることはできず、しかも第77図の1号溝にみるように2つの溝が重複した様子が見られないことから、H-1区で重複してのびていた1・3号環濠の築造過程は、1号環濠(H-1区2号溝)の掘られた場所を踏襲するように3号環濠(H-1区1号溝)が掘られていると考えられる。

また、3号環濠(H-1区1号溝)のコーナーの在り方については、直角に曲がるのではなく、やや丸みをもちながら屈曲することが判明した。

H-3区の調査は平成5年9月7日より機械を使って畑地の表土剥ぎを開始し、その後遺構検出作業を行って、1月24日には空中写真撮影を行い、平成5年12月30日には測量図を完成し、2月28日には埋め戻し作業を終了して調査を完了した。調査対象面積は1549㎡で、調査面積は775㎡である。

以下、時期別に概要をまとめるが、遺構の掘り下げを行っていないため、その時代判別については遺構の埋土や検出段階での出土遺物、遺構の形態などを考慮して区分している。しかし、その時期判断がつかない遺構もあり、また時期区分が適当でないものもあることをお断りしておく。



第77図 H-3区遺構配置図①(1/300)

2) 弥生時代 (第78～80図)

この時代に属すると考えられる遺構としては、H-3区3号住、H-3区1号竪穴、H-3区3・4号建物、H-3区3～12号土坑が該当しそうである。

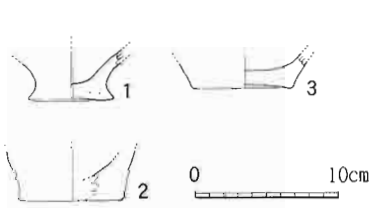
まず、H-3区3号住は全容ははっきりしないが円形プランをなすと考えられ、その規模は直径7mほどと推定される。この3号住の埋土中からは第79図1に示す平底の底部が出土しており、弥生時代中期後半頃の時期が考えられる。

H-3区1号竪穴はほぼ長方形プランをなしている。竪穴住居跡と考えるには小型であることから、竪穴とした。この竪穴の埋土中からは図示はしていないが、甕の破片などが出土している。

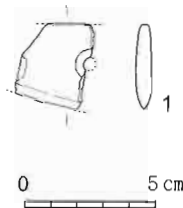
H-3区3・4号建物はほぼ東西方向を向いた1間×1間の規模をなす。規模は3号より4号のほうが幾分大きく、また3号建物のほぼ中央に位置する8号土坑は、その位置関係からこの建物に伴う可能性がある。

H-3区4・5・8・9・11号土坑は楕円形プランをなす。4号は12号と重複するが先後関係ははっきりしない。H-3区3・6・12号土坑は溝状のプランをなす。10号土坑も溝状のプランである可能性がある。また、3号土坑の埋土中からは第79図2に示す甕の底部が出土しており、上げ底気味の底部の特徴から、中期前半頃の所産であろうか。H-3区7号土坑はほぼ円形プランをなす。他の土坑と比べると大型である。

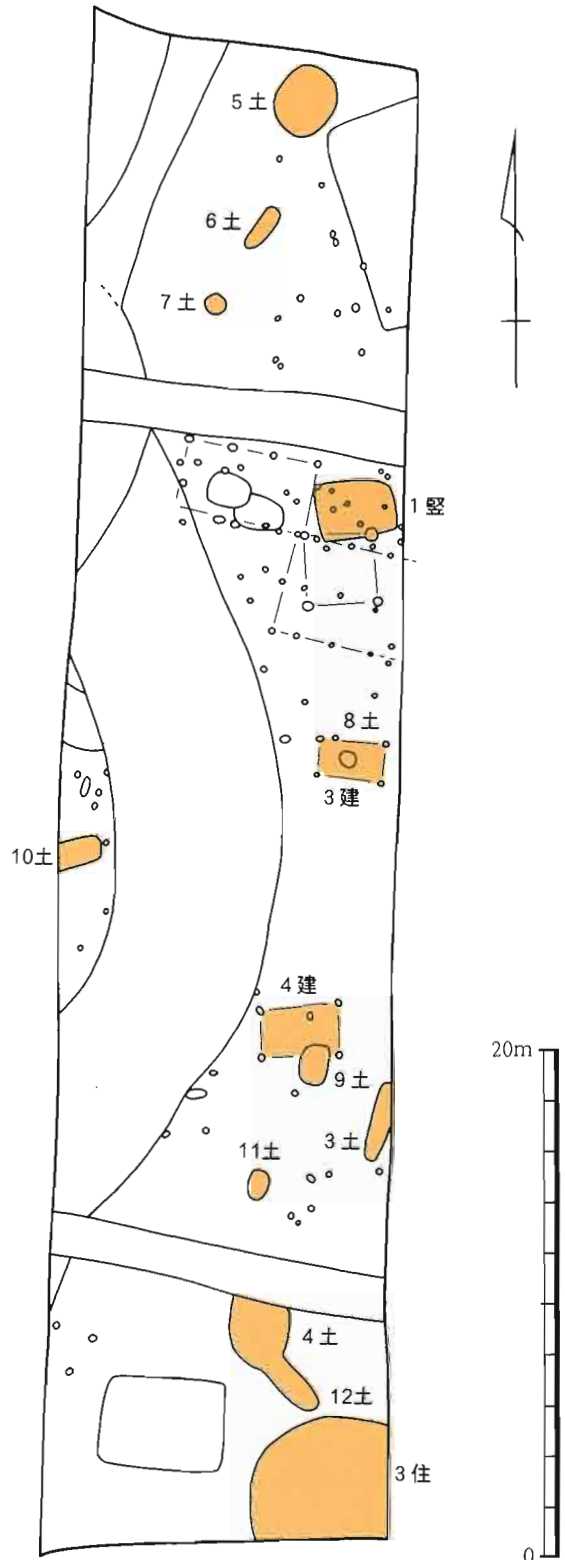
このほか、この時期の出土遺物には第80図に示す石庖丁がH-3区1号溝検出中の埋土から出土している。小型の石庖丁で、輝緑凝灰岩製である。



第79図 H-3区出土の
土器実測図①(1/4)



第80図 H-3区出土の
石器実測図(1/3)



第78図 H-3区遺構配置図②
-弥生時代-(1/300)

3) 古墳時代前期 (第81・82 図)

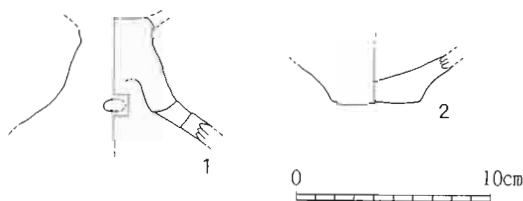
この時代に属すると考えられる遺構としては、H-3区1号溝、H-3区1・2号住、H-3区5号建物、H-3区1・2号土坑が該当しそうである。

まず、H-3区1号溝は最初に述べたとおりH-1区1号溝(3号環濠)の続きにあたる。調査区のほぼ中央で検出し、直角に曲がるのではなく、比較的緩やかに曲がっている。検出段階での幅は約6~6.7mを測る。埋土の大半は黒色土で、この表面埋土からは多くの土器片などが出土している。第82図1はこの溝の黒色土中から出土した高坏の脚部である。穿孔が残る。

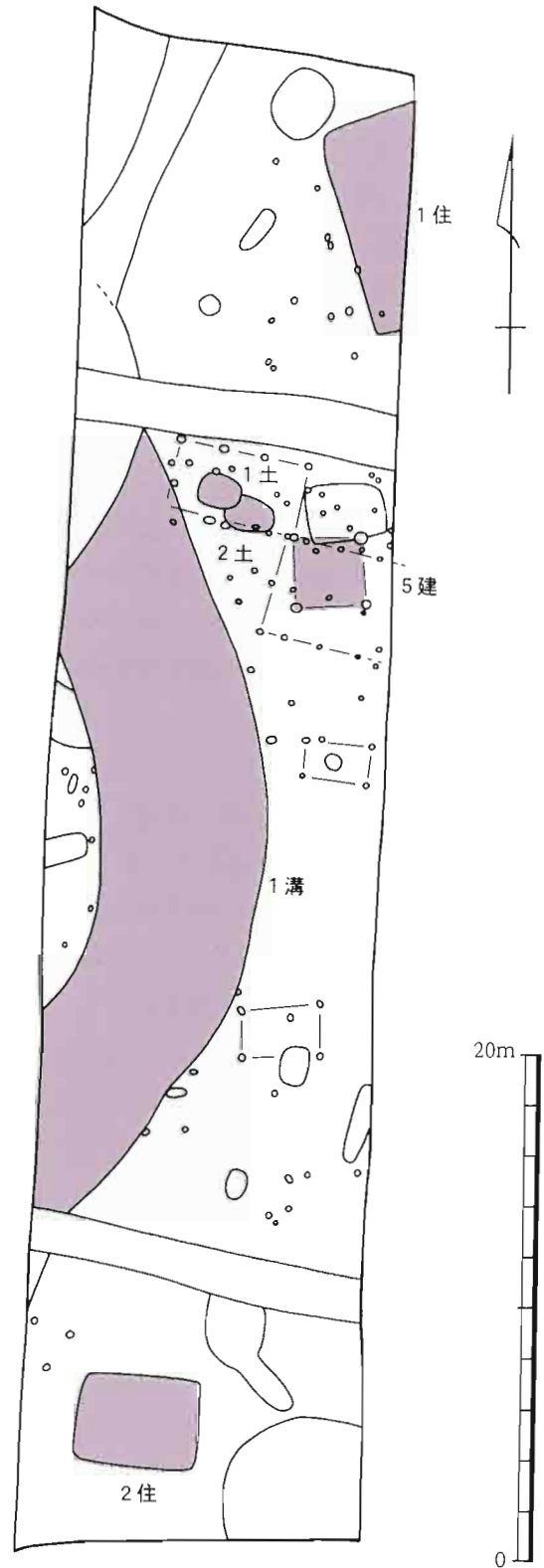
H-3区1号住は方形プランをなす。埋土表面からは、図示していないが甕の破片などが出土している。この1号住には、埋土表面の色が壁面側から1m内側において明確な違いがみられ、ベット状遺構が存在すると考えられる。H-3区2号住は長方形プランをなす。埋土表面からは、平底と丸底(第82図2)の底部片が出土しているが、竪穴住居跡の平面形態なども考慮すると、この時期に該当しそうである。第82図2は畿内第V様式系の壺の底部で、内面に指頭圧痕が残っている。

H-3区5号建物は1間×1間の規模で、柱穴の直径は他に比べ大きい。この柱穴埋土中からは厚さ4mm程度の甕の破片が出土していることから、この時期とした。

H-3区1・2号土坑は、ともに楕円形プランをなし、1号が2号を切る。1号土坑の埋土中からは厚さ4mm程度の甕の破片が出土しており、この時期の所産と考えられる。



第82図 H-3区出土の土器実測図②(1/4)



第81図 H-3区遺構配置図③
-古墳時代前期-(1/300)

4) 中世 (第83・84図)

この時代に属すると考えられる遺構としては、H-3区2号溝、H-3区1・2号建物が該当しそうである。

まず、H-3区2号溝は、調査区の北側をほぼ南北に走り1号溝を切る。溝の幅は検出面で100～140cmを測る。埋土の様子から中世の溝と考えられる。

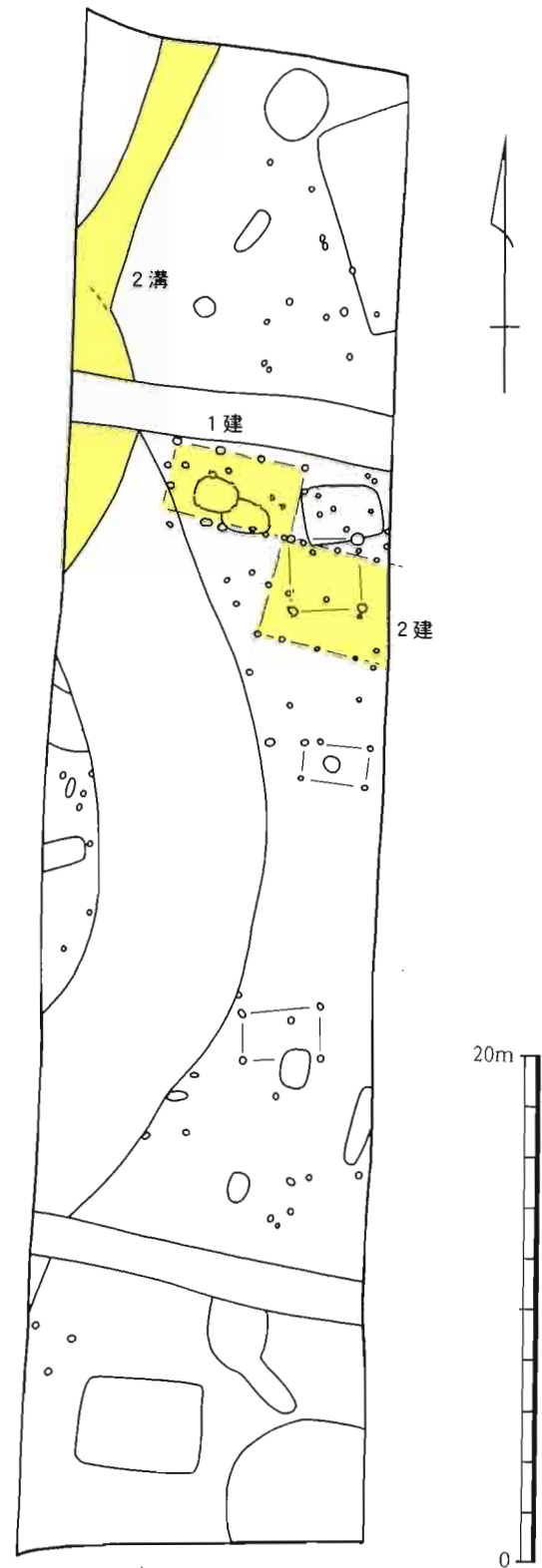
H-3区1号建物は、1間×3間の規模の建物跡であろう。柱間寸法は、検出段階での心心距離で東西長軸長約502cm、南北短軸長約290cmを測る。床面積は約14.2㎡で、長軸の方位角はN-79°-W度である。柱穴の埋土の様子から中世期の所産と考えた。

H-3区2号建物は、西側に庇がつく2間×2間+α規模の掘立柱建物跡と考えられる。柱間寸法は、検出段階での心心距離で東西長軸長約300cm以上、南北短軸長約395cmを測る。方位角はN-77°-W度である。この建物も柱穴の埋土の様子から中世期の所産と考えられる。

このほか、この時期の遺物にはH-3区3号溝の埋土中から流れ込みであるが、第84図1に示す青磁が出土している。



第84図 H-3区出土の土器実測図③(1/4)



第83図 H-3区遺構配置図④-中世-(1/300)

5) 近世 (第85・86図)

この時代に属すると考えられる遺構としては、H-3区3・4号溝が該当しそうである。

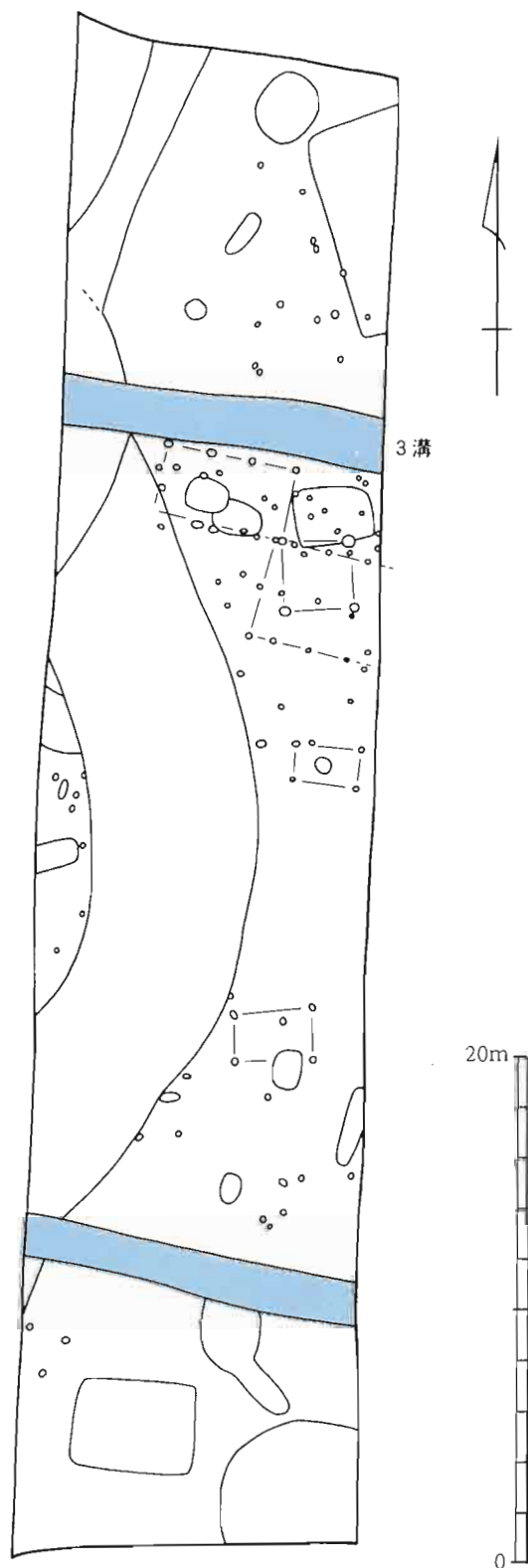
H-3区3号溝は調査区の北側を東西に横切る溝である。溝の幅は検出面で65～75cmを測る。埋土の様子からこの時期と推定され、畑地境界の溝と考えられる。この溝からは染付に混じって、第86図に示す陶器が出土している。

H-3区4号溝は調査区の南側を東西に横切る溝である。溝の幅は検出面で50～65cmを測る。この溝もやはり埋土の様子から近世の所産と推定され、畑地境界の溝と考えられる。

この2つの溝は第85図にみるようにほぼ同一の方向に走っていることから、南北の境界を示す溝であろう。



第86図 H-3区出土の土器実測図④(1/4)



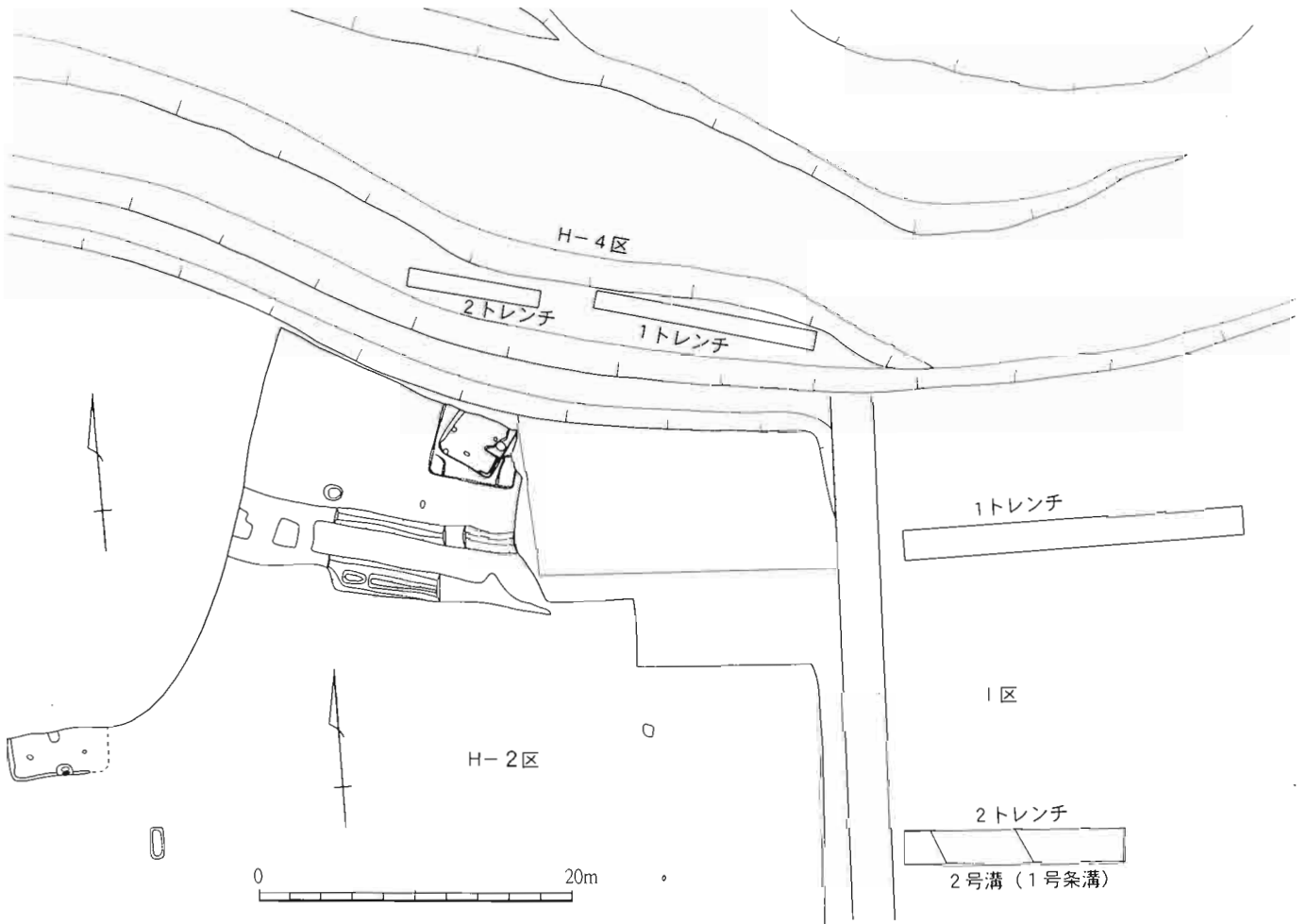
第85図 H-3区遺構配置図⑤-近世-(1/300)

第5節 H-4区の調査

1) 調査の内容 (第87・88図、図版23)

この調査区はH-2区の北側にあたる場所で、第87図に示すI区2トレンチにおいて1号条溝が検出されたことから、その台地末端での状況を確認することを目的に調査を行った。このため、まずI区2トレンチで検出した1号条溝の伸びていくと予想される場所を選定し、小迫辻原遺跡での台地斜面部の大半が自然な傾斜ではなく、杉の植林のために数mの幅を単位とした階段状の傾斜地であることを考慮し、台地末端より余り下らない一段目を対象とした。

この結果、H-4区のトレンチはH-2区北側の台地末端から約3m下がった幅約4mの一段目に東西方向のトレンチ2本を設定した。トレンチ設定にあたっては当初1本を予定していたが杉木があることから2本とせざるをえなかった。2本のトレンチは東側を1トレンチ、西側を2トレンチとした。



第87図 H-4区トレンチ位置図(1/300)

調査では2本のトレンチとも1号条溝や他の遺構などを検出するにはいたらなかった。また遺物も弥生土器片や石器が数点出土した程度であった。トレンチが比高差約3mの場所であることや遺物の数が極端に少ないことなどを考えると、本来遺構があったにせよその検出は難しいものと判断される。その後の造成によって大きく改変を受け、遺構が残存していないものと推定される。

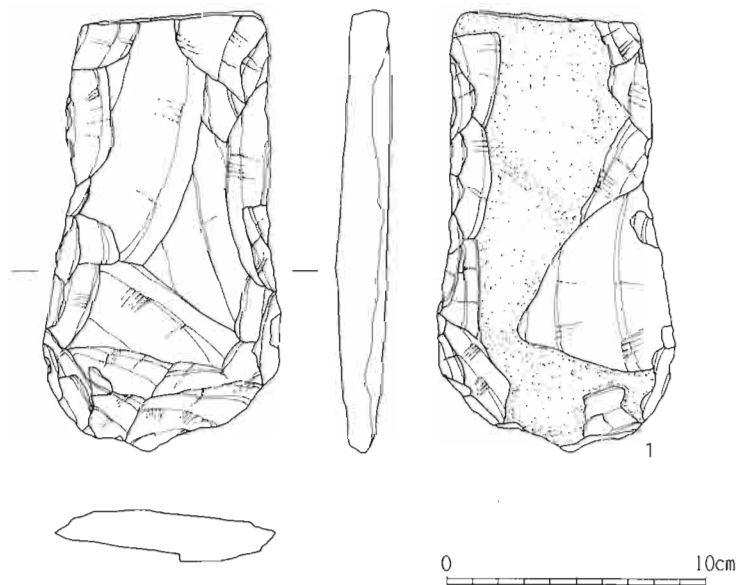
調査は平成6年1月31日からトレンチを設定し、手作業によって掘り下げを開始した。遺構検出を行ったが目的とした1号条溝の確認にはいたらず、地形測量および写真撮影を行い、平成6年2月4日に埋戻し作業を完了した。調査対象面積は100㎡で、調査(トレンチ)面積は23㎡である。

1 トレンチ (第87図)

杉木を間をぬうように、1m×14m(14㎡)のトレンチを東西方向に設定した。地山までの深さは約1mで、地山は黄色土である。遺構は検出されなかった。遺物は表土中から弥生土器片が数点出土した程度である。

2 トレンチ (第87・88図)

杉木を間をぬうように、1トレンチの西側に1m×9m(9㎡)のトレンチを東西方向に設定した。地山までの深さは約1mで、地山は黄色土である。遺構は検出されなかった。遺物は表土中から弥生土器片が数点出土したほかに、第88図1に示す石斧が1点出土した。石斧は短冊型をなし、刃部と両側辺に加工が施されている。全体に摩耗が著しく、片面には自然面が残る。最大長16.6cm、最大幅9.1cm、最大厚2cm、重量361.7gを測る。安山岩製である。



第88図 H-4区2トレンチ出土の石器実測図(1/3)

第 1 表 小迫辻原遺跡 H 区 竪穴住居跡等一覽表

棟号	遺構名	調査区	平面形	長軸長(cm)	短軸長(cm)	長軸方位角	床面積 (m ²)	主体本数	地床持存有無	屋内土坑	ベッド有無	床面	床下土坑	時期	備考	図版番号
第40図	1号竪穴住居	H-2区	(楕圆形)	760	440以上	(N-88°-W)	27.4以上	(4本柱)	中央に1ヶ所	南壁に1ヶ所	削り出し2ヶ所	貼床	不明	古墳時代前期	ベッドは張り出し	図版15
第45図	2号竪穴住居	H-2区	(方形)	520以上	300以上	(N-89°-W)	16.2以上	(4本柱)	中央に1ヶ所	南壁に1ヶ所	不明	不明	不明	古墳時代前期		図版15
第46図	3号A竪穴住居	H-2区	方形	540	530	N-79°-W	30.5	4本柱	中央に1ヶ所	南壁に1ヶ所	削り出し4ヶ所	貼床	東西に1ヶ所	古墳時代前期		図版15
第47図	3号B竪穴住居	H-2区	長方形	(450)	(260)	(N-84°-E)	(11.2)	2本柱	中央に1ヶ所	南壁に1ヶ所	なし	跡みしめ	なし	古墳時代前期		図版15
第51図	5号竪穴住居	H-2区	(方形)	620	340以上	(N-81°-W)	12.4以上	(4本柱)	中央に1ヶ所	南壁に1ヶ所	削り出し2ヶ所	貼床	不明	古墳時代前期		図版16
第55図	6号竪穴住居	H-2区	長方形	438	372	N-43°-W	14.5	2本柱	中央に1ヶ所	南壁に1ヶ所	なし	跡みしめ	なし	古墳時代前期		図版16
第57図	7号A竪穴住居	H-2区	(方形)	(807)	(740)	N-82°-E	52.1以上	4本柱	なし	南壁に1ヶ所	削り出し2ヶ所	貼床	不明	古墳時代前期		図版16、17
第58図	7号B竪穴住居	H-2区	(長方形)	(750)	(680)	(N-16°-E)	49.0以上	(2本柱)	なし	なし	削り出し1ヶ所	不明	東に1ヶ所	古墳時代前期		図版16、17
第59図	8号竪穴住居	H-2区	(方形)	(840)	(560以上)	(N-84°-E)	40.3以上	(4本柱)	中央に1ヶ所	不明	不明	貼床	西に1ヶ所	古墳時代前期	壁際に補助柱あり	図版16、17
第63図	9号A竪穴住居	H-2区	(長方形)	350以上	402	(N-75°-W)	12.3以上	2本柱	中央に1ヶ所	東壁に1ヶ所	なし	貼床	不明	古墳時代前期		図版17
第64図	9号B竪穴住居	H-2区	(長方形)	450以上	570	(N-34°-E)	21.8以上	(2本柱)	なし	不明	竪土2ヶ所	跡みしめ	不明	古墳時代前期		図版17
第67図	10号竪穴住居	H-2区	(長方形)	512	405	N-87°-E	17.1以上	2本柱	中央に1ヶ所	北壁に1ヶ所	なし	貼床	南西・南北に1ヶ所	古墳時代前期		図版18
-	1号竪穴住居	H-3区	不明	(830)	(360以上)	N-16°-W	不明	不明	不明	不明	(有り)	不明	不明	(古墳時代前期)	遺構検出のみ	
-	2号竪穴住居	H-3区	長方形	490	360	N-85°-W	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	(古墳時代前期)	遺構検出のみ	
-	3号竪穴住居	H-3区	円形	径(700)		不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	(弥生時代中期)	遺構検出のみ	
-	1号竪穴	H-3区	長方形	(318)	(230)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	(弥生時代)	遺構検出のみ	

第 2 表 小迫辻原遺跡 H区 掘立柱建物跡一覧表

挿図番号	遺構名	調査区	規模(間数)	長軸長 (cm)		短軸長 (cm)		床面積 (㎡)		方位角	時期	備考	図版番号
				心々距離	ひさし付	心々距離	ひさし付	本体	ひさし付				
第70図	1号掘立柱建物	H-2区	1×2	450	なし	390	なし	16.9	なし	N- 1° -W	古墳時代前期	南北棟	図版18
第71図	2号掘立柱建物	H-2区	1×2	417	なし	307	なし	12.6	なし	N- 96° -W	古墳時代前期	東西棟	図版18
第38図	3号掘立柱建物	H-2区	1×1	405	なし	274	なし	10.4	なし	N- 56° -W	弥生時代	東西棟	
-	1号掘立柱建物	H-3区	3×1	502	なし	290	なし	14.3	なし	N- 79° -W	中世	東西棟、遺構検出のみ	
-	2号掘立柱建物	H-3区	2×2以上	300以上	400以上	395	なし	11.8	(15.3以上)	N- 77° -W	中世	東西棟、遺構検出のみ	
-	3号掘立柱建物	H-3区	1×1	265	なし	150	なし	3.8	なし	N- 82° -W	弥生時代中期?	東西棟、遺構検出のみ	
-	4号掘立柱建物	H-3区	1×1	315	なし	210	なし	6.0	なし	N- 89° -E	弥生時代中期?	東西棟、遺構検出のみ	
-	5号掘立柱建物	H-3区	1×1	280	なし	275	なし	7.2	なし	N- 88° -E	古墳時代前期	東西棟、遺構検出のみ	

第 3 表 小迫辻原遺跡 H区 土坑一覽表

挿図番号	透構名	調査区	形状	長軸長		短軸長		深さ	時期	備考	図版番号
				単位	(cm)	単位	(cm)				
第28図	1号土坑	H-2区	円形	140	130	18			弥生時代	焼土・炭あり	
第29図	2号土坑	H-2区	円形	112	109	9			弥生時代	焼土・炭あり	
第30図	3号土坑	H-2区	長方形	220	186	19			弥生時代		図版13
第73図	4号土坑	H-2区	楕円形	209	89	12			近世		
第32図	5号土坑	H-2区	円形	125	112	84			弥生時代		
第33図	6号土坑	H-2区	長方形	278	182	11			弥生時代	焼土・粘土あり	図版13
第34図	7号土坑	H-2区	楕円形	146	125	20			弥生時代	焼土塊あり	
-	1号土坑	H-3区	楕円形	170	130	不明			古墳時代前期	2号土坑を切る	
-	2号土坑	H-3区	楕円形	200	140	不明			古墳時代前期	1号土坑に切られる	
-	3号土坑	H-3区	溝状	320	75以上	不明			弥生時代		
-	4号土坑	H-3区	楕円形	230	250以上	不明			弥生時代	12号土坑と切り合う	
-	5号土坑	H-3区	楕円形	170	230	不明			弥生時代		
-	6号土坑	H-3区	溝状	190	120	不明			弥生時代		
-	7号土坑	H-3区	円形	90	85	不明			弥生時代		
-	8号土坑	H-3区	楕円形	70	60	不明			弥生時代	3号掘立柱建物に伴う	
-	9号土坑	H-3区	楕円形	150	115	不明			弥生時代		
-	10号土坑	H-3区	溝状	170以上	100	不明			弥生時代		
-	11号土坑	H-3区	楕円形	120	70	不明			弥生時代		
-	12号土坑	H-3区	溝状	245以上	95	不明			弥生時代	4号土坑と切り合う	
-	13号土坑	H-3区	不定形	140以上	215	不明			弥生時代?		

第 4 表 小迫辻原遺跡 H 区 墓一覽表

挿図番号	遺構名	調査区	棺形式 (上/下)	長軸長/長さ (cm)	短軸長/幅 (cm)	深さ (cm)	墓坑の平面形	方位角 (長軸または頭位)	時 期	備 考	図版番号
第35図	1号墓	H-1区	合口竪棺墓(竪/竪)	80 (棺66)	40	28	楕円形	N-88°-W	弥生時代中期後半	小児用、西頭位、副葬品なし	図版14
第36図	2号墓	H-1区	合口?竪棺墓(?/竪)	39 (棺30)	31	7	不定形	N-88°-W	弥生時代中期後半	小児用、西頭位、副葬品なし	図版14

第 5 表 小迫辻原遺跡 H区 溝一覽表

挿図番号	遺構名	調査区	断面形態	長さ	幅		方向と方位角	時期	備考	図版番号
					最大幅 (単位m)	最小幅				
第5・16図	1号溝 (3号環濠)	H-1区、同トレンチ	V字形	29	4.7	4	東西、N-56°-W	古墳時代前期		図版1～3、6
第18図	2号溝 (1号環濠)	H-1区	U字形	18	2	2.9	東西、N-50°-W	古墳時代前期	張出部1ヶ所有り	図版1, 4, 5
-	3号溝	H-1区	U字形	9	2+α	1	南北、N-24°-W	中世		
-	4号溝	H-1区	U字形	10	1.1	0.8	南北、N-61°-W	近世	畑地境界溝?	
第74図	1号溝	H-2区	U字形	18	4.5	0.9	東西、N-74°-E	近世	畑地境界溝?	
-	1号溝 (3号環濠)	H-3区	不明	26.7	6.7	5.8		古墳時代前期	コーナー部分	
-	2号溝	H-3区	不明	11.5	2.5	1.5	南北、N-22°-W	中世	中世	
-	3号溝	H-3区	不明	12.8	2.2	1.9	東西、N-82°-E	近世	近世	
-	4号溝	H-3区	不明	13.5	1.8	1.5	東西、N-77°-E	近世	近世	

第 6 表 小迫辻原遺跡 H区 円形周溝遺構一覽表

挿図番号	遺構名	調査区	長軸長 (m)	短軸長 (m)	長軸方位角	溝幅 (cm)	溝深さ (cm)	時期	備考	図版番号
第39図	円形周溝遺構	H-2区	11.80	10.12	N- 8° -W	80	10	弥生時代	溝に焼土あり	図版 1 4

第7表 小迫辻原遺跡 H区 出土土器観察表①

挿図番号	出土位置・遺構	調査区	種別	器種	法量 () つきは復元径 (cm)				胎土	調整		焼成	色調	備考	図版番号
					器高	口径	胴部最大径	底径		外面	内面				
第7図-1	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	(14.2)	-	-	石英・長石	ナデ	ヘラケズリ	良好	淡黄褐色		
第7図-2	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	14.2	-	-	石英・長石・角閃石・赤色粒	タタキ後ナデまたはハケ	ハケ後ナデ	良好	淡赤褐色		
第7図-3	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	(14.6)	-	-	角閃石	ハケ後ヨコナデ	ヘラケズリ	良好	淡黄灰色		
第7図-4	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	(14.0)	(16.8)	-	石英・長石・角閃石	不明	ハケ後ケズリ	良好	外：淡黄褐色 内：淡赤褐色		図版8-7
第7図-5	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	(15.4)	-	-	石英・長石・角閃石	ナデ	ヘラケズリ	良好	淡黄褐色		
第7図-6	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	16.0	-	-	石英・角閃石・赤色粒	ハケ	ヘラケズリ・ナデ	良好	明黄灰色		
第7図-7	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	15.2	-	-	石英・角閃石・赤色粒・輝石・ 燧石	ハケ後ヨコナデ	ヘラケズリ	良好	黄褐色		図版8-4
第7図-8	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	16.5	-	-	角閃石・凝灰岩	ハケ	ヘラケズリ	良好	明淡黄褐色		
第7図-9	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	(17.8)	(22.5)	-	砂粒	ハケ	ヘラケズリ	良好	淡黄褐色		
第7図-10	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	(15.2)	(19.0)	-	石英・長石・角閃石・赤色粒	ハケ後ナデ	ヘラケズリ	良好	明黄灰褐色	外面二次焼成ス付着	図版7-5
第7図-11	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	15.2	19.4	-	角閃石・赤色粒	ハケ	ヘラケズリ	良好	外：黄褐色 内：淡黄褐色	外面二次焼成ス付着	図版10-11
第7図-12	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	15.6	21.2	-	石英・長石・角閃石・赤色粒・ 燧石	ハケ	ヘラケズリ	良好	淡黄灰色	外面二次焼成ス付着	図版7-3
第8図-13	1号溝	H-1区	土師器	甕	(13.2)	12.8	15.2	-	石英・長石・角閃石・赤色粒	ハケ	ヘラケズリ	良好	黄褐色	外面二次焼成ス付着	図版7-4
第8図-14	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	(13.2)	(15.9)	-	角閃石	ハケ	ヘラケズリ	良好	外：黄褐色 内：灰褐色	外面二次焼成受ける	図版8-2
第8図-15	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	14.2	18.8	-	角閃石・赤色粒	ハケ	ヘラケズリ	良好	外：黄褐色 内：黄褐色	外面二次焼成受ける	図版7-7
第8図-16	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	14.8	(18.7)	-	長石・角閃石	ハケ	ヘラケズリ	良好	淡黄褐色	外面ス付着	図版7-6
第8図-17	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	14.9	16.2	-	角閃石	ハケ	ヘラケズリ	良好	淡赤黒褐色	外面二次焼成受ける	図版10-12
第8図-18	1号溝	H-1区	土師器	甕	(25.0)	16.2	21.6	-	石英・長石・輝石・凝灰岩	ハケ	ヘラケズリ	良好	淡黄褐色	外面二次焼成受ける	図版8-5
第8図-19	1号溝	H-1区	土師器	甕	34.7	17.8	28.5	-	石英・長石・角閃石	不明	ヘラケズリ	良好	外：淡黄褐色 内：黄褐色	外面二次焼成受ける	図版8-19
第8図-20	1号溝	H-1区	土師器	甕	15.6	14.0	14.9	-	石英・長石・角閃石・赤色粒	板状工具によるケズリ	ヘラケズリ	良好	黄灰色	外面二次焼成受ける	図版8-3
第8図-21	1号溝	H-1区	土師器	甕	15.6	14.0	14.5	-	角閃石・赤色粒	ヘラ状工具によるナデ	ヘラケズリ	良好	外：黄褐色 内：淡黄褐色		
第9図-22	1号溝	H-1区	土師器	甕	-	-	-	4.5	石英・長石・角閃石	タタキ後一部ナデ	ハケ・板ナデ	良好	黒褐色	外面ス付着	
第9図-23	1号溝	H-1区	土師器	甕	13.9	(19.6)	-	-	角閃石	タタキ後ハケ	ハケ	良好	外：黄褐色 内：淡黄褐色	外面ス付着	図版10-7

第 8 表 小迫辻原遺跡 H 区 出土土器観察表②

挿図番号	出土位置・遺構	調査区	種別	器種	法 量 () つきは復元径 (cm)			胎土	調 整		焼成	色調	備考	図版番号
					器高	口 径	胴部最大径		底 径	外 面				
第10図-24	1号溝	H-1区	土師器	二重口鉢	-	17.4	-	長石・角閃石	ヨコナテ	ナテ	良好	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	図版10-1	
第10図-25	1号溝	H-1区	土師器	長頸壺	-	-	(16.0)	石英・長石・角閃石	ナテ	ハケ	良好	淡灰色	図版9-5	
第10図-26	1号溝	H-1区	土師器	壺	-	13.0	18.9	角閃石	ハケ	ケズリ	良好	淡褐色	図版9-2	
第10図-27	1号溝	H-1区	土師器	壺	-	(21.0)	19.2	石英・長石・角閃石	ハケ	ハケ後ケズリ	良好	淡黄褐色	図版9-1	
第10図-28	1号溝	H-1区	土師器	壺	-	(15.6)	-	石英・長石・角閃石・金山層片・赤色粒	ハケ	ケズリ	良好	淡茶灰色	図版9-3	
第10図-29	1号溝	H-1区	土師器	二重口鉢	-	-	-	石英・長石・角閃石	不明	ケズリ	良好	淡黄褐色	図版9-6	
第10図-30	1号溝	H-1区	土師器	壺	-	17.0	(33.6)	角閃石	ハケ	ケズリ	良好	淡黄褐色	図版9-4	
第10図-31	1号溝	H-1区	土師器	壺	-	(17.8)	(28.8)	石英・長石・角閃石・雲母	ハケ	ケズリ	良好	淡黄褐色	図版9-7	
第11図-32	1号溝	H-1区	土師器	高坏	-	(20.2)	-	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒	不明	ナテ	良好	淡茶灰色		
第11図-33	1号溝	H-1区	土師器	高坏	-	(21.0)	-	石英・長石・角閃石	ナテ	ヨコナテ	良好	淡赤褐色	図版10-2	
第11図-34	1号溝	H-1区	土師器	高坏	-	(16.3)	-	石英・長石・角閃石・赤色粒	不明	不明	良好	黄灰色		
第11図-35	1号溝	H-1区	土師器	高坏	-	-	16.4	石英・長石・角閃石・赤色粒	ハケ	ハケ	良好	明黄褐色	穿孔有り	
第11図-36	1号溝	H-1区	土師器	高坏	-	-	15.0	角閃石	ハケ	不明	良好	淡赤灰褐色	穿孔有り	
第11図-37	1号溝	H-1区	土師器	台付鉢	-	-	-	角閃石	ハケ	不明	良好	淡黄褐色	穿孔有り	
第12図-38	1号溝	H-1区		鉢	-	-	-	長石	ナテ	ナテ	良好	明黄褐色		
第12図-39	1号溝	H-1区		碗	-	-	3.9	石英・長石・雲母・赤色粒	ナテ	ナテ	良好	橙褐色		
第12図-40	1号溝	H-1区		碗	3.5	13.0	-	石英・長石・角閃石	ナテ	ケズリ後ナテ	良好	淡黄褐色	図版10-10	
第12図-41	1号溝	H-1区		鉢	-	-	-	角閃石・赤色粒	不明	不明	良好	外：淡黄褐色 内：黄褐色	図版10-8	
第12図-42	1号溝	H-1区		手摺土器	3.8	8.3	-	石英・長石・角閃石	ナテ	ナテ	良好	淡黄褐色	図版10-9	
第12図-43	1号溝	H-1区		鉢	6.1	9.8	-	角閃石・赤色粒	ナテ	ハケ	良好	淡黄褐色	図版10-6	
第12図-44	1号溝	H-1区		鉢	8.5	11.8	10.4	石英・長石・角閃石	ハケ	ハラケズリ後ヨコナテ	良好	外：淡黄褐色 内：黄褐色	図版10-5	
第13図-45	1号溝	H-1区	土師器	器台	-	(16.0)	-	石英・長石・角閃石・雲母	ナテ	ナテ	良好	淡黄褐色	内外面丹塗リ	
第13図-46	1号溝	H-1区	土師器	器台	-	-	-	石英・長石・角閃石・赤色粒	ナテ	ナテ	良好	黄褐色	内外面丹塗リ	
第13図-47	1号溝	H-1区	土師器	坏	-	-	-	石英・長石	不明	ナテ	良好	淡赤褐色	底部糸切り?	

第9表 小迫辻原遺跡 H区 出土土器観察表③

焼図番号	出土位置・遺構	調査区	種別	器種	法量 () つきは復元径 (cm)			胎土	調整		焼成	色調	備考	図版番号
					器高	口径	胴部最大径		底径	外面				
第13図-48	1号溝	H-1区	土師器	杯	3.3	-	-	石英・長石	ナデ	ナデ	良好	淡黄褐色 外：淡黄褐色 内：淡茶褐色	底部糸切り？	図版7-1
第17図-1	トレンチ1号溝	H-1区	土師器	壺	-	13.6	16.3	角閃石・砂粒	ハケ	ケズリ	良好	淡黄褐色		図版7-2
第17図-2	トレンチ1号溝	H-1区	土師器	壺	-	13.2	19.5	石英・長石・角閃石	ハケ	ケズリ	良好	淡黄褐色 外：淡黄褐色 内：淡茶褐色		図版10-13
第17図-3	トレンチ1号溝	H-1区	土師器	-	1.9	(7.7)	-	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良好	淡黄褐色		
第20図-1	2号溝	H-1区	土師器	壺	-	-	-	石英・長石・角閃石	タタキ後ハケ	調整時短ハケ、下ケズリ	良好	淡黄褐色	黒斑あり	
第20図-2	2号溝	H-1区	土師器	壺	-	(13.4)	(14.2)	石英・長石・角閃石・赤色粒	ハケ	ハラケズリ	良好	淡茶褐色		図版11-5
第20図-3	2号溝	H-1区	土師器	壺	-	17.3	21.0	石英・長石・角閃石・金鱗母	ハケ後ヨコナデ	板ナデ後ハラケズリ	良好	淡黄色 外：淡黄褐色 内：暗茶褐色		図版11-4
第20図-4	2号溝	H-1区	土師器	壺	14.9	13.0	15.3	角閃石	ハケ	ハラケズリ	良好	黄灰色		図版11-1
第20図-5	2号溝	H-1区	土師器	壺	15.4	12.6	16.0	石英・長石・角閃石・金鱗母	ハケ	ハラケズリ	良好	黄灰色		図版11-2
第20図-6	2号溝	H-1区	土師器	壺	20.7	(14.6)	18.0	石英・長石・角閃石・宝山輝片	ハケ	ハラケズリ	良好	淡茶灰色	外面二次焼成によりスス付着	図版11-3
第20図-7	2号溝	H-1区	土師器	壺	-	(15.8)	(22.2)	石英・長石	タタキ後ハケ	ハラケズリ	良好	淡黄褐色	粘土紐接合痕跡	図版8-1
第20図-8	2号溝	H-1区	土師器	壺	-	(15.0)	-	石英・長石・角閃石・赤色粒	ハケ	ハラケズリ	良好	淡黄灰色		図版11-6
第20図-9	2号溝	H-1区	土師器	壺	-	(16.0)	-	砂粒少量	ナデ	ナデ	良好	淡黄褐色		
第20図-10	2号溝	H-1区	土師器	台付碗	-	10.8	-	石英・角閃石・赤色粒	ハケまたはハラミガキ	ナデ後ハラミガキ	良好	黄灰色		図版12-1
第20図-11	2号溝	H-1区	土師器	高杯	-	-	-	石英・長石・角閃石・赤色粒	ハケ	ハラケズリ	良好	明黄褐色	すかしあり	
第20図-12	2号溝	H-1区	土師器	碗	6.3~6.7	12.2	-	石英・長石・角閃石	ナデ	ハラケズリ	良好	淡黄褐色 外：淡黄褐色 内：淡茶褐色		図版11-7
第24図-1	1号溝	H-1区	中国青磁	碗	-	-	-	緻密			良好	オリーブ灰色	内面刻尼文	
第24図-2	2号溝	H-1区	中国青磁	碗	-	-	-	緻密			良好	黄緑色	外面撥弁縁連弁文	
第24図-3	3号溝	H-1区	中国青磁	碗	-	-	5.4	緻密			良好	淡緑灰色	外面縁連弁文	
第24図-4	4号溝	H-1区	染付	碗	-	-	-	緻密			良好	白色	内面図柄あり	
第24図-5	4号溝	H-1区	陶器	鉢	-	-	-	緻密			良好	褐色		
第28図-1	1号土坑	H-2区	弥生土器	壺	-	-	-	石英・長石・角閃石	不明	ナデ	良好	淡黄褐色		図版20-12
第28図-2	3号土坑	H-2区	弥生土器	壺	-	(23.8)	-	石英・長石・角閃石・宝山岩	不明	不明	良好	黄灰色		図版21-2
第28図-3	5号土坑	H-2区	弥生土器	鉢	-	-	7.4	石英・長石・角閃石	ハケ	ナデ	良好	淡灰褐色	外面未塗り	図版20-13

第 10 表 小迫过原遺跡 H 区 出土土器観察表④

標記番号	出土位置・遺構	調査区	種別	器種	法量 () つきは還元径 (cm)			胎土	調整		焼成	色脚	備考	図版番号
					器高	口径	胴部最大径		底径	外面				
第28図-4	6号土坑	H-2区	弥生土器	甕	-	(15.6)	(13.3)	-	ハケ	ハケ	良好	外：淡黄褐色 内：暗黄褐色		
第28図-5	6号土坑	H-2区	弥生土器	甕	-	(17.2)	(15.0)	-	不明	不明	良好	外：淡黄褐色 内：暗黄褐色	図版20-14	
第28図-6	6号土坑	H-2区	弥生土器	甕	-	(19.7)	(17.2)	-	不明	不明	良好	淡黄褐色		
第28図-7	6号土坑	H-2区	弥生土器	鉢	7.9	15.3	-	5.3	ナデ	ナデ	良好	黄褐色	図版21-1	
第28図-8	6号土坑	H-2区	弥生土器	甕	-	33.6	-	-	不明	不明	良好	淡黄褐色	竈先状口縁	
第28図-9	円形周溝遺構	H-2区	弥生土器	甕	-	-	-	-	不明	不明	良好	淡黄褐色		
第28図-10	円形周溝遺構	H-2区	弥生土器	甕	-	-	-	-	不明	不明	良好	淡黄褐色		
第28図-11	円形周溝遺構	H-2区	弥生土器	甕	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	淡黄褐色		
第28図-12	円形周溝遺構	H-2区	弥生土器	甕	-	-	-	(7.4)	不明	不明	良好	淡黄褐色		
第37図-1	1号小児棺 (土葬)	H-2区	弥生土器	甕	-	36.0	34.4	-	ハケ	ナデ?	良好	淡黄褐色	図版21-3	
第37図-2	1号小児棺 (土葬)	H-2区	弥生土器	甕	44.1	31.2	31.0	8.0	ハケ	ナデ	良好	淡黄褐色		
第37図-3	2号小児棺	H-2区	弥生土器	甕	-	-	-	-	不明	不明	良好	淡褐色		
第43図-1	1号竪穴住居	H-2区	土師器	甕?	-	-	-	-	不明	不明	良好	淡茶褐色	底部のみ	
第43図-2	1号竪穴住居	H-2区	土師器	高坏	-	(29.0)	-	-	不明	不明	良好	淡黄褐色	坏部のみ	
第43図-3	2号竪穴住居	H-2区	土師器	鉢	-	-	-	-	ミガキ	ナデ	良好	暗褐色		
第48図-1	3号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	-	-	-	タタキ状ハケ、器部内面へラミガキ	ハケ	良好	黄灰色・黄黒灰色	底部のみ	
第48図-2	3号竪穴住居	H-2区	土師器	高坏	-	-	-	-	ナデ	不明 (一部ナデ)	良好	淡赤褐色	坏部の一部のみ残存	
第48図-3	3号竪穴住居	H-2区	土師器	高坏	-	(27.0)	-	-	不明	ハケ	良好	淡明黄褐色		
第48図-4	3号竪穴住居	H-2区	土師器	高坏	-	(33.0)	-	-	不明	不明	良好	明黄褐色		
第48図-5	3号竪穴住居	H-2区	土師器	高坏	-	-	-	11.5	ナデ	ナデ、ハケ	良好	明黄褐色		
第48図-6	3号竪穴住居	H-2区	土師器	鉢	-	(10.4)	(11.7)	-	ナデ	ナデ	良好	黄灰色	図版19-1	
第48図-7	3号竪穴住居	H-2区	土師器	甕?	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	淡黄褐色	外面衝描文	
第48図-8	3号竪穴住居	H-2区	土師器	甕?	-	-	-	-	不明	不明	良好	淡黄褐色	外面沈線による縁刻	
第48図-9	3号竪穴住居	H-2区	土師器	手捏土器	-	-	-	-	ナデ	ヘラナデ	良好	黄灰色		

第 11 表 小迫平原遺跡 H 区 出土土器観察表⑤

挿図番号	出土位置・遺構	調査区	種別	器種	法 量 () つきは復元径 (cm)			胎土	割 整		焼成	色調	備考	図版番号
					器高	口径	胴部最大径		底径	外 面				
第48図-10	3号竪穴住居	H-2区	土師器	ひしゃく形土器	-	-	-	砂粒	指頭圧痕	ハケ	良好	黄灰色		
第48図-11	3号竪穴住居	H-2区	土師器	手把土器	1.8	10.7	-	石英・長石・角閃石	指頭圧痕	指頭圧痕顕著	良好	黒灰色	図版19-2	
第48図-12	3号竪穴住居	H-2区	土師器	手把土器	-	-	6.3	石英・長石・角閃石	指頭圧痕	ナデ	良好	淡黄褐色	頸部突帯貼り付け	
第48図-13	3号竪穴住居	H-2区	土師器	手把土器	-	-	-	石英・砂粒	指頭圧痕	指ナデ	良好	淡黄褐色		
第52図-1	5号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	-	-	石英・長石	不明	不明	良好	淡黄褐色		
第52図-2	5号竪穴住居	H-2区	土師器	甕?	-	-	-	石英・長石	不明	ハケ後ナデ	良好	黒褐色		
第52図-3	5号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	-	-	石英・長石・角閃石・雲母	ハケ、ケズリ	ハケ、ケズリ	良好	淡黒灰色	図版19-5	
第52図-4	5号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	16.0	-	石英・角閃石	不明	不明	良好	淡茶褐色	頭部貼り付け突帯	
第52図-5	5号竪穴住居	H-2区	土師器	高坏	-	-	-	石英・角閃石・長石	不明	不明	良好	淡黄褐色		
第52図-6	5号竪穴住居	H-2区	土師器	台付鉢	-	(12.4)	-	石英・長石	不明	ケズリ	良好	暗黄褐色	外面指頭圧痕残る	
第52図-7	5号竪穴住居	H-2区	土師器	台付鉢	-	-	12.4	石英・長石	ハケ	ナデ	良好	淡黄褐色	図版19-4	
第52図-8	5号竪穴住居	H-2区	土師器	複合口縁甕	-	(23.4)	-	石英・角閃石	ナデ	ハケ後ナデ	良好	淡茶褐色	図版19-3	
第52図-9	5号竪穴住居	H-2区	土師器	鉢形器台	-	(19.6)	-	石英・角閃石・長石	ハケまたはナデ	不明	良好	淡黄褐色	外面沈線による縁刻文様あり	
第52図-10	6号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	-	-	石英・長石	不明	不明	良好	淡黄褐色		
第52図-11	6号竪穴住居	H-2区	土師器	鉢	-	15.2	13.0	石英・角閃石・赤色粒	ハケ	ハケ	良好	淡黄灰褐色	図版19-7	
第52図-12	6号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	16.4	11.9	14.4	石英・角閃石・白色粒	タタキ後ハケ	ハケ	良好	明黄灰褐色		
第52図-13	6号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	(12.2)	-	石英・角閃石・長石	ハケ	ナデ	良好	暗黄褐色		
第52図-14	6号竪穴住居	H-2区	土師器	鉢	11.5	13.7	16.9	石英・長石・金雲母	不明	ハケ	良好	淡黄褐色	図版19-8	
第52図-15	6号竪穴住居	H-2区	土師器	小形器台	9.3	7.9	-	石英・角閃石・赤色粒	ヘラミガキ	ナデ	良好	淡黄白灰色	図版19-9	
第60図-1	8号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	15.6	-	石英・角閃石・長石	不明	ハケ	良好	淡黄褐色	図版19-12	
第60図-2	8号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	-	-	石英・角閃石・砂粒	不明	不明	良好	淡黄褐色		
第60図-3	8号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	-	-	石英・長石・黒曜石	ナデ	ナデ	良好	灰白色		
第60図-4	8号竪穴住居	H-2区	土師器	二重口縁甕	-	-	-	石英・角閃石・長石	ヨコナデ	ナデ	良好	淡黄褐色		
第60図-5	8号竪穴住居	H-2区	土師器	碗	4.0	9.7	-	石英・角閃石	ナデ	ナデ	良好	淡黄褐色	図版19-14	
第60図-6	7A号竪穴住居	H-2区	土師器	鉢	6.0	10.3	-	石英・角閃石・長石	不明	不明	良好	淡黄褐色 外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	図版19-11	
第60図-7	8号竪穴住居	H-2区	土師器	小型鉢	7.0	8.8	8.0	砂粒	不明	不明	良好	淡黄褐色	図版19-10	

第12表 小迫辻原遺跡 H区 出土土器観察表⑥

博覧番号	出土位置・遺構	調査区	種別	器種	法量 () つきは復元径 (cm)			胎土	脚 趾		焼成	色調	備考	図版番号
					器高	口径	胴部最大径		底径	外 面				
第60図-8	8号竪穴住居	H-2区	土師器	高坏	-	20.0	-	石英・角閃石・長石	ナデ	ナデ	良好		図版20-1	
第60図-9	8号竪穴住居	H-2区	土師器	高坏	-	-	(13.6)	石英・角閃石・長石	不明	ナデ	良好	淡赤褐色	図版20-2	
第60図-10	9号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	-	-	石英・角閃石・長石	不明	不明	良好	淡青褐色		
第60図-11	9号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	-	-	長石・角閃石	不明	ヘラケズリ	良好	淡青褐色		
第60図-12	9号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	14.8	15.4	角閃石・赤色粒	ハケ	ハケ後ヘラケズリ	良好	淡青褐色	図版20-3	
第60図-14	9号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	22.2	-	石英・角閃石	ナデ	ハケ後ナデ	良好	外：淡青褐色 内：淡赤褐色		
第60図-15	9号竪穴住居	H-2区	土師器	甕	-	(14.2)	-	石英・長石・角閃石	ハケ	ヘラケズリ	良好	淡青褐色		
第60図-16	9号竪穴住居	H-2区	土師器	厨付碗	-	(15.5)	-	石英・長石・角閃石・赤色粒	ハケ後ナデ	ナデ	良好	淡青灰色		
第60図-17	9号竪穴住居	H-2区	土師器	碗	-	11.3	-	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良好	淡青褐色	図版19-4	
第60図-18	9号竪穴住居	H-2区	土師器	碗	5.0	-	-	石英・長石	ナデ	ヘラケズリ	良好	淡赤褐色		
第60図-19	9号竪穴住居	H-2区	土師器	手捏土器	(3.4)	(6.1)	-	石英・長石	指頭任痕跡著	指頭任痕跡著	良好	赤褐色	図版19-6	
第60図-20	9号竪穴住居	H-2区	土師器	手捏土器	3.7	6.8	-	石英・長石	指頭任痕跡著	指頭任痕跡著	良好	赤褐色	図版19-5	
第69図-1	10号竪穴住居	H-2区	土師器	罎	-	(12.6)	14.2	石英・角閃石・白色粒	ハケ	板ナデ	良好	黄灰白色	図版20-11	
第69図-2	10号竪穴住居	H-2区	土師器	罎	22.1	(14.8)	14.6	石英・角閃石	ハケ	ハケ	良好	明黄灰褐色	図版20-8	
第69図-3	10号竪穴住居	H-2区	土師器	罎	-	-	19.2	石英・角閃石・白色粒	ハケ	ハケ	良好	暗黄褐色		
第69図-4	10号竪穴住居	H-2区	土師器	罎	-	-	7.2	石英・角閃石・白色粒・赤色粒	ハケ	ハケ	良好	外：黄灰褐色 内：淡青褐色		
第69図-5	10号竪穴住居	H-2区	土師器	小形钵台	-	-	-	石英・角閃石	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	不良	淡黄灰白色		
第69図-6	10号竪穴住居	H-2区	土師器	碗	4.0	9.4	-	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良好	暗黄褐色	図版20-9	
第69図-7	10号竪穴住居	H-2区	土師器	台付碗	5.8	9.3	-	石英・角閃石	ヘラミガキ	ハケ・ヘラミガキ	良好	明黄灰褐色	図版20-7	
第69図-8	10号竪穴住居	H-2区	土師器	厨付碗	-	-	-	霏母・砂粒	ヘラミガキ	外側ヘラミガキ 内側ヘラミガキ	良好	明黄褐色	図版20-10	
第69図-9	10号竪穴住居	H-2区	土師器	厨付碗	-	9.5	-	石英・角閃石・白色粒・赤色粒	ヘラミガキ	外側ヘラミガキ 内側ヘラミガキ	良好	明黄灰褐色		
第75図-1	表面採集	H-2区	弥生土器	罎	-	-	-	角閃石	ハケ	ナデ	良好	淡青褐色		
第79図-1	表面採集	H-3区	土師器	罎	-	-	(6.0)	石英・長石	ナデ	ナデ	良好	淡青褐色		
第79図-2	3号竪穴住居	H-3区	土師器	罎	-	-	(7.4)	石英・長石・角閃石	ハケ	ナデ	良好	淡青褐色		

第13表 小迫辻原遺跡 H区 出土土器観察表①

挿図番号	出土位置・遺構	調査区	種別	器種	法量 () つきは復元径 (cm)				胎土	調整		焼成	色調	備考	図版番号
					器高	口径	胴部最大径	底径		外面	内面				
第79図-3	表面採集	H-3区	土師器	壺	-	-	-	(6.9)	石英・長石・角閃石	ナテ		良好	淡黄褐色		
第82図-1	1号溝埋土	H-3区	土師器	高坏	-	-	-	-	石英・長石・金雲母	不明		良好	淡黄褐色	穿孔3穴残る。	
第82図-2	表面採集	H-3区	土師器	壺	-	-	-	4.6	石英・長石・角閃石	不明		不良	黄褐色		
第84図-1	3号溝埋土	H-3区	青磁	碗	-	-	-	-	緻密			良好	淡緑色		
第86図-1	3号溝埋土	H-3区	陶器	鉢	-	-	-	-	緻密			良好	暗茶色		

第 14 表 小迫辻原遺跡 H区 出土石器観察表

挿図番号	出土遺構	位置・層序 () は取り上げ番号	器種	石材	() は破片・単位 (cm)			重量 (単位 g)	備考	図版番号
					長さ	幅	厚さ			
第14図-1	H-1区1号溝	下層一括	石匙	安山岩	(5.0)	3.4	0.9	16.2	一部欠損	図版12-8
第14図-2	H-1区1号溝	上層一括	砥石	砂岩	(3.8)	(2.1)	0.7	9.4	一部欠損	図版12-7
第14図-3	H-1区1号溝	上層一括	スクレイパー	安山岩	(10.1)	5.3	2.5	115.6	一部欠損	図版12-9
第14図-4	H-1区1号溝	上層一括	打製石斧	粘板岩	(5.7)	(5.7)	0.5	21.2	欠損品	図版12-6
第14図-5	H-1区1号溝	上層一括	打製石斧	粘板岩	11.8	6.7	1.5	173.6	一部欠損	図版12-5
第14図-6	H-1区1号溝	上層一括	打製石斧	安山岩	10.4	7.5	2.5	344.7	自然面を残す	図版12-4
第14図-7	H-1区1号溝	上層一括	打製石斧	安山岩	15.5	10.1	2.6	653.3	自然面を残す	図版12-3
第23図-1	H-1区4号溝	埋土一括	磨製石斧	蛇文岩	(10.9)	5.1	4.6	479.3	一部欠損	—
第31図-1	H-2区3号土坑	埋土一括	砥石	砂岩	6.4	1.9	1.7	29.1	砥面6面	図版21-7
第31図-2	H-2区3号土坑	床面上5cm(8)	砥石	砂岩	4.7	4.3	1.5	44.7	一部欠損、砥面6面	—
第44図-1	H-2区1号竪穴住居跡	住居内土坑(22)	砥石	安山岩	21.2	11.5	5.9	1576.7	砥面6面、入え付着	図版21-9
第44図-2	H-2区1号竪穴住居跡	床面上13cm(4)	打製石斧	安山岩	15.2	7.8	3.4	378.4	—	図版21-10
第49図-1	H-2区3号A竪穴住居跡	床面上10cm(5)	砥石	砂岩	(8.6)	(5.2)	(4.2)	254.1	欠損品、砥面1面	—
第49図-2	H-2区3号A竪穴住居跡	床面直上(6)	砥石	砂岩	7.2	3.2	1.5	44.4	砥石4面	図版21-6
第61図-1	H-2区8号竪穴住居跡	埋土一括	石胞丁	輝緑凝灰岩	4.5	3.4	0.5	17.8	欠損品	図版21-4
第66図-1	H-2区9号A竪穴住居跡	埋土一括	砥石	砂岩	6.2	5.8	2.6	126.2	砥面5面	図版21-8
第68図-1	H-2区10号竪穴住居跡	埋土一括	砥石	砂岩	3.2	1.3	1.4	11.6	一部欠損、砥面5面	図版21-5
第76図-1	H-2区表採		石鏃	黒曜石(姫島産)	2.2	1.1	0.3	0.7	一部欠損	—
第80図-1	H-3区1号溝	埋土一括	石胞丁	頁岩	(2.5)	3.3	0.6	7.4	欠損品	—
第88図-1	H-4区2トレンチ	表土一括	打製石斧	安山岩	(16.6)	9.1	1.8	361.7	一部欠損	—

第 15 表 小迫辻原遺跡 H区 出土鉄器観察表

挿図番号	出土遺構	位置・層序	器種	規格			単位 (cm)		重量 (単位 g)	装着痕	備考	図版番号
				全長	刃部長	刃部幅	厚さ					
第15図-1	H-1区1号溝	上層一括	鉄鏃	(4.8)	—	0.5	0.5	3.6	なし	基部のみ	—	
第21図-1	H-1区2号溝	1d層(16)	鉄鏃	5.3	3.2	1.5	0.6	6.5	なし		図版12-10	
第42図-1	H-2区1号竪穴住居跡	床上10cm(9)	鉄鏃	(9.2)	—	0.5	0.5	4.6	なし	基部のみ	図版21-17	
第42図-2	H-2区1号竪穴住居跡	床上10cm(8)	刀子	(5.3)	3.6	0.6	0.4	5.4	なし	先端、基部欠損	図版21-11	
第50図-1	H-2区3号B竪穴住居跡	床面直上(35)	鉄鏃	(6.6)	—	2.2	0.5	11.1	なし	基部欠損、柳葉形	図版21-15	
第50図-2	H-2区3号A竪穴住居跡	床上20cm(3)	鉄鎌	(6.5)	—	1.8	0.4	14.1	なし	欠損	図版21-12	
第53図-1	H-2区5号竪穴住居跡	床上10cm(8, 9)	ヤリガンナ	(15.3)	—	1.1	0.2	15.3	なし	両端欠損	図版21-18	
第65図-1	H-2区9号A竪穴住居跡	埋土一括	鉄鏃	(4.8)	—	1.5	0.4	10.2	なし	基部欠損、柳葉形	図版21-14	
第65図-2	H-2区9号A竪穴住居跡	埋土一括	鉄鎌	(3.5)	—	1.5	0.1	3.0	なし	欠損品	図版21-13	
第68図-2	H-2区10号竪穴住居跡	床上10cm(6)	鉄鏃	(5.2)	—	1.3	0.4	9.6	なし	先端、基部欠損、柳葉形	図版21-16	

第 16 表 小迫辻原遺跡 H 区 出土玉類観察表

挿図番号	出土遺構	位置・層序・取上げNo.	器種	石材	単位 (cm)		重量 (単位g)	備考	図版番号
					長さ	幅			
第54図-1	H-2区5号竪穴住居跡	屋内土坑上層(3)	小玉	ガラス	0.4	0.4	0.1	コバルトブルー	

報 告 書 抄 録

ふりがな	おごこつじばるいせき		
書名	小迫辻原遺跡		
副書名	H区編		
巻次	Ⅱ		
シリーズ名	日田地区遺跡群発掘調査報告／日田市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1／15		
編著者名	土居和幸		
編集機関	日田市教育委員会		
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1		
発行年月日	2000年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おごこつじばるいせき 小迫辻原遺跡	おおいた ひた 大分県日田市 おごこ つじばる 大字小迫字辻原 わたり いちぎで 大字渡里字一木出	44204-6	651002	33度20分	130度56分	H-1区 19901101 ～19910324 H-2区 19910826 ～19920325 H-3区 19930907 ～19940228 H-4区 19940131 ～19940204	H区 5,338㎡ (H-1区 1,160㎡) (H-2区 3,450㎡) (H-3区 755㎡) (H-4区 23㎡)	地力増進事業 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小迫辻原遺跡	集落跡 環濠	弥生時代 古墳時代 前期前半 中世 近世	竪穴住居跡1軒、土坑17基、 掘立柱建物跡3棟、小児用甕 棺2基、方形周溝遺構1基 環濠2条、竪穴住居跡13軒、 土坑2基、掘立柱建物跡3棟 掘立柱建物2棟、溝2条 土坑1基、溝2条	土器、石器 土器、石器、鉄器、玉 土師質土器、輸入陶磁器など 近世陶磁器	重複する2つの環濠。 1つは張出部を有する。

小迫辻原遺跡Ⅱ

— H区編 —

日田地区遺跡群発掘調査報告1
日田市埋蔵文化財調査報告書第15集

発 行

日田市教育委員会

発行年月日

平成12年3月31日

印 刷

(有)朝日堂印刷

日田市歴史文化財調査報告書第13集

小笠原遺跡Ⅱ 日 区 編

二〇〇〇年

日 田 市 教 育 委 員 会